

# 奇譚クラス

新しい異指文紙誌

奇譚クラス

KITAN CLUB

9

9

クラブビヤ  
『アス・ミーン・アラ・カルト』

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



緊縛フォト撮影の実際

『高手小手縛りの一例』



定価 百五十拾円



# 五百円 別冊 別特 限定版 特別号 オムニバス



**口絵シーン解説の頁**  
四馬車氏の作品三十二点に  
対し、その場面々々の情景を  
活字に依つて描出し、興味を  
倍加する三十二篇の解説文。

第一 グラビヤ											
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目
重宝	不	目	目	目	目	目	目	目	目	目	目



- 第一 口絵**
- 大現きショー
  - 鬼面顔の鎖
  - 耐苦のハシゴ
  - 墓地に揺れる呪風
  - 迫り来る洗練器
  - 木立ちの中の囚女
  - 煙に咲いた麗顔
  - 非情の鞭
  - 電灯に揺れる舌閃
  - 回廊木馬
  - 刺青される女
  - 舌閃の宿り
  - アクロバチスト急造
  - 恐怖のコンクリート部屋
  - 空倉庫の怪事
  - 暴徒の部屋
  - 黒皮の手島
  - ゴム紐との闘い
  - 受難の屋敷
  - 交響舞踏 縛縛り
  - 消えぬ灯
  - 森の精
  - 強まりゆく痛覚
  - 迫り来る悪魔
  - 妻という名の犬
  - 罫上のいけにえ
  - 狙われる笑因
  - 車中のもがき
  - 踏みつけられる女
  - ハンモック椅子
  - 耐苦の座褥
  - 鎖と鎖

表紙裏 第二表紙 第三表紙 新製品寄贈機

お申込先  
大阪市阿倍野郵便局  
私書箱第十四号  
天 星 社  
振替口座 大阪五〇〇四二番

## 少年部 残部 マゾヒズム特集号 (定価三百円) 奉仕 二百円 特価 二百円

満天下Mマニヤの渴望久しきマゾ特集愈々ここに発売  
◎口絵並にグラビヤ・フォト、本文の隅から隅に至るまで、総てM派にて独占した「マゾヒズム党」特集の決定版！

美女にしたいがられ、佳人に騎乗され、麗人に責められる男の姿。マゾストの見果てぬ夢を、ズバリ具現する画筆の牙えとレンズのリアルさ。

マゾヒズムチック画廊  
マゾ・フォト・ギャラリー  
生きリフト——積古まわし  
矮人哀歌——執事の折念  
美妓の嘲笑——揺がぬ重圧  
道場の鬼百合——意趣返し  
グラビア・フォト・セクシオン  
マゾ・フォト・ギャラリー

写真版  
ドミナのポーズ——怠慢奴隷譚責  
征服者の嘲笑——室内馬に好過  
珍獣出現——屈伏の瞬間  
ドミナの専門マッパ  
服従の宣誓  
スナッパ集

マニアを驚きさせ、魅了させたマゾヒズム小説の真髓。美女の足下に悶えながら幸福感に酔い惚れるマゾ男性の生息を描き出した数々の問題作……

二百字讃歌  
あわれ誠一郎……真砂十四郎  
捕虜の洗礼……日文卅古六  
美しい暴君……出久 信男  
あるマゾ男の告白……馬 族 保  
幸福なる隷属の告白……才 昭 吾  
祭壇に君臨する脚……鐘 坊 志  
ガイナスの重石……馬 族 保  
囚獄の思い出……真砂十四郎  
美しき悪魔の微笑……真不二夫  
実験室にて……角 田 平 八  
牛乳風呂の饗宴……馬 族 保  
サジズムの女……才 昭 吾  
被虐 哀 歌……真金銀次郎  
挿絵・カット……北原純子、杉原虹児





# 絢を競う艶姿115ポーズ

限定版特別号 第三弾！

## 『緊縛写真グラフィック集』

特価五百円 略号「グラフ」

表紙三度刷、内容グラビヤ印刷

画題「縛り人形」

絹川文代  
花坂道子

## ◎豪華な内容とモデル陣◎

巻頭裸身緊縛一頁大扉

ながしめ……………絹川文代

荒縄全裸緊縛……………大塚啓子

落ちた腰巻九態（野外）

円い乳房……………愛川悦子

浴室におびえて九態……………愛川悦子

縄の陶酔……………絹川文代

恍惚境 悦虚の末……………絹川文代

いためられた乳房……………桜井葉子

耐えられる……………桜井葉子

月経帯の強制 二態……………大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態……………大塚啓子

全裸悦虚態……………大塚啓子

白痴美の誘惑……………大塚啓子

はねかえす縄……………大塚啓子

うろうろ許して……………大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて

六態……………大塚啓子

優姿ハダカ縛り……………絹川文代

忘却の彼方……………絹川文代



股間縛り背正面二態……………絹川文代

捕われの麗人二態……………絹川文代

湯責め二態……………大塚啓子

浴室にて責める四態……………大塚啓子

何にしようと言ふの……………桜井葉子

新人書態集八景……………桜井葉子

いじめぬく二態……………絹川文代

メンスバンドの猿轡……………絹川文代

観念横臥の四二態……………絹川文代

変形手足しばり四態……………愛川悦子

裸身をさらして六態……………愛川悦子

豊満くらべ 九態……………桜井葉子

亀甲縛り正背面二態……………愛川悦子

怨めしき縄目二態……………大塚啓子

後手首腰縄 四態……………大塚啓子

新人緊縛ポーズ集六態……………桜井葉子

隅から隅まで四態……………愛川悦子

鏡面万華鏡様（裏と表）……………愛川悦子

四十項目 百十五ポーズ

限定版特別号、第一弾！

## 『緊縛フォトアラベスク』

略号（あらべすく） 特価 五百円

△収載内容△二十六項目、写真七十七葉

1、鏡……………愛川悦子

2、銘花二輪……………花坂道子

3、鉄鎖……………大塚啓子

4、諦観……………大塚啓子

5、庭園にて……………絹川文代

6、謎の微笑……………田中芳代

7、田中悠子表情集（一）

8、誇る脚線美……………

9、この足どうかしら……………田代悠子

10、裏と表と……………愛川悦子

11、落陽の丘……………愛川悦子

12、ポリウムの花園……………大塚啓子

13、緊縛美の綾……………大塚啓子

14、奔放な肢体……………大塚啓子

15、鏡台と腰巻……………花坂道子

16、腰巻と鏡台……………花坂道子

17、奇妙な休憩……………絹川文代

18、田代悠子表情集（二）

19、脱がされた高手小手……………愛川悦子

20、亀甲縛り……………愛川悦子

21、吊責折檻……………村井知可子

22、立木縛り……………村井知可子

23、豊醇……………愛川悦子

24、乱れ髪三景……………大塚啓子

25、椅子と絨緞……………愛川悦子

26、姐上の美鯉……………絹川文代

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。（限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います）





奇譚クラブ 九月特大号 目次

目次裏一風俗川柳アイディア選」……佐保忍「作 滝れい子「画

第一グラビヤ

アブ・シーン・ア・ラ・カルト  
姐御縛らる……相川文代  
逆さ吊り……梨花修紀子  
美しき吊人形……大塚啓子  
海老……東浦ひかる

第一口絵

妊婦の切腹……滝れい子・画  
標りマシンと伸長測定機の説明……南村俊平・画  
足の裏のお灸……四馬 孝・画  
受苦のシトネ……四馬 孝・画  
地下室の毒蜘蛛……滝れい子・画  
奇妙な性癖……滝れい子・画  
座敷牢の女王とスパイ……滝れい子・画

第二グラビヤ

ロックの機関……梨花修紀子  
逆エビ縛り……大塚啓子  
珍妙な飾物……東浦ひかる  
尻の下に敷かれてみたい  
振の乱れ……花本京子  
タイツ万華鏡……前本妙

第二口絵

禁縛アオト撮影の実際(高千穂手縛りの一環)……塚本敏三

要足の記録……佐藤紀男……60

きき一埋もれた日記……井上ひさ子……64

奴隷の食事マナー(影の国)……雪使 遥……72

妊婦の切腹を再現した話……菊丸三郎……86

連環小説 狩猟者(第九回)……佐度 雅……92

女子美術志シリーズ「上手投」……雪崎京人……99

アクロバット 魔能記の結末……水田真紀子……100

きき 奇妙な性癖「耳が」……竹村弓子……108

連環小説 宇宙のどこかで……松治麻造……112

女傑伝 元女力士の懐旧談……雪城京人……130

クラシック・ノット「流麗に魅せられて」……水沢 操……134

奇クサロン

「奇クサロン」に寄す……村上梨花修紀子さまへ……139

連作「少女」……隅目かくし……140

新書エッセイ「赤やんぼ」……マゾヒズム漫歩……141

人間家具「美しいテーブル」……神沢のノット……142

ふんどし道楽……女と……143

謎しき……空想……144

連作「少女」ズベ公……初版についての……145

私の理想……146

フェニシストの露骨「ブロースへの追想」……並原新一……155

紅毛ヤリとストの手記 屈辱の一夜……恒川夏彦……162

研究 赤松義夫「読者通信」に……172

新作 三足の毒蜘蛛……全田清彦……176

ある手記 灰色の部屋……佐度健児……183

いいたいほうだい……186

愛好家の記録……とさきる(ひ)……188

爺さんと赤い腰巻……古田野 暮……190

香い痕跡 古城館の妖精……水見龍也……192

告白 縄の魅力……川島孝子……206

アクロバット 曲馬団の娘……上田隆子……214

タレンサーの告白……牧村典次……219

読者通信……227



# 風俗川柳アイデア選

家庭では身近か

漫画にはよくある

佐保忍作  
淹れい子画

図など

使わ  
れる

とん分出し  
だけで  
縛った  
かく  
やわら

若夫婦

子供にかえって  
縄あそび

脛の中矢が突き刺さり  
血が  
たれる

モンペエの紐切れ  
いなり

避難民

やくざ風リンチの  
スリル

盛場

腸  
器

オ  
マルとオム

セツトなり

口説く  
なり





アブ・シーン・ア・ラ・カルト

構成 塚本鉄三





姐御縛らる







手足吊り

絹川文代



逆さ吊り











鯨 縛 り

愛 川 悦 子











美しき吊人形

大塚啓子





組 写 真

# 恐怖の塩水





「いくらイヤだと言ったって、必ず飲ませてみせるゾ」



梨花悠紀子





「どんなに、もがいたって結局は飲まなくては、いられなくなるんだ」













海老責

東浦ひかる



酒 席 の 座 興

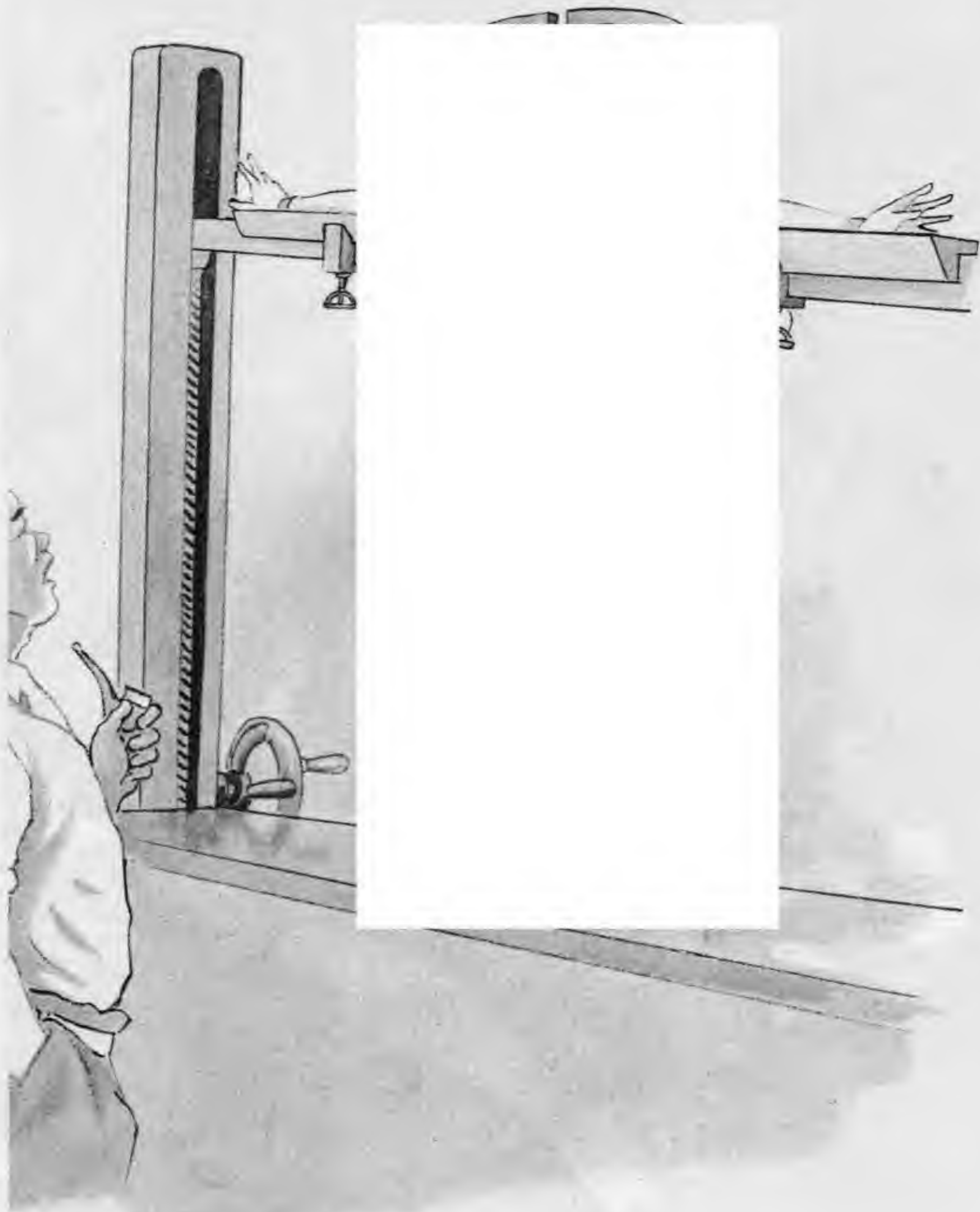




## 妊婦の切腹

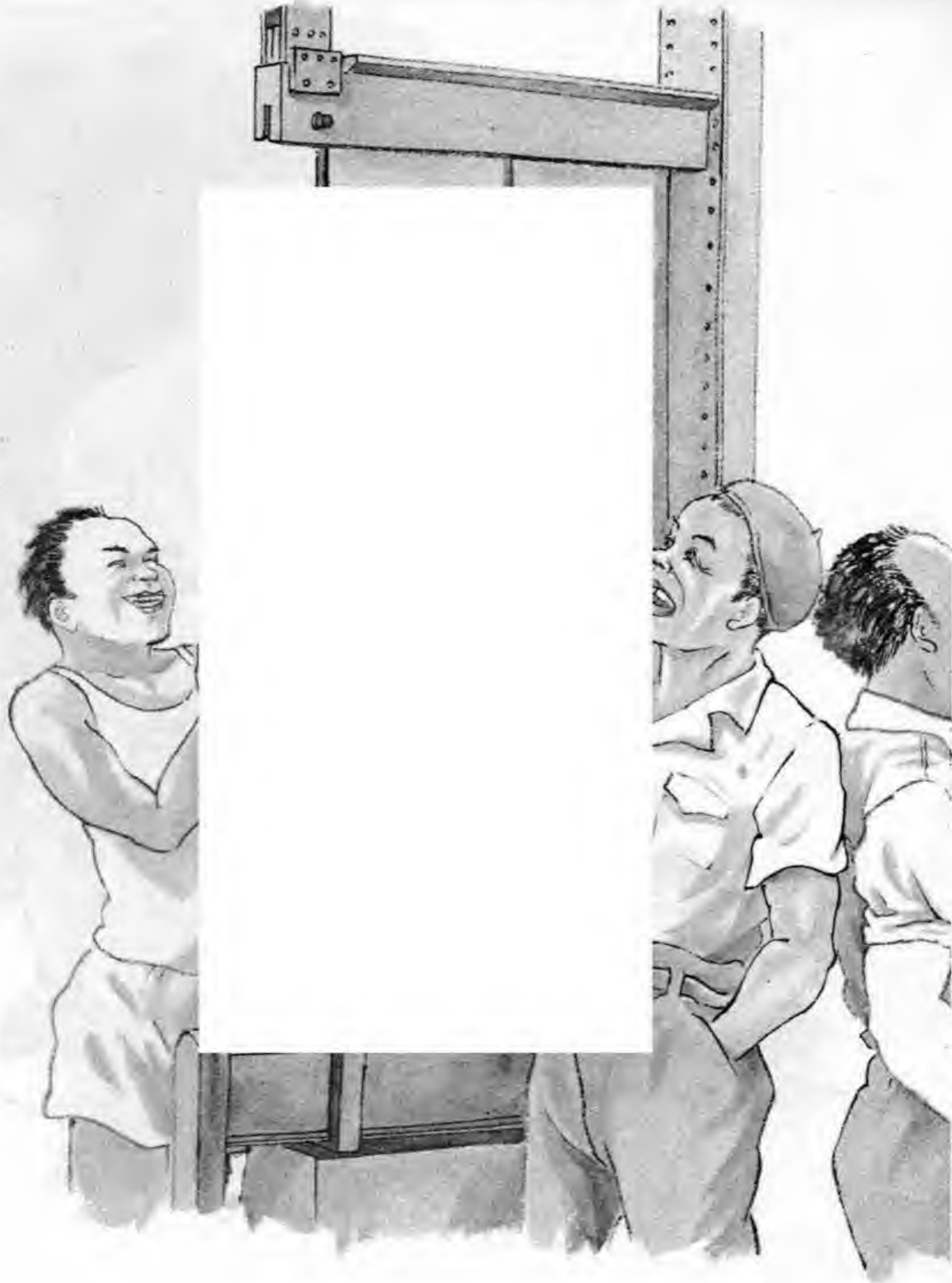
「お腹の子供諸共刃に伏して潔く不義の汚名に殉じよう」





「ホホウ、面白い機械を発明したもんだね」

「身体の伸長度と攪りに対する反応との相関関係を調べる機械でね。  
今第一回の実験をやっているところだ」



# 攪りマシンと伸長度測定機の發明

(南村俊平・画)





## 足の裏のお灸

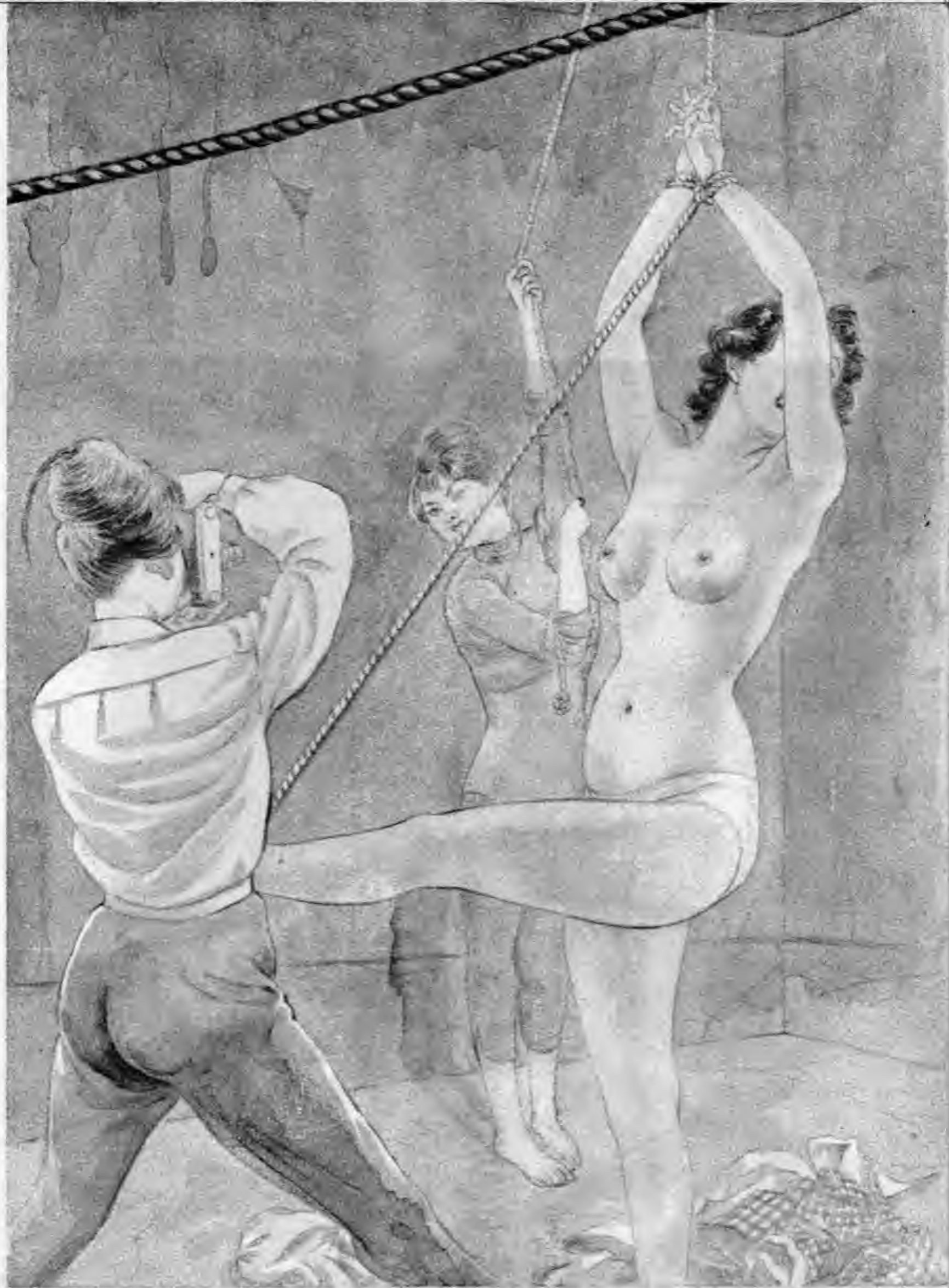
足の裏から頭のとっぺんへ抜ける熱さの激しさに彼女は身をよじろうとするが、男はそんなことにお構いなく……。

## 受苦のシトネ

「言わなきや言えるようにしてやるまでさ、その柔らかな肌によ、この鞭が案外似合うかもしれねえからナ」







## 地下室の毒蜘蛛

「あッいや、やめて、やめて」「もうだめよ、カメラにいゝポーズを撮ってしまったわよ。」

## 奇妙な性癖 「耳垢」

秘密の洞窟を探るように私は自分でも胸がときどきするのをどうすることもできなかった。





## 座敷牢の女王とスパイ

女王三十才、ブラジャーとパンティの上に赤マントを着て革のムチを持って  
いる。スパイ二十五才、連日の拷問に疲れやせこけている。

後手にしぼられ、足はくさりでつながれ、人間サドルの責を受けている。



ローソクの拷問







柱と荒縄

梨花悠紀子







逆エビ縛り

大塚啓子





マニヤの切腹ポーズ





モデル（切腹マニヤ）愛読者某女



珍妙な飾物

東浦ひかる



鼻責め二題







尻の下に敷かれてみたい。



“ちよいと一休み”



Mモデル 愛読者R生氏





映  
し  
て  
み  
る

熱  
海  
容  
子



裾  
の  
み  
だ  
れ

花  
本  
京  
子



花羞しき

大井千代子





前  
本  
妙  
子



タ  
イ  
ツ  
萬  
華  
鏡





彫  
像



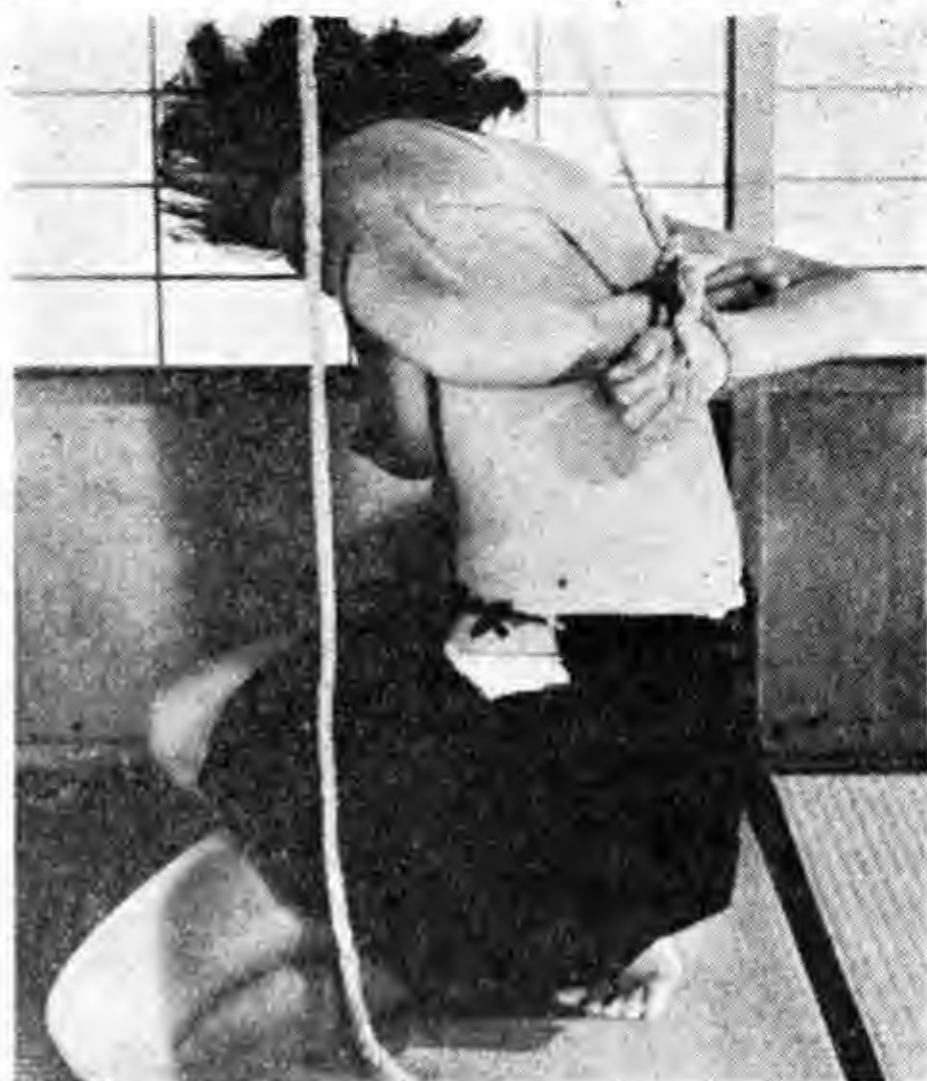
大  
塚  
啓  
子

# 緊縛フोट撮影の実際

— 高手小手縛りの一例 —

塚 本 鉄 三

△実際に撮影した写真によって、各種緊縛の实例を解説します。



- モデル.....梨花悠紀子
- 撮影.....塚本 鉄三
- カメラ.....アサヒペンタックスS2
- レンズ.....タクマー八十三ミリF1.9
- フィルム.....ネオパンスS
- 現像液.....D76とD72
- 印画紙.....シーガルF2・F3
- 照明用具(ウエスト・シネライト一個、レ





フレクター・ランプ三〇〇W三個、クリップ三個、スポット・ランプ一個、ベビー・フラッド二五〇W一個、コード数本  
小道具（六米古綿ロープ一本）  
場所（十帖の和室一間を使用す）

○  
前月号の「亀甲縛りの一例」に引続いて、今月号では、「高手小手縛り」の中で最もシンプルなものをお目にかきましょう。  
前の頁の上の写真でごらんのように、先ず第一着手として両方の手首を背後で合せてか

らロープで二巻きして止めます。

肥ったモデルでは、この縄尻を引きあげたところで両の手首は中々水平以上に上ることはないのですが、

柔軟な悠紀子さんでは、ぐつと肘が鋭角になるまで引き上げる事が出来ます。

さて、前頁の下の写真で示すように左の二の腕に巻きつけ、腋の下をくぐらせて引きつけます。これで上の写真になります。高手小手という言葉の、高手が二の腕に当り、

両手首が小手に当るのですから、これで、高手と小手の両方に、縄を掛けたことになりました。

左の二の腕に一巻きして胸へ縄をまわしたところが左の写真です。乳房の上側を通して胸を強調させるようにした方が目に感じがいでしょう。ごらんのように只一本のロープが乳房の上側を走っているだけで、なんと乳房がいきいきと生気を帯びてきたこと



でしょうか。但し印刷面では、両の乳房の膨隆が示す微妙なデテールは再現されないとは思いますが。

胸を通ってきた縄は右の二の腕を左の写真のように結びつけます。この縄さばきのように、よく肌を挟んでしまうことがあります。いずれの場合でも同じことですが、初めの縛

りかけのときは、特に力をいれて締めつけなくとも、あとになる程だんだんと締めてくるものですからある程度の手加減が必要です。殊に、今回のように、両手首を第一番に括ったときには余程緩く括ったつもりでも、縄をあちらこちらと掛けていくにつれて次第に締ってきて、非常な苦痛を与えることが往々に

してありますから注意を要します。左側の下の写真では右の二の腕を括り終えたところで、この縄尻を両手首のところではめたなら、一応の高手小手しかりが出来上がるわけです。両手首は二の腕と連結されることになりますから、そう無暗に下げて縄抜けすることも出来ないわけです。





左の写真をごらん下さい。今両手首の縄尻に連結しているところです。普通試みられてこれだけでも、相当の緊縛感が期待されるのではないかと思います。胸の上を通った縄が一本だけですから、見た目にはなんだか頼りないと思われるかもしれませんが、かえってごたごたと縄をむやみやたらに掛けまくった

のよりも、すつきりとしていて肌に対する縄の直接の影響力も大きい筈です。

さて、次の



縄捌きですが、先ず左頁の上の写真を見て頂きましょう。両手首で結んだ縄を再び右の二の腕へ返えして、ごらんのように二節になるように結び目を作ります。

いわば、これから第二段階の縄さばきに移行するわけです。そして右側の写真のよう

に胸へ回すのですが、今度は勿論乳房の下側を通します。乳房の中心を避けてその上と下に縄を掛けることによって、乳房本来の美しさを変形させることなく、その大きさと美形とを一層強調することが出来るのです。二の腕とか手首とかと違って、胸に巻いた縄は力いっぱい締めつけても締めつけすぎるといふことはないでしょう。いくら力を込めて締めつけたつもりでも、いつとはなしに緩んでくる

ことが多いものですから。

胸を回した縄は当然のことながら、今度は左の二の腕に戻ってきます。柔かい二の腕にぐっと喰い込む縄の感触、モデル嬢もすっかり縛られてしまったという観念した表情で次々と順序よく行われる縄さばきに全身を任しているといった恰好です。ここで一寸言い忘

れましたので言及しますが、今悠紀子さんが着用しているのは女学生用のブルマーです。これは読者からの着用させてほしいという要望がありましたので、特大のブルマーを購入して本日の特写に利用しました。それで



殊更下半身をカットしないで掲載してみまし

た。今回は上半身は縄の行方をはつきりさせるために裸

体としましたが、白のブラウスに黒のブルマーというとりあわせは清らかな感じで、この悠紀子さんには、ぴったりするだろうと考えます。

余談はさておき、さて縄配りの方は、いよいよ進展して左の腕を通した縄を後手首で止めると、左右の上膊にそれぞれ一節の括り目が出来上ることになります。

右の写真のように、ここで縄を止めても高





手小手緊縛としては一応整った型となるのです。六米のロープもここまでで殆ど残っていません。若し仮りに両の手首が痛いということになれば、一番最初の結び目を解くと、簡単に両手首は自由になってしまいます。複雑な縛り方の妙味というものは味あうことは出来ないかもしれませんが、オーソドックスな

高手小手縛りとしては割合面白く、縄も余り長いものを準備しなくてもよいので面倒がありません。が、しかし、これでは括



られた両手首が、水平、或はそれ以下になってしまつて、高々と手首の上った高手小手特有の緊縛感を味わうことが出来ない、といったウラミがあるかもしれせん。そんな不満を持たれる方のために、左の写真のよう

うに手首吊り上げの手段を考えてみましょう。写真では肩へかけて胸のロープへ連結しています。先ず最初に手首を引きあげ気味に、肩にかけた縄を胸の上側の縄に絡ませ、次いで下側の縄に絡ませます。この際、もう少し強烈を求めるならば、首縄として咽喉にまいて締めつけたならば被縛者は手首を下げると咽喉がしまり、咽喉の苦痛をやわらげようと思えば、どうしても両手首をぐっと肩口近くまであげていなければなら



ないということになります。今度の場合は、  
 そういった苦痛を殊更求めるというのではな  
 く、手首の水平より以下に下るのを防ぐとい  
 う意味で肩へかけてみたのです。実際、この  
 方が、ずっとモデル嬢にとっては楽なのです  
 が、しかし、両手首が吊り上げられるという  
 ことには変りはないのですから、締めつけぐ  
 あいによっては、肩の縄が肩胛骨に当って痛  
 いという結果も、今までには幾度となくあり  
 ました。下の写真のように胸に通った二本の

ロープに連結し終  
 ると、これで余っ  
 た縄を右肩へ回し  
 後手首へもってい  
 って止め縄をする  
 と出来上りです。  
 次頁の上の写真は  
 最後のしめくくり  
 をしているところ  
 ですが、ロープは

完全に皆、使用し尽し  
 ています。準備した縄  
 を最大限に活用したと  
 いうことが出来ます。  
 しめくくりの縄を締め  
 つければ締めつける程  
 手首は挙ってきますが  
 今は痛みつけるといっ  
 たことが目的ではなく  
 単に縛りの過程と型と  
 を示すことが目的なの

で、適当なところで結んでおきます。  
 両手首を揃えて括ったところから出発して  
 最後の止め縄も背後にきました。そのため、  
 いささか手首のところが、ごたごたとした感  
 じですが、途中で止めるよりは美観の上から  
 いったい、確実さの点から考えても勝ってい  
 ると思います。

さて、出来上りの写真をごらんにいれまし  
 ょう。正面背面とも左右均斉のとれた縄配り  
 が見られるのですが、これはあくまでも、お  
 仕置とか、拷問とか、捕縛といった意味とは







別に、高手小手という、女性緊縛の美しさを示すためのものですから、早縄というような縄の掛け方とは違ったものであることを諒解いただきたいと思います。

背面は大体よいとして、前面が乳房の上側と下側の二本だけというのは少し淋しい感じですし、背後から肩越しに引っぱられると、上へあがってしまうおそれがあります。

従ってもう少し縄の長さに余裕があるようだったらウエストをぎゅっと締めつけ、胸の中央の縄と連結したなら、いささかしまりのある縄配りとなったことだろうと思います。

そして欲をいえば、太股のつけ根をくびるように括り、要すれば股間しぼりを併用したならば一層面白いと考えますが、今回は簡単な高手小手縛りの一例を御紹介することだったので、これ位のところで終りにしたいと思います。



新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

新装九月特大号

1961年 9 月 号

(第15巻 第9号 通刊第157号)







# 素足の記録

佐藤紀男

「春の風素足になった娘が通り」——まことに健康で季節感にあふれた情景です。

ところで、素足ファンにとっては、街に春風が吹き出すのを待ちかねたように、娘さん達が足袋や靴下を脱ぎすてて、白い素足をむき出しにする季節はまた楽しからずやでありましょう。いまはもうその季節もたけなわですが、つぎにわたしは、その素足について気付いた、いくつかの挿話をあげてみたいと思います。どれも小さなことですが、想像や作りばなしは一つもなく、みな事実の記録です。

## (素足コンクール)

何年か前に、銀座のデパートの屋上で、素足のコンクールが行われたことがあります。

これは、当時めずらしいこととして、都下の各紙に、おお

むね写真三段、その下に記事二段、計五段もつぶして報道されたニュースであります。いま、当時の新聞から代表的な記事を再録してみますと——

「うすら寒い二十五日午前十一時から、銀座の松坂屋デパートの屋上で、某雑誌社と映画会社タイアップのハダシ美人コンクールが行われた。これは、素足の美しい酒場の踊り子が一躍伯爵夫人に出世するという女の生涯を描いた映画「裸足の伯爵夫人」(エヴァ・ガードナー主演)が今年度アカデミー賞の最有力候補作品となっているが、この映画にちなんで、日本一の素足の美人を選び出そうというのがその狙い。応募者は、十七才から二十三才までのお嬢さんがざっと百人、その半数は女学生で、屋上中央に設けられた吹きさらしの台上に、素足をニュッと出して、わが足の美を競った。審査員の映画評論家清水俊二氏、美容家芝山みよか女史、高野二三男



つぎは、ロンドンに現われた、靴みがきならぬ御婦人の足の爪をみかくという新商売のおはなし。

### (新商売ツメみがき)

これは、はじめに書いたように、各紙が随分大きく取り扱ったが(中には六段費した新聞紙もあった)。これはひっきょう物めずらしいからで、アメリカ辺りでは、この種のこととは始終行われているそうで、したがって、これほどのニュース・パリエーはないのかもしれない。ニュースというものはある程度稀少性がないと成り立たない。猫が鼠を喰い殺してもニュースにならないが、鼠が猫を喰い殺せばニュースになるようなものでしょうか。

画伯、ディディナー隅田房子女史などの先生方も、すっかり照れてニヤニヤ。あす二十六日午後一時から、日比谷公会堂で東京の予選通過者二十名、大阪からも五名加わって最後の決選という次第。入選者はニューフェース推せんと、結婚衣しょうをはじめ、靴、化粧品など、時価十萬円の副賞がどっさり。美しい娘さんの素足を見ようと、物見高いお客さんが屋上にワンサとつめかけて、時ならない眠いだった」(二十九年十月二十五日、各紙夕刊)



新聞記事によると、こうである。「ロンドンのハイドパークのコーナーに、御婦人の足のツメをみかくという新商売が登場した。パット・ダウンスさんという四十八才のくつ屋さんが考え出したもの。お値段は片足ごとに六ペンス(約二十五円)というから大変安い。これで商売になるだろうかと心配するお方は、この写真をよくみてからお考え下さい」(キーストン、三十四年十月十日、産経夕刊海外トピックス欄)





とあり、写真では、ちょうど一人の妙齡の御婦人が右の靴を脱ぎ、ニュッと素足を台の上に乗せて、ツメをみがかせているところです。

まさか片足だけという人はいないでしょうから、両方で五十円としてもたしかに高くない。それで商売が成り立つのは数でコナすというわけで、案外志望者が多いとみえます。しかし、それにしても、足のツメみがきという商売は分りますが、室内ではなく、屋外で、しかも人通りのある公園で繁昌するというのが、ちょっと面白いと思います。人前で素足をみがかせる御婦人の方は、はずかしくないものでしょうか。あるいは、それどころか男子が靴をみがかせるときのように、ちょっとした優越感でも起るものでしょうか。

### (ペディキュアする)

#### 小林千登勢さん

ツメみがきといえば、いつかの週刊平凡のグラビア頁を、NHKの秘蔵っ子女優といわれる小林千登勢さんが、これは自身で足の爪をみがいっている写真が、一頁大で飾ったことがあります。



た。これは、従来よくあるような女優さんがしゃがんで足の爪を切っている式の有りきたりのものでなく、スラックスをはいた小林さんが、自宅の居間の片隅に腰をおろし、右足はそのまま前にやや折り曲げて出し、左足を高さ一米近くの小卓の上にエイッとばかりに載せ

(従って、カカトが卓の上につき、足はほぼ垂直で足指は天井を向く) その足を左手でギュッと握って多少手前の方に倒しながら、右手でもって足の爪の手入れに余念がないという、まことに小林さんらしいカラッとしたポーズであります。

### (浅丘ルリ子さんと)

#### 高峰三枝子さん

浅丘さんのは、いつか雑誌平凡に載った一頁大のもので、ルリちゃんがパンツ姿で床に腰をおろし、両膝を立てて前に揃え、膝小僧から脛にかけて、へへのへのもへじか何かを大きく書いた写真。写真では近いものが大きく映るから、ルリちゃんの足の指とか爪の形まで、いとも大きく映っている、いたずらっぽい写真。



つぎに、女の足というと、谷崎潤一郎氏の「富美子の足」をはじめとして、たいいていその足に踏まれてみたいとか、いじめられたいとか、マゾ傾向と結びつくものが多いようですが、必ずしもそうとばかりも限らないので、サドと結びつくのもあるようです。その一例として、大分前のことですが、三田の図書館のトイレの中に（変なはなしになって恐縮ですが）、つぎのような落書があったのを憶えています。なんでも――

「高峰三枝子は捕われるや、直ちに靴下を脱がされ素足にされ、牢屋に収監される。三枝子は毎晩牢屋から引き出されて地下の密室に運ばれ、足鎖でつながれて素足をおもちゃにされて弄ばれる。反りかえるなまめかしい足の指。きれいな足の爪が花びらのようだ」

といったようなことだったと思います。

これなどは、サドとフェチと結びついたものといえましよう。

もつとも、さらに考えてみますと、落書の字面（ずら）は、ひどいけれども、ほんとうは、この人は熱烈な高峰さんの崇拜者で、高峰さんには、強い思慕の念をもっている。しかも、現実には高根の花で手が届かない。それで、高峰さんに対するコンプレックスが変形して、こんな落書きをして、自らを慰めているのかもしれない。

それで、もし、この人が実際に高峰さんの前に引き出されたら、たちまち高峰さんの足許にひれ伏してマゾに変わるのではないかという気がします。

同じ足の拷問でも、つぎのようなものは、刑罰の手段です。から又別です。それは、映画「ノートルダム・ド・セムシ男」の中に出てくるジーナ・ロブリジータが、足枷責めの拷問にかけられて、悲鳴をあげてノケゾる場面。それでジーナは簡単に無実の罪を白状し、責具を外してもらって、「ああ痛かった。息をつかせて」（字幕）とつぶやきながら、うずくまって、足の指をさすっている可憐な姿。

#### （閨秀作家の素足）

美人のはまれ高い日本の某閨秀作家が、何年か前にアメリカ大陸をドライブ旅行したときに、季節が恰度夏の真盛りだったので、出発前からいろいろ思案したあげく、ハキ物はもっぱら素足にスポンジ・サンダルということにして、大陸を駆けめぐって日本女性の素足の美しさを誇ってきたということです。

女史の素足（をわたしは未だ拝見したことはありませんが）なら、きっとその顔のようにきれいなことと思われます。そして、そのきれいな素足で、世界でも有名といわれる日本女性の足の美を代表し、外人の男達に見せて歩いたことは、まことに素晴らしい着想だったと感心しています。

素足の記録といえ、他にまだまだいろいろあると思います。が、気の付いたものだけを書きました。

（おわり）



## 埋もれた日記



井上白子

## 歪んだ花

× × ×

希望を信じませんでした。

幸福も願いませんでした。

すべての期待を捨てました。

誰からも愛されませんでした。

父母だけが、やさしくしてくれました。

それで自らを、慰めたのです。

御慈悲です。

神様、お赦し下さいませ。

× × ×

戦争とその終結は私の家の経済を斜陽化しました。姉は既に嫁いでいて、兄は内地で兵役解除になった後、M化学工場に就職し、父は小さな商事会社をつくって石鹼類や雑貨の販売を行っていました。女中さんは戦時中からいなくなっていましたので、私は母の家事を手伝う一方、二十一年から二十二年にかけて、守永という家に洋裁の個人教授を受けに通っていました。物資も豊富にな

りかけていたころでした。守永洋裁所には年頃の娘たちが五、六人、通っていました。独りぼっちの生活に馴れた私には、同じ年頃の同性の中にあって何か異端者であることを感じるのです。私は笑い興じる話の流れにもとけこめず、いつも取りのこされるのです。異端者であること、余計者の意識、このことを告白せずに、私の告白の目的は果されません。そこに私の心理を陰影づける鍵があるのです。

私は八才のとき、生命保険会社から契約を忌避されました。当時の私は線病質の体質で痩せて、いつも青白い顔色をしていて、手足は青血しているように赤い病的な色をしていたのです。一寸した変化にも発熱するし、少しの運動も息苦しく、度を過すと失心寸前の状態になるのです。心臓弁膜症という病名でした。医師によって多少の意見の違いはありましたが。

私は友達が異性を意識し始めるころから、私は決して将来、結婚することはないだろうと考え、心に決めていました。僅か九つか十の少女だった頃からです。その悲しい認識と決心が、私を異端者としての道へ追いやってしまったのではないのでしょうか。

私のA感覚への執着を、幼時性慾への停滞、又は退後性性格、自己愛の変形としてきめつけられることは、私にとって、あまりに一方的で容赦のないものに感じられます。結婚という女性の幸福への正常な慾求から、自らを禁絶したとき、私の心理は補償を求めて歪んでいき、元々素質のあったA感覚への陶醉が強められたのではないのでしょうか。それともこういうのが自己弁護の為の屁理屈というのでしょうか。

国民学校の高等科一年生（いまの中学校一年生と同年です）ぐらいで、恋文をもらったりする友達もいましたが、そういう人達の中で、私は何度も自己の限界状態を噛みしめるという劣等感の確證を重ねました。それが、私を過剰な孤独な遊戯へかりたてる結果となったとしても……ああ、やはり私は赦されたいでしょうね。誰に対してもない、私自身を汚辱の淵に追いやったということにおいて、私は秋が来て、水道の水が冷くなっても、更に冬の寒風が風呂場の板戸の透間から、私の裸身を凍らせることがあっても、孤独な遊戯の行為を自らの肉体に課するのです。蛇口にとりつけていたゴムホースは、もともとガ

ス管用のもので、茶色で断面が三角形をなしている、水道のホースより細目でした。蛇口にとりつけるときは細いので、少し苦心しますが、嘴管の代りにつくった、口紅の金属ケースに穴を開けたものを取りつけるには都合のよい太さでした。

禁断の抑制力と、疼くような慾望の間で、私の感情は、海藻のようにゆらぐのです。あるときは自制力が勝ち、他のときは慾望に引きづられるのです。そのうちに、だんだん自戒の念や後悔が薄らぎ、清潔への潔癖もなくなり、慾求に打ちのめされることが多くなるのでした。この時期が最も私の異常な遊戯が過剰であった季節でしょう。

私は幼い頃、非常に潔癖感が強かったと思います。下着が少し汚れていても気になりますし、味噌汁に味出しの煎子の頭や鱗が浮いていると食べる気がしないのです。食物への潔癖感は戦時中の食糧難が正しました。そのほかの不潔への嫌悪は、夜尿症や失禁、A粘膜への愛着と加虐が失わせてしまいました。それは他人の不潔さは嫌いだけど、自己の不潔は赦せるし、気にならないのです。私の肉体から分離したものは、たとえ不潔なものであっても愛着を感じているのです。

この強い潔癖感の崩潰は、突然に大異変を来たし、不潔への嗜好に変身します。潔癖感で象徴された理想主義に、私は完全に背を向けてしまいたいと欲します。清純さも、健康も、幸福や美しさも、もう要りません。私は唾棄したいような汚辱、気も遠くなるほどの羞恥、墮落、背徳の世に転落してしまいたいと考えたのです。

青春とはなんて暗い、そして辛い時期なんでしょう。私は病弱の体で生きてゆかねばならない明日の日の悪夢に戦き、絶望にうちめめされるのです。私は病弱や結婚への絶望を、人生観としての絶望にすり代え、すべてこの世は生きるに価しない、と考えようとしていました。

私は、洋裁を習うお友達の間では、暗い絶望感など、おくびにも出さずに、普通並みの娘のように振るまうのです。結婚の話や、理想の男性の話（それは主に映画俳優のことですが）に控え目にですが、同調するのです。内心、私はそのような話に夢中になるお友達に羨望しながら、一方では夢のような頼りなさを軽蔑するのです。そしてそのような瞬



間、私は家の湯殿のゴムホースや、口紅のケースのことを脳裏に想い浮べるのです。鮮かな花模様の布地の上で鉄を使っているこの手の中指が持つ秘密など、この人たちは何もしらない。この考えが、単純に未来の幸福を夢みて、幻しに酔っている友達や年上の人を裏切り、侮辱したことになるような倒錯した復讐心に陥るのでした。

初夏のある日、洋裁友達の小林充子さんと映画に行く約束をしました。充子さんは小柄な美しい人で、気心の合う友達でした。約束の時間に小林さんがこないで私は少し腹を立てていました。私にとって小林さんは大事な友達でも、私は彼女にとって大した友達ではないのだということを必要以上に感じました。私には慰めが必要でした。私は湯殿にいました。冷く流れる水の感触に、すべてを忘れようと思いました。その時小林さんの声と、「正子は風呂場にいますよ」と応える母の声がかきこえました。私はすぐ止めなければと思いつながら、立つのをためらっていますと、充子さんは庭を廻って湯殿へ近づいてくる様子です。私は呼ばれて立ち上り風呂の窓を開けました。「スカートのホックをつけかえてい

て遅くなったの。ごめんなさい」と詫言る小林さんに私は「ううん、いいのよ。今、洗濯していたの」といいました。小林さんには、セーターを着た襟首から上の私の顔しか見えなのです。もし壁がなかったら、充子さんは美しい眼をどのように変化させたことでしよう。私の足元では、ホースの先から流れでる水がタイルの上で音を立てているのでした。

二人で映画館への道を歩きながら、私が小林さんに「さっき私は湯殿でなにをしていたと思う」と切りだして、すべてを打明けたら充子さんは信じるでしょうか。多分、信じないでしょう。充子さんは健康で美しく幸福になれる条件を備えた人です。私は病弱で、十人並み以上の美貌でもなく、幸福への期待に背を向けて、孤独な醜い嗜好に痴れている女なのです。しかし私は、友人や肉親の前では、無邪気で何も知らない、おとなしい少女としての演技をつづけなければならないことを悟っていました。

洋裁の勉強も、手職にするに至らないでやめ、相変らず病気がちの生活を送っていました。兄は結婚して別居し、家には私と両親の三人が残されました。昭和二十三年の梅雨あ

けから、私は叔父の経営するS商事会社に、事務員として勤めにしました。S商事は機械の部分品や工具を大工場に納入する仕事をしていました。大人の社会への接触と仕事の毎日の変化が、私に健康な精神を更正させましたが、それも半年を過ぎると、少しずつ崩れていきました。ある日、材木の売買に関係するようになった父が出張し、母が孫の顔を見にいて、私は独りになりました。私は遠くの薬局まででかけて、20CCのガラス器具を買い求めました。それは、かつて子供の頃、施術された器具とは形も少し変り、スマートになっていて、ガラスの青い色と肌の冷い光、量を示す目盛と数字の赤い線、先端が少し短くなったのは物足りない感じですが、固くツンと澄ましているようで可愛いく思えます。内筒を動すと、すーっと静かな音を立て、先端を耳朶に近づけて押すと小さな吐息を吐きかけ、くすぐるのです。私は一度、その器具を水洗いして、また縦に横に斜めにと持ちかえて、ガラスに当る光線の反射を鑑賞しながら、この、小さなむだのない機能と構図をもつて、優等生のように澄ましこんでいる器具が、私の胸をふくらませ、限らない羞恥と陶

醉に誘うことが不思議に思われるのです。

それは可愛いペットであり、冷酷さを秘めた悪魔です。私は新品だからと考え、水を充し口に受けてのみほしました。私は部屋に冷水の入った洗面器や、鏡台や手鏡、古新聞などを用意しました。私は黒のストッキングを履き、上半身は、セーラー服に一番似ている空色の服を選んで着こみました。下穿きは生理帯に代えました。それはおしめカバーの代用でもあり、羞恥の期待の為の必需品でもあったのです。その日の鏡は、二十の乙女のごうみと行儀を記憶していることわざいましょう。

女学校に行かなかった私は、読書や講義録の勉強で知識を補いました。そのこととは別に、中学生や、高校生の制服に強度の羨望と嫉妬を覚えるのです。女学生服が示す若い淫刺さ、清純さ、バラ色の夢、それらのものが羨やましく憎いのです。そして私もそうでありたかった。手で床を叩きながら打ち臥して、私はそう呼びたい気持で一ぱいです。

私はガラス器具を使用する前後の煩わしさを避けるために時々イチジク浣腸を買いました。そのことが、グリセリンの曲線的な陰影

に富んだ刺戟に、私を深く愛着させる結果となりました。最初は10CCの小型のものから20CC入を二個まで必要とするようになりしました。しかしイチジクも使用後の殻の処分に困ります。トイレに捨てるとしても、たまにであれば便秘だからという訳けがつくにしても、度々であれば、固くつるつるした殻はトイレで目立つ存在ですから、どうしようもありません。私は再びガラス器具に返り、グリセリンの80CC入の中瓶を買い求めることにしました。時には、それが一夜で無くなるのです。薬瓶を包んだセロハン紙を音をききまて破り蓋をとると、私は瓶の口の液を舌でなめてみます。甘ったるくって、それでいて渋味と同じようなシビレを舌に起させるのです。私はマヨネーズの入っていたガラスの空瓶に、粘りのある薬液をたらたらとうつします。それに水を少しずつ注ぐと、液と水は砂糖を溶いたときのように細かい対流を起して混りあうのです。それは神秘なものに似た美しさをもっているのです。私は理性も羞恥心も忘れたように器具をとり上げ、液を充します。

「女性美への道」という短篇映画がございま

した。その中で漫画の絵入りで、十九世紀の上流婦人たちは美容の方法として、一日三回も浣腸を行っていたことがあると解説してありました。もしかすると、その頃も私のような奇妙な女がいたのではないのでしょうか。また昔の貴婦人は、薬液として蜂蜜を使用したそうです。どんな刺戟感があるのか存じませんが、ロマンティックな感じが致します。私の好みはグリセリン、石鹼水、又は大量の冷水、食酢をといった水の順で、食塩水は好みません。

私は健康を害して勤めを止め、床に臥しました。私が精神の打撃から立ち直り療養に専心するようになると、私の孤独な遊戯は再び過激なものになりました。人間の舌は噛み切れるものでしょうかという疑問について、私が私の舌をかねて実験を始めるとします。勿論、最初は遊びで一寸かんでみます。少し痛いけど、もう少し強くかんでも大丈夫です。こうして、もう少し、もう少しと強めていくと痛くて耐えられなくなります。もう歯をゆるめねばと思いつながら、顎は何故か憑かれたように、もう少しもう少しと、強くかもうとするのです。丁度そのように私の遊戯は、理



性から非難されながら、過激の度を強め、単なる陶醉ではなく感覚への過酷な虐待へと変化しているのです。私は非常な決心のもとに、愛着の念を押えて、器具類を原型のないまでに粉々に砕いて捨てました。それでも三年近くの寝たり起きたりの生活の間、私の遊戯が全く絶えたわけでもありませんでした。

私はいつのころからか、レインコートを着

て寝ることを覚えました。まだ古川裕子さんなど知らない頃です。紫のコートは買って二、三度しか手を通していません。裏は綿ゴム引きになっています。私は乳から下をレインコートで包み、ボタンはかけずに、肌に密着するように巻きつけ、腰紐をつないだ紐で、足首から腿、腰から腹をグルグル巻きに縛ります。素人が自分で縛るのですから、あまり固くありません。私は竹の物差しを腰の紐の辺りに押し入れて捻り上げるのです。時には紐を切らしてしまうこともございました。この頃は股間縛りは致しませんでしたが、古浴衣で作った手製のオシメを当てる遊びを致しました。希望も幸福も

すべて未知のものであった赤ん坊に還りたい。それが私の願いだっただけでしょう。私はオシメを当てて、学校時代の惨めな失禁の記憶を呼び起します。

明るく幸福になりたい。惨めでありたくない。と望みながら、心の反面は、暗く不幸で、惨めになりたい、思いきり恥ずかしい目に会いたいと叫ぶのです。



幸福を求めながら、それから遠くへだたっていることを知っていて、劣等感にさいなまれる女。私は意識の世界の奴隷です。奴隷には何の権利もありません。無の人格です。奴隷の使命は奴隷の劣等性を心の底まで思い知らされることです。それが奴隷にとって最も人間的な喜びなのでございます。何時も劣っていることを気にしているから、打ちのめすように劣っていることを思いしらされることが、私にとって劣等感から救われる逆説の救済なのかもしれません。

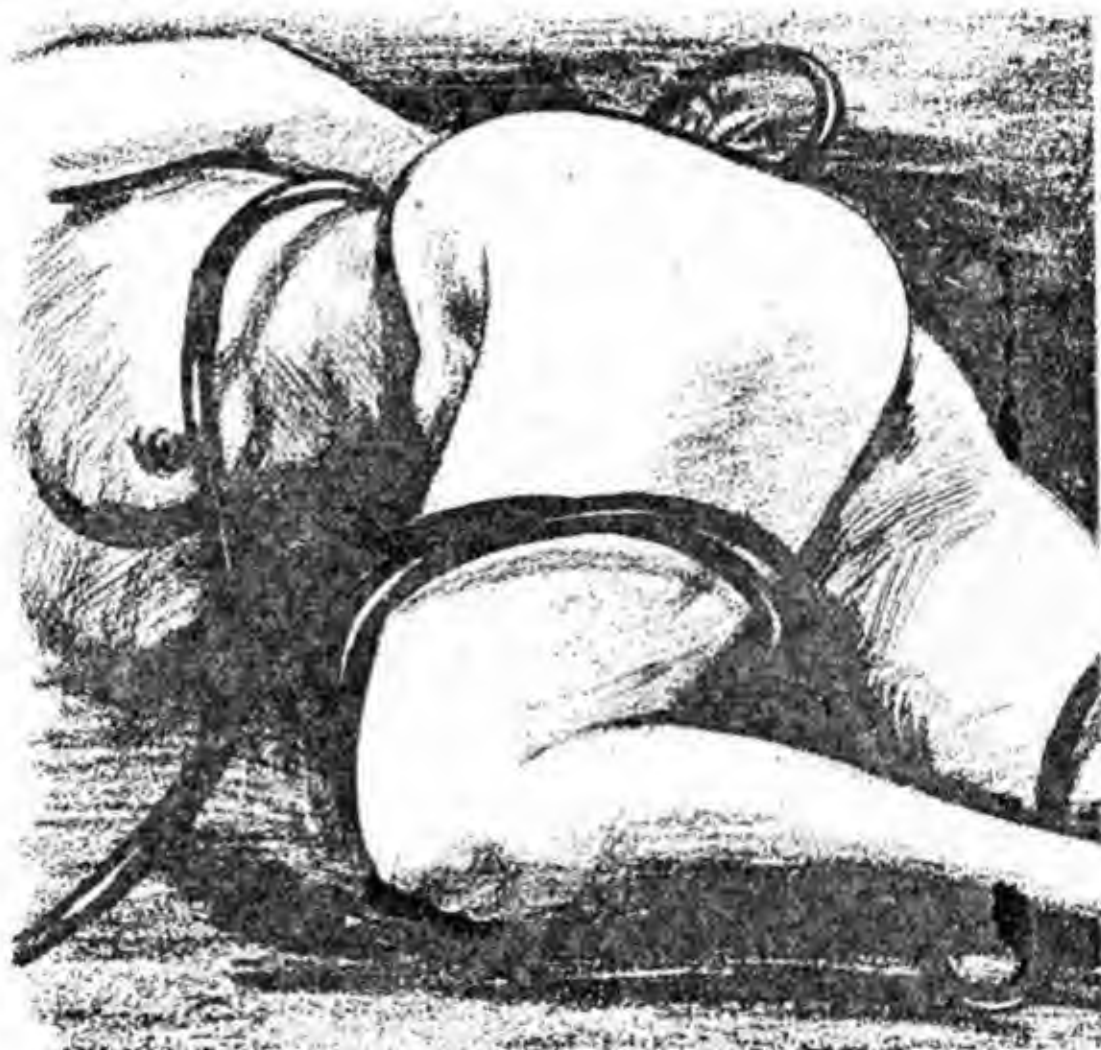
神様、この心まで歪んだ私をお赦し下さい。時として、私はお赦しを乞わずにはいられません。私は仏教、天理教、生長の家、キリスト教を遍歴しました。そして生来の疑い深さと信仰心の欠如から、浅く知っただけで離れてゆきました。

夜、私はレインコートにオシメを着用し、失禁の真似をして遊ぶのです。腹痛が頭痛に変わるまで行方長い時間の辛抱、動悸が足の爪先までびりびり伝わります。張りつめた腹部を故意に押えて求める苦痛。私は一体、何をして

いるのでしょうか。何故、このようなことを。その間にも、遊戯への熱中に無視されてしまうのです。やがて熱いような進み、私は少しの不潔感も感じないでいるのです。これが二十六にもなった女性のすることでしょうか。そういう反省も、何か力のないものに変っているのです。

翌年、S商事に再勤務するようになって、帰り道に書店に立ちよりました。そこで私は未だ見たこともない特殊な雑誌の出版されていることを知りしました。Kクラブという誌名で、心をひかれるままに開いた絵や写真に、強烈な印象を受けたことを忘れません。縛られた女の絵や写真、拷問にかけられる話。私の足は立ちすくんで糊にはりついたように動けなくなりました。

めくっていくうちに女の人がおシメをさせられている挿絵の小説がございました。私の頬は真赤に火照ったことでしょう。私は買うのも断念して、早々に逃げだしてしまいました。私の心も肉体も恍惚に包まれていました。その後、別の本屋でKKを買い求め、新しい



のや古いのや次々と蔵書していきました。最初、買ったのにも驚きました。浣腸、イルリガートルとか、果ては肛門とか見ただけでも恥ずかしい文字が並んでいる物語があったからです。読者通信をよんで、私の性癖が私人ではなく、同性の方にも男の方にもいらっ

しやるという事実が、私に安心を与えました。しかし他方では、尚いっそう私は恥じ入りたい気持ちに閉ざれてしまっているのです。

私は、しばらく仕事に没頭して単なる鑑賞者に終始しましたが、それも暫くの間で、私の羞恥に彩られた空想は、物語のストーリーより、毎夜、過剰になり私を責めて立てるのです。ある夜は、私は女スパイで敵国の憲兵に捕われ、純潔を失うより、もっと恥ずかしい拷問にかけられるのです。次の夜は継母にいじめられる高校生でした。上着はセーラー服ですが下半身はおシメカバーだけで、毎日、ベッドに監視つきで寝かされているのです。継母は女中や、にやけたインタンと一緒にあって、羞ずかしい羞ずかしい方法で私を責めるのです。学友や私が心をよせているボーイフレンドが見舞にきたときにも、継母は故意に、「おシメを取り代えなきやね」とか恥ずかしいことを口にするのです。その上、友達のものかまわず「治療の時間ですか」と、さっさと器具を用意するのです。私



はこの空想の連続物のなかで、二重浣腸とか失禁帯、とか、その外、いろいろな恥すべき発明をしていました。

私は誘惑との戦いにふらふらになり、負けて夕闇のなかを薬局に行きました。苦手の中年の男の人がでてきましたが、勇気を出して私は「かんちようき、下さい」と申しました。男の人は「いちじくですか」と問い返すのです。私は「あの：ガラス製の」と答えたのですが、その人はもう一度念を押してから探していたが分らない様子で、奥の方へ声をかけて、奥さんらしい人と呼んで、二人話しながら探し始めました。私はもう顔を染めて、よほど断つてとびだそうかと思うのですが、声もでないのです。そこへ二十五、六の青年が風邪薬を買いに入ってきたので、私はいよいよ逆上してしまいました。

青年が奥さんと、どの風邪薬がいいか相談している間に、主人がやっと見つけた箱を三つほど持ちだし、陳列ケースの上で器具をとりだし、先端に指を当てて内筒を押し、空気が洩れないかどうか試めすのです。青年は私の方を見ているようです。もう顔も挙げられません。望んでいたような拷問に思いが

けなくもかけられているようです。主人は二つほど試して、一方の品を包んでくれました。私は震えるような手付で千円札をだしましたら、また釣銭探しに夫人の方が奥に引こんで待たされるのです。それに用事も済んだのに青年は私の方を観察しながら、野球の話など主人とかわしているのです。この日ほど他人が意地悪にみえたことはございません。それとも、当然受けなければならぬ罰として神が仕組んだのでしょうか。あのように恥ずかしめを求めている私が、現実では全く意気地のないのにもあきれます。

二十七才、私は妻のある年上の人と恋愛をしました。本当の恋だったかどうか自信はありませんが、私は毎日のように会いにでかけるのです。その方は新製品のセールスマンで奥さんは酒場に勤めておられて、とてもいい方でした。私は何故か奥様に背信的なひげ目を感じませんでした。あるいは、結婚も恋もあきらめた女が人妻を裏切るという行為に、復讐心に似た喜びを覚えていたのかもしれない。そういう、背信の当然のむくいのように、瀬川要(カナメ)という私の愛した人は、退屈しのぎに私の相手をしているように言葉

の上で弄ぶのです。私が帰るといえば、君が帰ったら淋しくてたまらないというし、腰を据えたら、人生という奴は退屈だねと、皮肉ともつかぬことをいうのです。

私は生れて初めて接吻をしました。たとえ瀬川さんの戯れにしろ、私はとっても嬉しかった。何度か会うちに瀬川さんが、体を求めているように思えた時、私ははつきり拒否しました。別れた後で私は後悔し、次の日電話をかけて、又、彼の家に遊びにいくのです。

奥さんの非番の日は三人で食事をします。そういう際、突然のように瀬川さんは奥さんに向って、君と別れて井上さんと結婚しようと思うがどうだね、なんて冗談とも本気ともつかぬことをいいます。しまいに、瀬川さんが夫婦で私をからかっているように思えてくるのです。瀬川さんは、ユーモアと話題に富んだ人で、私は何んでも打明けたい気持ちにさせられるのです。私は私の被虐症の心理について軽い表現で懇えてみました。彼は、誰にでもあるから気にすることは無いといいます。

私は次の日、コートのポケットに薬局で買った小箱を忍ばせて行きました。ポケットか

らハンカチを取りだす拍子に小箱を落して、彼に認めさせようと思いました。その上で私の求めていたものが何であるか訴え、瀬川さんの手で、その坐葉を私に用いてもらいたい。本気で愛してくれていないのなら、醜い姿態や行為も気にしなくてもいい、と考えたりしました。少しのきっかけで念頭が適うのに、私はポケットの小箱を握りしめながら、吐息を洩らすのです。私は瀬川さんと交際している間、私の歪んだ遊戯をやめていました。私の求めていた態度は奴隷としての最大の愛情の表現であったのです。私はいいだせなくて、邪魔物のような小箱をもって家路をたどるのでした。家に帰り私の部屋に閉じこもると、瀬川さんのことを想い、幻に浸ります。私はうつ向いて時々瀬川さんの方を見ました。瀬川さんは澄ました顔つきで、ダエン形の恥ずかしい物に穴を開けていらっしやるのです。私は、そうっと横になります。瀬川さんの手が触れると、病的に青白い私のお尻は電流が通じたようです。固い器具の先が触れた感覚は、全身に戦慄を走らせます。冷たい液の不気味な拡り。嫌な嫌な、そして歡びに陶醉したい雰囲気なのでございます。

一個がすむと二個目が始まります。それは前にも増して恥ずかしく私は顔を手で覆ってしまうことでしよう。やがて軽い腹痛を思わせる下腹の変動は、どんよりとした潮のように腹部全体が拡がって、けだるいような、いらだたしいような切つない恥ずかしさが全身をつき上げます。そのような私に瀬川さんはやさしくして下さることでしょう。その夜、私は瀬川さんと正子の二役を演じて、遠ざかっていた感覚に陶醉したのでございました。私は世間体や外聞を慮ばかって、たとえ戯れでもいいと思ひながら貞操を捨てきれませんでした。私はそのことより、もっと重大な縛りをもつ儀式を瀬川さんにして頂きかったのに。でも、これは物解りのいい瀬川さんにも理解できないような、奇妙な願いだったことでしょう。

S 商事をやめてしばらく遊んでいる頃、私は福山幸夫という一つ年下の青年を恋し、溺れました。でも結局私は苦しみ、憎み、すべては惨めの中にその恋は終りました。私はK産業株式会社に就職しました。私は事務の上では、かなり有能なタイプピストになっていましたが、仕事も私の傷心を仲々に癒してくれません。私は当然のことのように、孤独な遊戯に帰っていったのです。幸福への切つない希求と、暗く惨じめな劣等感の相剋の月日が流れていきます。私は今、私の小さな奇癖を、それほど気にはしていません。むしろそれは、私に豊かな感情と、繊細な人生の機微をもたらしてくれたのではないでしようか。そして、私の反省しなければならぬのは、人生観自体の暗さと歪みではありますまいか。

私は、お見合をして結婚しようと考えています。そのとき「埋もれた日記」は本当に埋もれてしまうのです。井上正子と、告白の本当のヒロインは別の人間として生きていくことに致します。正子よ、さようなら。哀しい想い出と共に。



# 「奴隷の食事マナー」

(影 国)

雪 俊 遙

「金の城」が潰れたのは「黒いジェット機」事件から幾日も日数の経たない内だった。

座長は公開蒸焼刑の後、何カ月も廃人同様だし、珠子は叛乱地区からスパイとして潜入していた島田啓子に拉致されるし、若山久美は大京映画にトレードされるしで、売物になるスターが居なくなっ

てしまったのでは是非もなかった。  
高倉は、さざりと類子を日の出町の家に残し、一座を引き連れて旅廻りに出て行った。

彼等の運命に就ては又、語る機会もあるであろうが、私はここで暫く若山久美の辿った道を語って、この国の映画界に就て触れてみたいと思う。

久美を五十万円で買取った大京映画の常務、片桐半造は、連れて

来た部下に命じて、逃亡、又は他社からの掠奪を防ぐ為に、久美を嚴重に縛り上げさせた。

取引は高倉の家の一室で行われたので、高倉や支配人や片桐の見える前で縛られたわけである。勝気な久美も流石に顔を赧くしてうなだれていた。部下の若い社員は、久美の背中で捻り上げて重ねた手首を厳しく縛り上げると、その縄尻を取って、三、四歩、後に退り、竹笥を掴んで、久美の重そうな臀部を、スカートの上から、ピシリッ、と叩いた。

「立て」

うなだれたまま、久美は素直に立上った。

「ホホウ、流石に「金の城」の踊子ですなあ。よく訓練されているじゃありませんか」

片桐は高倉の顔をちらっと見てお世辞を言った。しかし、高倉はこれから先の劇場経営の苦心を想っているのか、苦い表情を崩さなかった。立上った久美の栗色のスナリ長い脚が、そんな高倉の目の前に二本並んで立っていた。恰好よく伸びきったその脚を見ながら、高倉は惜しい娘を手放したことを内心、口惜しがっていた。若い社員の答がもう一度、ピシリッと、久美の丸く張った臀部で鳴った。

「歩け。外へ出るんだ」

久美は縛られたままうなだれて歩き出した。惜しそうに見送る高倉の目に、後向きになった久美の後手縄がはつきり映った。手首をX型に重ねて、太い麻縄が縦に四本並んで、その手首を縛しめ上げている。右掌はギュッと拳を握り、左手は五本の指を曲げて半開き。縛られて後手を客に見せる時のそんな掌の表情も、高倉が、十六の年から三年がかりで久美に教え込んだ芸の中の一つだった。転売されて彼の許から永久に離れて行く今、無意識に久美は教えられた芸を演じてみせて、高倉の悲哀と愛惜とに油を注いでいた。

久美は物々しい後手姿のまま室外に出た。そこには久美の売られることを知った「金の城」の座員達が、別れを告げに集っていた。久美は美しい顔を挙げ、縛られている我が身を恥じて、耳朶まで赧くなりながら優しく微笑した。

「さよなら、久美ちゃん」

「出世して偉いスターにならなさいよ」

親友の吉野照代と、舞台でよく久美を虐める役をやった上村とが、殆んど同時にそう言ったのを聞いた。

久美は黙って頭を下げた。再び顔を挙げた時、彼女の毒婦役のよ

く似合う、いつも勝気そうにキラ／＼光っている大きな黒瞳には、涙の玉がこぼれそうに盛上っていた。

皆が玄関の外まで送ってくれた。久美は縛られたまま、道路に待っていた車に乗った。シートに腰が落着くと、社員は久美の腿の真中辺と、膝頭の辺りとの二箇所、細い皮紐をかけてキッチリと締め上げた。その上足首の上の方にも麻縄を五回も巻きつけて、キリリと後で結んだ。

「可哀想ね。あんなにまでしなくたって、どうせ逃げられやしないのに」

車の窓から覗き込みながら、ナナが言っていた。別離の情に湿りきっていた久美の胸は、その言葉で、一層、締めつけられた。久美は豊かな胸を突出して行儀よく座ったまま、顔だけ横を向いて目をしばたいた。社員がその顔を強引に正面向きにさせ、赤い布で猿轡をはめた上、太腿を締めたと同じ皮紐で、額から鼻、顎にまで雁字搦目の顔縄をかけて縛り上げた。

頭から足先まで、無惨にも全身を縄と皮紐とで縛り上げられてしまった久美を乗せて、車は出発した。

大京映画の撮影所についたのは三十分程、後だった。

最初に身体検査室に連れて行かれ、前から後から綿密な検査をされた。この検査には、レントゲン台、心電計、脳波計から検尿器、検便器、高圧灌腸器、果ては内臓検診鏡までが総動員された。

久美は丸二時間に亘って、腕を伸したり、脚を上げたり、中腰になったり、うつ伏せに寝たり、仰向けに寝たり、四つん這いになったり、およそ人体の取り得る、ありとあらゆる姿勢をとらなければならなかった。



身体検査室は所内のビジネス・セクションの玄関傍にあり、総硝子張りなので、身体検査をされる久美の姿は、どこからも見通したった。

死ぬ様な思いの身体検査がやっと終ると、久美は、琥珀色の逞しく、しかもすんなりした体を、肉色の極薄のスカンティと、眼鏡型ブラジャーだけで包んで、所内を曳廻され、社長や撮影所長、主



めた。もう一人は背伸びしながら長身の久美の鼻に、ネジ留めの鼻環をかけた。その間に井岡は一人で一番奥へ行き、課長、と書いた置名札の乗っている机の向うに座った。

鼻環の先には長い革紐が、ぶら下っていた。鼻環をかけた女事務員は、その紐を掴まえて、久美を先ず奴隷籍係の前に曳いて行った。奴隷籍係の女事務員は、常務が「金の城」から持帰った久美の奴隷

だった監督やスターに紹介された。最後に引合わされたのは、三十二、三才、色の浅黒い、小柄だが引緊った身体つきの子男だった。

「奴隷課長の井岡さんだ」

身体検査室から、ずっと久美に附添って来ていた青年がそう言って、久美を井岡奴隷課長に引渡した。久美は井岡に連れられて再びビジネス・セクションに引返した。二階の奥の大きな事務室の入口に奴隷課の看板が掛っていた。

中へ入ると、すぐ二人の女事務員が寄って来て、一人は久美のすんなり長い両手を背後で重ねて、空色に塗った幅二寸程の筒型手錠を手首には

膳本と、身体検査室より廻って来ていた検査要覧とを読み比べて、身体特徴の二、三の差違を、実際に当って再検査した。それから要覧に係長の印を貰って、曳廻しの女事務員に膳本と一緒に渡した。

彼女は左手に書類を持ち、右手に久美の鼻環の紐を持って、再び美女を曳いて行った。

久美が次に連れて行かれたのは窓際のスター係の前だった。係の事務員が二枚の書類の要点をスター奴隷台帳に記入している間に、手のあいている隣席の傍役係と、大部屋係とが、スター奴隷の階級を示す、黄金色の金属製首環を久美の首にはめ、同じ色の三寸踵のハイヒールは、実際の久美の足より一廻り小型のものが撰ばれたので、はかせるのに大分、時間がかかった。はかされた途端、久美は口許を歪めて、痛そうにのけぞり、呻いた。

「痛くても我慢するのよ。シャンとお立ち」

傍役係に二、三回、笞打たれて、久美は辛うじて直立した。

曳廻し役の女事務員が筒型手錠を外し、代りにスター係のロッカーから大部屋係が運んで来た黄金色の後手錠が掛け直された。後手ココの字の両手を、手首から二の腕にかけて拘束し、腕が動かせない様に、腹ベルトまでついている立派なもので、堂々たるグラマー・スターの体にはめるにふさわしく、燦爛たる光を放っていた。

最後に久美の口には轡がはめられた。大きな革の玉を二つ、口に含まされ、玉の外側に附いた、しなやかなめし革の帯で、後頭部にしっかり縛られた。革帯には縦に随円形の金色のゼンマイ・ベルトがついていて、久美の首を、顚頂部から顎の裏にかけてしめつける様になっていた。革帯をしめてはゼンマイをしめ、これを繰返して、これ以上しめようもないリミットまで行くと、久美の整った面

長の顔は哀れにも、全然動かせなくなってしまった。なめらかな栗色の肌がふくよかに盛上って、その間に革帯もゼンマイも埋まる様にのめり込んでいる。野性的な大きな黒目だけがキラ／＼光って美しかった。

再び鼻環の紐を取られて、次に飼育係のデスクに曳かれて行った。慣れた係員が久美の身体を見、要覧を読んで、新スター久美の飼育計画表を作成した。

次は訓練係。曳かれながら久美は、素足より一廻り小さい責め靴の痛さに泣き出してしまった。厳重な革の轡の奥で、泣声は潰滅し殆んど外に聞えなかった。只、キラ／＼光る黒目から透明な涙の粒がしたたり落ち、革紐が食い込んで二つに割れた様に見える頬の産毛を濡らして行った。

課長の前で久美はもう一度、膳本と要覧とナマの体とを念入りに、詳細に比較された。書類には課長の確認印が捺され、事務員がそれを最初の奴隷籍係に手交した。

久美は隣室で轡も靴も取られて、全身の前後と、上半身の前向の写真が撮られた。写真は複写されて各係の書類に添附されるのだ。

奴隷籍係が久美の掌と足の裏に墨を塗って、足紋と掌紋を取り、膳本、写真三葉と一緒に台帳に収録した。

こうして久美は正式に大京映画株式会社の所有物たる奴隷スターになったのだ。しかし、以上の手続は、すべて一人のスター奴隷が所有されるに要する書類上の要件であった。この外に、奴隷であることを公示する肉体的要件が課されなければならなかった。冷たい鉄の台の上に寝かされて、手足を大の字に拡げられ、掌と足の裏の墨を事務員達に拭取られていると、片桐が井岡や飼育係の男の



現場員を連れて現われた。久美は、びっくりして身をすくませようとしたが、手足をしっかりと掴まれているので、どうすることも出来なかった。大の字の姿で数分間は辛抱しなければならなかった。墨の汚れを爪の裏まですっかり除かれるには、実際、時間がかかったからである。久美はその間中、固く目をつぶって、遅ましい胸を大きく波打たせていた。やっとそれが終わると、久美は女事務員の手から男の飼育係の手に移された。責め鞭をはかされ、後手錠をかけられ、鼻環をはめられた。そして、あの顔が歪む程むごい十文字のベルトを首に廻して、再び、先刻より一層強い男の力で締め上げられた。

「用意が終ったら処刑室へ引立てろ」  
井岡が言った。

久美は飛上る程、驚いた。入社したばかりでまだ何の落度もないのに、いくら奴隷の身分でも、もう処刑室へ曳かれて行くななんて、あんまり不法だと思った。しかし革の玉を二つ、口一杯に含まされて、ベルトで締上げられているので、抗議の声一つ出せなかった。只、大きな黒目をキラ／＼ときらめかせて、例の毒婦ばりの勝気そうな眼差しで井岡を睨んでいた。

「何という目をしているんだ。これから奴隷マークをお前の身体に入れるんだ。さっさと歩け」

豊満な臀部に、ピシ／＼、ピシ／＼と笞を当てられて、鼻環の紐を引張られながら、大きな身体に小さ過ぎるハイヒールで、久美はヨチ／＼歩き出した。

撮影所のホールの手前に処刑室があった。演技に不熱心な娘役のニューフェイスが一人と、記録上の失策をやった小柄で色白のスク

リプター嬢一人が、罰として総硝子張りの処刑室の中で、口に互いに相手のハイヒールをくわえさせられて、四つん這いになっていた。

可憐な娘役スターと、撮影所で働く女としては、いわばインテリ階級に属するスクリプターのお仕置だから、処刑室の外はスタジオオ雀や一般見学者、報道関係者で黒山の人だかりだった。

色はやや飴色だが、肉体美の見慣れぬ娘がもう一人、ヨタ／＼しながら曳かれて来たので、四つん這いで這い歩く二人の仕置者に関心を集中していた見物人達が、目を瞠って道を譲りながら、ひそ／＼と話し合った。

「あれはだあれ？」

「見慣れない人ね」

そんな声は久美の耳にも入ったが、全身に食い込む責道具の痛さと、こんな姿で人混みの中を曳廻される羞しさで、彼女はもう無我夢中だった。久美が室内に入ってしまうと、飼育マンの一人が、入口の柱に並んだ、

“二線スター、満池美奈。犬の使い”

“スクリプター、堤さくら。犬の使い”

という処刑標札の横に、もう一枚、木札を下げた。群集は争ってそれを読み、後方の者は前の者に大声で聞かせてくれと乞うていた。

“新入社、スター奴隷。若山久美。十九才。”

入墨、及び鼻環通し”

大京映画では、奴隷標識は腿の裏に真紅の入れ墨を施されることになっていた。スターは桜の花、傍役は椿の花、大部屋女優は桔梗の花を象った入れ墨と社則で決めてある。奴隷女優は映画の中でヌードで大寫しされることが多いので、うっかりした場所に入れ墨す

るわけには行かないのだ。その点、腿の裏なら映画でも先ず滅多に写らないし、お仕置の時など彼女達の奴隷の身分を表示させて思い知らせる必要のある時には、逆に脚を上げさせなければ見えない場所だから、それだけで処刑的效果は充分、発揮される。どんなに美しいスターでも、入れ墨のある者は、掃除婦、門衛にも遠く及ばない。全然、階級の違う人間なのだ。人間というよりは商品、もしくは家畜の一種に過ぎない。奴隷でもスター・クラスになれば結構、大切にされたが、それは金の卵を産む家鴨が大切にされるのと同じ事なのだ。

美奈とさくら、の犬の使いは一時中止されて、処刑室の真中に、脚の低い鉄の台机が置かれた。久美の身体から責め靴と首環と手錠が外され、傍らに四つん這いで待機させられた美奈の背の上に、それは並べられた。琥珀色の豊満な久美の体には、紅白だんだら縞の、色目も鮮やかな紐縄がかけられた。飼育係が縄をかけながら久美の身体を鉄机の上に仰臥させて行った。流石に大映画会社の飼育係の縄の掛け方は酷しかった。『金の城』の高倉達の縛り方とは違って、充分ツボを心得ていて、科学的で冷静で、ギツチリと文字通り身動きも出来なくなっていた。それでいて、そんなに雁字搦目というのでもない。縛られ終ってから井岡が大きな鏡を上にかざして、久美の身体にかかった縄目を見せてくれた。

久美とても『金の城』で三年間も訓練を受けて来た娘である。おのき一つ出来ぬ程、ギッシリ締め上げた縛りは、久美に、当時の訓練を思い出させた。しかも場所は大映画会社の撮影所で、あわれな久美のくくり上げられた身体に見惚れてくれる見物人はゴマンと居るのだ。うっとりした思いで、久美は鏡の中の自分を責める紐縄

の走り工合を見ていた。その間に二人の飼育係が久美の膝を折って足首を太腿に括りつけた。

チクリ、チクリ、チクリ。

細い針が毛穴の一つ一つを確める様に、間隔を詰めて突き刺さりながら少しずつ移動し始めた。遅ましく、張りつめた筋肉が、ヒクヒクと細かく烈しくけいれんした。皮膚が次第に熱を持って来る。なだらかな顎を遠い地平線の孤峰の様に垂直に突出してのけぞっている久美の目には見えなかったが、針が集中した辺りがぬら／＼した鮮血に濡れて妖しく光っていた。それでも刺し手は冷静そのもので、次の針を打ち込むべき部分だけは、濡れたガーゼで血汐を拭取り拭取り、血で汚れた針を次々と取換えて、プラチナ色に光る新しい針を刺し込んだ。

「ウウム、ウーン、ウツウツウツ」

久美は獣の様に呻いて苦んだが、頬が割れる程厳しい狼響の奥では、殆んど外までは洩れなかった。

苦痛に耐えかねて革玉をギリギリと噛んでみたが、唾液が気持悪く革臭くなるだけで、責める部分の痛さに変りはなかった。そこだけ全神経が露出してしまい、神経繊維を烈火で焙られながら、やりでゴシゴシこすられている様な、そんな痛さだった。

熱くなった傷口に時々朱が注がれた。そのヒヤリとする冷たさは、業苦にうなされてる久美にとって、何物にも代え難い快感だった。遂にはその快感を味わう為に針責めの苦痛に身を晒している様な、倒錯した感じさえ湧いて来た。

気がついた時、久美はスター奴隷を入れる檻の一つの中で、何と



も言えないぶざまな恰好で縛られていた。

檻の真中には太くて短い鉄柱が一本、立っていた。久美は、その鉄柱を背にしていた。しかし、立たされていたわけではない。と言つて座らされても居なかった。

久美の臀は冷たい床につき、遅しくて長い脚を二本揃えて、垂直におっ立て、膝から先のスナリした栗色の足は、斜前にだらんと垂れていた。

例の十文字の猿轡は外されて、代りに黒い、しなやかな、なめし革のハンカチで鼻の真下から顎一面をすっぽりと包まれて猿轡されていた。猿轡の下の方は黒くて厚い幅広の首環でキツチリと締められてかくれていた。首環の前には短い革紐がついていて、久美の膝が顎のすぐ下で括られていた。丸い膝頭が二つ、顔の真下に並んで、脚を床から吊上げている。首環の後と、後手の環との革紐は、久美の身体をしっかりと、心持、上体を反らせて、後の鉄柱に括りつけ、二の腕の真中と足首の上の方に、二つずつ鉄の細管がはめ込まれていた。

失心する前の留金附きの鼻環が外されて、久美の鼻中隔には孔がうがたれ、本式の大きな鎖の鼻環が代りに通されて、鼻の孔が随円形に拡がる程、強く頭上に引張られていた。

脚を首に吊られている上に、上体が反り気味なので、正面から見ると、先刻、施された紅い入れ墨が、歪んだ恰好で覗いている。横から覗けば、鼻環を通した鼻中隔の生々しい赤い孔も見えた。この奇妙な姿勢は、刻まれた奴隷標識を、スタジオ・マンや一般見物者すべてに見せる為に、わざと工夫して取らされている姿勢なのだ。

しかも鉄柱の後には鉄のテーブルが置いてあって、久美がスター奴隷であることを示す先刻の黄金の柳具一式は、物々しくその上に並べてあった。

久美は全身に言い様のない苦痛と疲労とを感じていた。この奇妙な晒しスタイルの要である首輪のあたりの痛さも相当だったが、それ以上に鋭く、久美のグラマラスな体を責め立てている苦痛は、やはり鼻中隔にあけられて力一杯、引張られている生傷の孔と、入れ墨の痛さだった。殊に、入墨されたあたりは、焼けつく様な熱を以てズキズキと疼き、その辺の血管の鼓動は、一々弱りきった頭にまではっきり意識された。無論、入墨されたあたりのは真赤に腫れ上っていた。

腫れと熱と疼きとは少しずつ稀薄になりながら、太腿のあたりから、お尻一帯にまで及んでいた。しかも彼女は、そのお尻で五十四キロの身体を支えて縛られているのだ。

久美は自分の哀れな姿を恥ずかしいと思う気持もまだ薄く、苦痛に呻き続けていた。奴隷として入社したのだからマークを入れられるのは仕方がないが、入墨の後位二、三日は寝かせておいて欲しかった。琥珀色のふくよかな肌は、ジワ／＼と滲み出て来る膏汗にネットリ濡れて、妖しい鈍光を放ち、責め肌特有のすえた様な匂いが、このグラマー美人を包んでいた。

夢現で呻き乍ら、久美がふと気附くと、パアツと目の前が明るくなる様な派手な色彩が目の中に飛込んで来た。誰か、それも美しい若い女が一人で檻の中に入って来たのだった。

久美はウンウンと呻き乍ら、縄を解いて楽にしてくれる様に哀訴しようとして、やっと自分が革布で嚴重に猿轡されていたことを思

出した。

女はいつか久美の傍にしがみ、大きな目を好奇の表情で光らせながら、傷ついて捕えられた美しい獣の体をじっと眺め廻していた。久美は、やっとそれが大京映画の張りきり娘と言われる淡野令子であった事に氣附いた。

「いい身体してるわねえ。あんた」

言うが早い令子は、手に持って来た四十糎の物差しで、パシリッと久美の、ストリップパーらしく適度の贅肉のついた脇腹を、力一杯、叩いた。

「この撮影所に来た新米さんはね、皆、最初にこの令子お姐ちゃんのお仕置を受ける事になってるんだからね。鉄は熱い内に打て、って訳さ。いいわね。猿轡を噛んでて、お礼の言葉を言わせられないのが残念だけどさ……。ハハン、意気地なし。もう涙なんか流して。案外、意気地がないのね、君は」

令子は物差しの角で久美の胸をぐりぐりと、えぐった。

「ウツ、ウツ、ウツ」

口の中で呻き乍ら久美は、腹と胸とをくねらせ、哀願の眼差しで令子

を見た。お願いですから今だけは勘忍して下さい。とその眼は云っていた。牝鹿の様な栗色の鋭角的な顔が膏汗にまみれ、蒼ざめ、哀願をこめて弱々しく令子を見上げている。

令子は、ぞく／＼して物差しの角を一層、強く豊満な肌に突き立





てた。

一突き突くと、牝鹿の黒い瞳から涙がポロリと、こぼれ落ちた。

又、一層、強く突く。

又、一滴、透明な涙が湧上って、こぼれる。

「大きくて立派な足をしてるわね。親指を反らして御覧」

ぐいと一突き。

呻き乍ら久美は云われた通りに両足の親指を、ぐうっと反りかえらせた。足の甲から足首にまで細く筋が突っ張って浮上った。

「今度は下に向けて」

又、したゝか物差しで突かれて、反るだけ反りかえていた久美の足の親指が下を向いた。

「その運動を繰返して。ホラ、一、二。一、二」

令子はグイッ、グイッと物差しで角で、短い一定間隔を置いて、久美ののけぞった胸のこぼれる様な隆起をえぐった。

その度に久美の両足だけが、生物の様にピクン、ピクンと上下した。つられて他の四本の指が僅かに親指とは逆に動く。脚を高々とおっ立て、首から足首を吊っているの、その悲しい足指の動きが、久美の目には丸見えだった。

涙の粒が湧上って来ると、指の動きもぼーっと弱んだ。熱い涙が栗色の頬にこぼれ落ちると、視野が明瞭になって、ピクリ、ピクリと動く自分の足指がはっきり見えて来る。

令子に虐められながら指を動かし続けていると、そのピク／＼動く自分の足指が、ふっと、自分には何の関係もない芋虫か何かの様に思えたりもした。

「おい淡野君、いゝ加減にし給え。この子は奴隷と云っても只の奴

隷じゃないんだぜ。うちは他社に比べて余りグラマーに恵まれていないんで、この辺で名門、大京映画の名にかけて大いに捲返しをやらうと、常務が自ら目をつけて引抜きの先頭に立った程の玉なんだからな。あんまり虐めると、淡野君だって容赦なくお仕置室へ入れるぜ」

いつのまにか井岡奴隷課長が後に立っていた。令子は流石に赤くなって、ペロリと舌を出した。

その日から久美は檻の中で暮すことになった。大京映画は伝統的に芸術的作品でインテリ層に受けているので、主としてスクリーンで拷問シーンや裸体美を売物にする奴隷スターは、余り多勢いなかった。彼女達は脇役奴隷や大部屋奴隷と違って、個檻を与えられ、飼育係に極めて注意深く飼育され、訓練係に、その時の条件に最も適う方法で、運動代りや演技練習としての訓練を受けていた。従って現場の飼育マンと訓練マンとは夫々、自分の掌轄する奴隷達のこととに就ては、その最も微細な点にまで精通していた。

丸、一昼夜。首と頬と膝とを結び合わされた奇妙な姿勢で入社の御挨拶をやらされた後、久美はベッドに寝かされ、数日に亘って療養を許されていた。その間に彼女の体は、すっかり飼育係長と訓練係長に調べ上げられた。

奴隷とは云えスターなので、ベッドはクッションのいゝ真白な羽根布団だったが、その中の久美は寝巻もなしで寝かされていた。枷具は殆んど外されていたが、首輪と手首足首の枷環、それに丸い大きな真鍮の鼻環だけはそのままだった。手足の環には夫々短い鎖がついていて、久美は布団の中で手足を燕型に拡げ、ベッドの鉄棒の縁に繋がれていた。

調査の度に二人の係長は久美の掛布団を剥ぎ取り、羽毛をむしり取られた大きな栗色の燕に似た久美の、皮膚の色、光沢や発汗状態などを克明に観察したり、いろいろの器具を使って調べたりした。

久美はベッドに寝たまま、横を向き、両目を固くつぶっていた。勝気な久美でも、そんな姿の時は、たまらなく可愛く見えた。

淡野令子は檻の外の群集の一番前に立って、目を輝やかせて、調べられる久美を見ていた。

殊に令子を喜ばせたのは、数時間に亘って、あらゆる浣腸液を使用して、久美の腹部の浣腸許容量が綿密に測られた時だった。

檻の中には二基の浣腸台が搬び込まれた。一基は仰臥の姿勢で浣腸する装置で、久美は台の上に仰向けに寝かされ、足を思いきり開いて、足首を細い鎖で別々に括られた。台の上には二本の長いアンクルが伸びていた。夫々の端に小さな金属の滑車がついていて、鎖を通して引張るとカラ／＼と澄んだ音を立て、滑車は廻り、腹部の水平度を崩さない範囲内で、被浣腸者は吊り上げられるだけ吊り上げられた。久美の胸を支えた台板は腰までしかなく、両手は△に括げられ、屈した肘をアングルの基部に結かれ、手首は黒髪の手で縛られていた。もう一つの浣腸台は、うつ伏したまま、で極限まで浣腸出来る装置で、胸から太腿までの当る部分の台板は大きくえぐり取られていた。隙に開いた手足の外に、背中と太腿とが革バンドで固く縛る様になっていた。どの程、多量の浣腸を施術されても、身体が台の孔の中にのめり込む様な恐れはなかった。この台は鉄脚が相当、高くなっていた。

高圧浣腸をかけられると、久美の栗色の腹は、みる／＼膨満して行った。腹筋は張るにつれて薄くなり、白っぽく色褪せて、青い血

管を色鮮やかに浮上らせて行く。

苦悶にひきつる顔。飼育係長には、多年の熟練で被術者の額の膏汗の滲み方、顔色の変化、吐息と呻き声などで、腹腔の破裂する直前の状態が解るので、そのリミットまで浣腸液が注がれ続けた。どちらの浣腸台にも、両脇には目盛を刻んだ棒が立っていて、細い銅線が渡してあり、腹の伸膨につれて銅線が目盛に沿って動く様になっていた。

浣腸器の容量計と、銅線の示す膨満度と、被術者の腹囲とから計算して行くと、大体、被術者の腸の大きさや強靱さも解るのだ。

度重なる浣腸責めに苦しみられて、久美は膏汗を滲ませ、蒼白な顔で唸っていた。飼育係長は

「この子は凄く丈夫な腸を持っているから、一寸やそっと責められた位では、この肉体美が萎んでしまう様なことはないぜ」と保証した。

浣腸台の上で縛られたまま、久美は半分、意識を失ってその言葉を聞いていた。

浣腸検査の様な特異な場合を別として、概ね久美は、調査の間、ずうっといたわられていた。

もと／＼若くて頑健な久美の身体は、すぐにすっかり元気を取戻した。縛られてベッドに寝ているだけなので、一日毎に脂がのり、肌のつやもよくなって、「金の城」時代よりも一周り大きくなった様だった。

飼育係の女の子が毎日、血のしたたる様なビフテキに生野菜の山盛りを持って来た。久美はベッドに上半身を起され、手首の鎖だけを外されて一人で食事した。豊かな久美の胸は、上体を起すと、ほ



とぼしる様に前方に突出た。食事の間中、女の子は目を丸くして見惚れていた。その目に気附くと久美は極り悪そうに赧い顔をして、腕を抱き合わせ脇でかくした。豊かな乳房が脇で押附けられて、脇の上下に一層、豊かにはみ出して盛上る。その妖しい胸乳の魅力は同性の女の子の心さえ揺ぶり動かしただ様だった。

「御馳走様でした」

久美は奴隷らしく殊勝にお辞儀してフォークをおく。

「まだ残っているわ、お野菜がこんなに。係長さんがあなたの体力を考えて、丁度キツカリだけのカロリーを計算して作らせたお食事ですから、すっかり綺麗に食べてしまわなければ駄目よ」

おとなしそうな顔をした、小柄で平凡な女の子なのだが、飼育係の優越感を剥き出しにして云う。

勝気な久美は露骨に憎悪の目で、その飼育ガールを睨んだ。

「マア、何てイヤな目。素直にハイと仰言い」

「……………」

「強情な子ね。お野菜の一切れも残さずに食べなければ、お乳の上にお灸を据えてよ」

それでも黙っていると、女の子は顔色を変えて立上った。

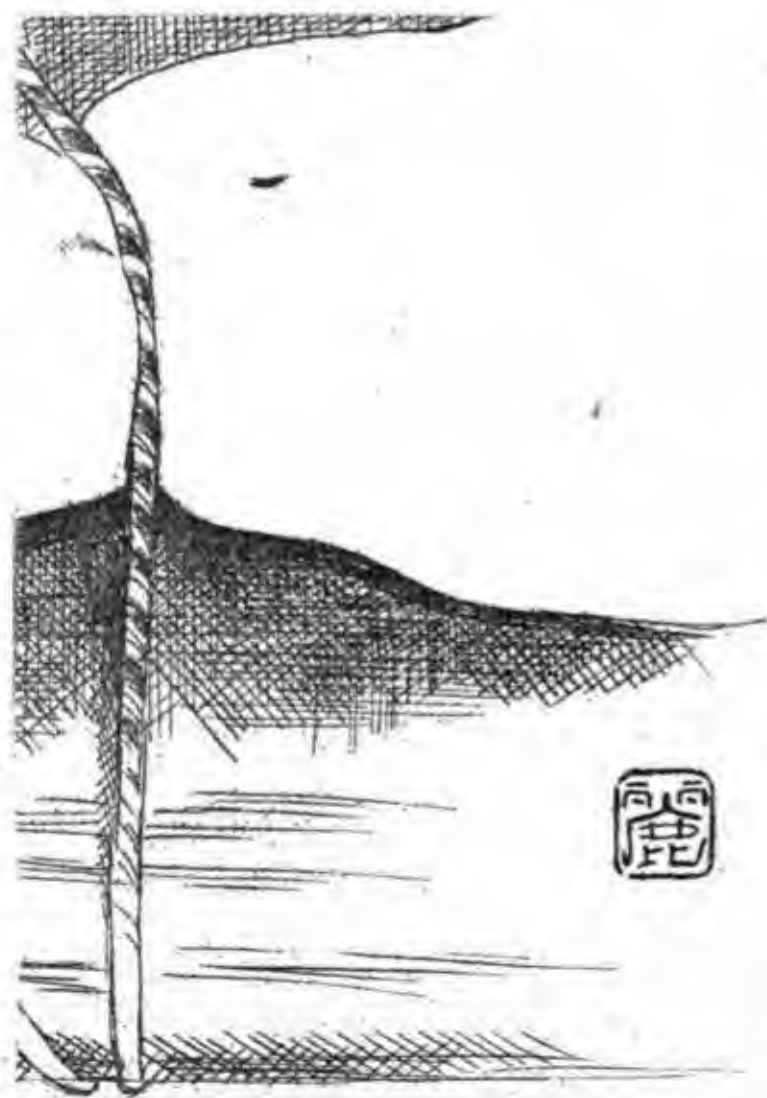
私は奴隷なのだから、素直に云われた通りにしなければいけないわ。久美も内心はそう思っていたのだが、相手が同性だと何か素直になれないものがあつた。大きな黒い目を憎悪で光らせ、口を尖らせて、久美は近附いて来る女の子をみつめていた。

飼育ガールは鎖で久美の両手を後手に繋いだ。久美はベッドの上に仰向けに寝かされ、布団を捲られた。天井を向いてツンと立ったを双の乳首の上に、本当にもぐさをのせられた。

女の子は線香に火をつけて久美の胸の上にかざした。線香の香りがツンと鼻を衝いた。久美は思わず目を閉じた。

しかし流石に久美の乳房は焼かれなかった。その代り奇想天外な責めが、この不遜な女奴隷の肉体に加えられることになった。久美は後手、仰向けのまゝ胸と首と顔をベルトでベッドに固定された。鼻環が外された。まだ生々しい傷痕が残っている鼻中隔の鼻環を通す孔に、もぐさがセメントの様にぎっしり詰められ、左右の鼻腔から順に線香を入れられて、両側から火をつけられたのだ。

ギリ／＼と鼻中隔の傷孔の焼かれる激痛に、久美は呻き、泣き叫んだ。自由な腰をよじり、脚をくねらせた。その姿は、蛆に釘付けされて尻尾だけくねらせながら料理されている、鯨か鰻によく似ていた。鼻の孔からモク／＼ともぐさの煙を吐いている所は、その鯨



か鰻が先ず鼻先から焼かれていると云った図である。全く久美の五体が料理されるのは、これからののだ。

煙に咽びながら栗色の大鯰は悲鳴を挙げた。許しを乞うて哀訴した。

「食べるのね。すっかり食べるわね」

「ハイ。みんな食べます。ウツ、ゴホン」

ベルトが外され、逆に鼻環が又、附けられた。久美は、それこそ細く刻んだキャベツの只一片まで食べ尽した。ところが、それでもまだいけなかった。

飼育ガールは久美の足鎖を外して、外へ出る様に命じた。

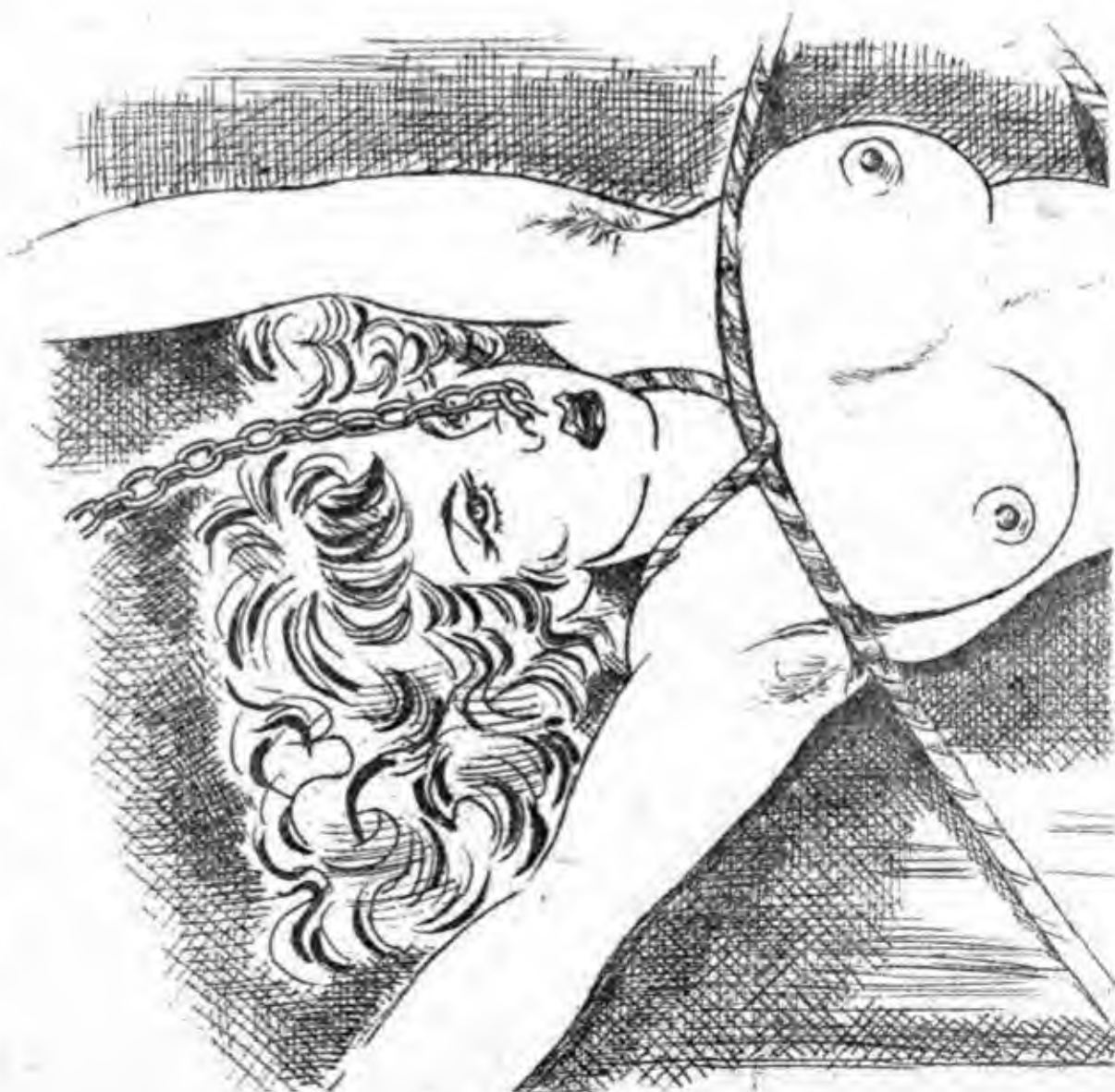
ストリップパー上りの評判の奴隷ニューフェースを見ようと押掛けた見物人は、檻の周りで押し合いへし合いしている。その好奇の視線の十字砲火の真中に、何でベッドから降り立つことが出来ようか。久美は赧くなって、もう許して下さい、と哀願した。こんな美しくも何ともないつまらぬ女の子に憐みを乞うなんて、と心の中は煮えくり返る思いだったが、面従腹背は奴隷にとって最も尊重すべきモラルなのだ、と思い返していた。

女の子は片手にソース差しを掴み、片手で久美の鼻環を上へ引張り上げた。

「さっさと出ないと、鼻の孔にソースを注ぎ込むわよ」

本当に注がれかねないので、久美は熱々ベッドの縁に腰掛け、長い脚を床につけた。鉄檻の床は冷えきっていて、ヒンヤリした感覚が背骨を走って行った。女の子はフォークの先で久美の豊かな背肌をチクチクと突っついて促した。

「早くお立ちなさい」



あきらめて久美は立上った。五尺四寸の上背を持つ琥珀色の長身が、衆目の中に晒された。

「両手は後にお廻し」

久美は観念して、云われた通りにした。後手が、しっかりベルトで縛られた。



「中腰になって太腿を水平にしない」

久美は肉付きのいい肩まで赧くなって、ガックリうなだれたまま云われた通りの姿勢を取った。

ふくよかな二の腕の脇肉に、チクリとフォークが刺さった。

「顔は真直ぐ上げて」

恥ずかしさを押殺して、やっとの思いで正面を向くと、顎の裏に素早くフォークを上向きに当てられた。もううつむくことは出来ない。久美は固く目をつぶっていた。顎の裏に、チクリ、チクリとフォークが刺さる。

「目は、うんと大きくあけて」

「踵を出来るだけ高く上げて、爪先だけでその姿勢を支えるのよ」  
右手のフォークで久美の尖った顎を上げさせたまま、女の子の左手が西洋皿を掴んだ。

中腰でお臀をぐうっと突出した姿勢の久美は、膝頭を固く密着させていた。皿は、その膝のすぐ前まで来た。

「膝を開き」

久美はキリリと下唇を噛んだ。

「ホラ、云うことを聞きなさい」

顎の裏をチクリ、チクリ、チクリと連続的に突かれて、久美の顔は段々天井を向いて行ったが、勝気そうな黒目が反抗的にキラキラ光るばかりで、久美の丸いつややかな膝は一層、固く同じ合わされた。

久美の顔がすっかり天井を向いてしまうと、女の子は皿を床に置いてソース差しを取り、その鼻孔を久美の右の鼻腔に軽く入れた。

ソースのスパイスがツーンと鼻腔の奥を刺し、鼻環の傷孔に烈し

い痛みが加わる。

チィッ。

久美は中腰で天井を向いたまま思わず声を放った。ドロリとしたソースがどくどくと鼻腔から流れ出した。逞しい胸の隆起が大きく波打つ。頬に溢れたソースが目の上へ流れ込んで来ると、久美は固く目を閉じた。

身体のパランスを失して、久美は固く目をつぶったまま仰向けに倒れた。真紅の奴隷マークが、一瞬、人々の視野に閃光の様にひらめいた。

後手に縛られたまま、久美は、やっとの思いで起上った。尖った顎からソースを滴らせながら座り直して、膝をピタッと合わせた。  
女の子は奴隷課員なら、いつも携行しなければならないことになっている拷の笞を、初めて久美の背中に振った。

ビシッ。

と、きつい音がして、久美は豊かな背中をくねらせ、固く目を閉じたまま、ソースだらけの顔をのけぞらせて呻いた。

「先刻の様に中腰になりなさい」

ビシッ。

「爪先を立てて」

ビシッ。

「もつと立てて」

ビシッ。

「顔を上げて」

ビシッ。

「膝を開いて」

「何故、云うことを聞かないの」

ビシッ、ビシッ、ビシッ、ビシッ。

久美の背に笞が連打された。久美は呻き、のけぞり、ハアハア喘いで、悲鳴を挙げた。が、膝だけは割らなかつた。

又、バランスを失って倒れ、最初の中腰からやり直させられた。

倒れては中腰の姿勢にされ、叱られてはビシビシ背中や臀を打ちのめされ、久美の後半身は赤く腫れ、疲れて動きも鈍った。

十何度目かの中腰、爪先立ちをさせられた時、女の子はニヤッと笑って笞を捨てた。

久美は後手に縛られたまま、太腿を水平に伸して、大きな臀をありたけ後へ突出し、爪先立って、ぐっと胸を起していた。爪先がかすかに細かく震え、震動は幅広い肩にまでそのまま伝わっていた。

そのあたりのなめらかな皮膚は、笞傷が生々しく腫上り、所々細かく皮膚が破れて鮮血を噴いていた。

女の子は奴隷の肩にソース差しのソースをたら／＼と、こぼし始めた。生々しい笞跡にソースがしみ入って、肩のあちこちがヒリ／＼と痛み始めた。久美は行儀よく中腰のポーズを保ち乍ら、獣の様な呻き声を洩らし始めた。

女の子はソースをすっかり久美の肩にたらし終ると、スーツのポケットから携帯用の小さな靴刷毛を取出した。おとなしそうな顔に意外な程、悪魔的な含み笑いを浮べて、彼女は刷毛で久美の広い背中一面に、ソースを薄く刷き延ばし始めた。

ヒリヒリ、ヒリヒリ、と痛みは久美の肩から背中、更に臀の方まで拡がって行った。皮膚の破れ口に刷毛の毛が突き刺さると、ギクンと神経が刺激されて、飛上る程、痛い。久美は顔をしかめ、後手

に縛された腕をよじり、大粒の涙をポロ／＼こぼして、恥も見栄もなくワア／＼と大声で泣出してしまった。

「素直にさえすれば背中ソースは綺麗に拭取って楽にしてやるわよ。いやだと云うのならソースの上からもっと背中をぶって、痛い目を味わわせてやる。どっちがいいの。さあ。イエスかノーか返事をしなさい」

流石の久美も、とう／＼泣き乍ら、一切、女の子の云う通りにすることを誓約してしまった。

女の子は自分のハンカチを濡らして、背中ソースをすっかり拭取った。久美はグラ／＼しながら、爪先立ち中腰の姿勢で背中を拭かれていた。

「さあ、大分になったでしょう。では、開けえ——、膝ッ」

檻の外の群衆が一斉に吹出した。久美は屈辱に打ちのめされた思いで膝を開いた。女の子はその間に西洋皿を挟ませた。

「そのお皿にはお野菜の汁とビフテキの脂、それに化学調味料のたっぷり溶けたおソースがこびりついているのよ。それも貴女の身体に必要なカロリー源なのだから、綺麗に舐めてしまわなければ駄目よ。そのまゝの姿勢、つまり手は後手、腰は中腰、全身を爪先だけで支えて、お皿は膝に挟んだまま、おソースをすっかりお舐めなさい。

これが奴隷の貴女には一番、相応しいお食事のマナーですからね」  
女の子は久美の背後に廻った。再び肉づきのいい背中を打ち据える。ビシッ、ビシッ、という笞音が鳴響いた。久美は豊かな栗色の身体を蝦よりも丸く折り曲げ、自分の膝で挟んだ皿の表面をペロペロと舐め始めた。涙がポロポロと皿の中にこぼれて、辛いソースが次第に水っぽい味に変わっていった。





## 妊婦の切腹を

## 実見した話

菊 丸 三 郎

私はその時、長野県のK峡にあるS温泉旅館に宿泊した。S旅館は昭和二十三年に建てられたものだったが、今日では次第に名も出て来て、東京方面からの遊覧客も散見される程度になっていた。

人里離れた深山幽谷を縫う溪流を眼下に眺めて聳立するこの旅館からの、大自然の眺望

は、余りにも人工設備のごみごみした他の土地の温泉宿とは全く別趣の雰囲気があり、虚飾なき天然美を満喫することの出来るのが特に私の好みに合っていた。そんな訳で私はこの土地の材木業者に杉材の注文を終えると、夜道を四里もハイヤーをばせて態々僻地のS旅館にやって来たのだった。

私は一風呂浴びると、すっかり疲労がぬけていい気持ちになり、名物の岩魚料理を肴に旅館の若い女中をひやかしながら晩酌を重ねると、ついうとうとと横になって居眠りを始めたのであった。

私の部屋は帳場と最も遠い一番の奥部屋で滝壺の近くの為、一切の音が水音の為に消さ

れているが、昼はまた特別に良い眺望の場所であるというので、私は特にその部屋を陣取ったのであった。

どれ程眠ったろうか。——ふと眼を覚ますと部屋には小さい豆ランプがついていて、先刻の若い女中が掛けて行ったらしい毛布が胸の辺迄きているし、御膳や徳利はすっかり片付けられ、寝床が敷かれてあるのが眼に止った。

腕時計をみると二時半を指している。久しぶりの深酔いの為か頭がづきづきして重い。

私は喉の渴きを覚えて枕元の水差しに手を伸ばした。すると壁を隔てて、人の声がする様である。耳を敬てると何だか女の声の様だ。

その中に「死ぬんだね、今晚は愈々」と今度はハッキリ男の声がした。私は思わずハッと息を殺した。

「只事ではない、ひよっとすると近頃流行の旅館心中かな？」私は急に湧き立ってくる好奇心から、半ば無意識に壁の所へ行く衝動に駆られた、その時、ふと隣の部屋との境の鴨居の上の欄間が眼に映った。

鴨居の上の欄間は畳から約八尺位の高さにあったが、欄間は桐の薄板を雲形に挟み抜いてあるので、何か踏台にすれば隣の部屋が

丸見えである。私は酒に酔も手伝って、人間本性の好奇心を自制し得なかった、とその時の心境を後になってから自分勝手な理屈をつけてはいるが、私は咄嗟に縁側にあった藤椅子を極めて静かに手繰り寄せ、その上に静かに立ってひよいと欄間の間から隣の部屋を見下ろしたのである。

隣室は私の部屋と同じ位いの広さの八畳で、明るい電燈の下で向い合って坐った若い男女が手を握り合っているのがすぐ視野に入った。

女は年頃は二十台位いか、背後からでよく顔は判らなかつたが襟足の白い肩の肉づきの良いのが妙に印象的で大柄の女だ。

浴衣地かとも思える白生地の小千谷縮に大きく紅葉の葉を染めだした派手な単衣を着ている。男は矢張り二十台らしいが端正な鼻すじの通った一寸神経質そうな色白な男だが、女より遙かに小柄である。

だが、その顔貌は何か一心に思案している様子で、非常に深刻そうに額に皺をよせている。男は旅館の浴衣を着ているが何故か帯もしめていない。沈黙が続いている様子である。

間もなく女の半ばは哀願する様な調子のか細いがすき透った声が、周囲の夜の静寂を破

った。

「私、決心したのよ。貴方と、どうやって死のうかと」女が男の両手を強く握りしめる動作がよく私の位置から判る。滝の水音は部屋を閉め切っている為か殆んど苦にならない雑音程度にしか聞えない。却って密室の為に室内の声はよく反響する。

「薬も簡単だけど、アッという間でしよう。私、うんと苦しみながらお腹の赤ん坊と一緒に死んで行きたいの」

私は酒の為許りでなく、胸が高鳴って来た。私だってもう不惑を越した分別盛りで、人並みの人情と常識は持っている心算であり、直ぐとび出して行つて此の若い生命を救おうと瞬間考えたが、なに隣の部屋だ、声を此処から出しても間に合う訳だし、実行直前に制止してもよいのだし、甚だ人の悪い様な話だが、如何に莫大な金銭によつても贖い得ざる絶大なるスリル感を味覚する絶好のチャンスではあるし、もう少し拱手傍観しては、と云う好奇心に先制されて、その儘じつと息を殺したが、鴨居を押さえている私の掌には脂汗の滲んで来るのを感じた。

成る程、女はよく観察すると妊娠しているらしい。横腹の異様な円みは確かに尋常の身



体ではないと云うことに私は気がついた。

「私、——お腹を切って——死にたいの」——  
腹を切るといふ殺伐な言葉が女の口から洩れた時は、私は思わずギクツとした。

「何んだって民子、お腹を切るんだって？」

男は先刻から少しボンヤリしている様子だったが此の言葉には流石にハツとして、自分に還って荒々しく喘ぐ様に口を開いた。

「僕は、僕は、民、民子、お腹なんぞ切れないよ。とても、とても、そんな痛いこと、とても出来やしない」——

「貴方が自分のお腹、切るんじゃないくてよ。私が自分のお腹を切るの。でも切り損うといけなから、貴方にそれを手伝って貰いたいの」

女は落着いているが、男はぶるぶる慄えているのが、手に取る様に私には見えて来る。

「でも痛いだろう。何故、民子はお腹なぞ切るといふの。それに僕だって薬は持って来たさ。薬の方がいいよ、苦しまないだけね」

「そうね、それはそうかも知れ



ないわ。だけど民子の最後の願いを叶えて……

一週間程前に私、夢をみたわ。私が血だらけになって私の頭から金色の光が輝いているの。そして神様の御告げがあったの。——生ける間、生身に最大の苦痛を与えるのは、すべて在世の諸々の悪業滅却の償いにならんと。——私は信ずるわ」

私はその時、僅かに動いたその女の横顔を見た時、何か妖しい靈気のようなものを感じた様な気がする。

「お腹の赤ちゃん——貴方と私の子も可哀そう

だけど一緒に死んで貰う心算よ」

女が余り平然としているので、私も変な気持ちだった。

「私、貴方に見守られて最大の苦痛を味わって死にたいの。民子の最後の願い、叶えてね——」

女は、やがて床の間の片隅に置いてある鏡台の前に坐った。乱れた髪を梳ると、大型のトランクから「かつら」を取り出した。一人では無理な仕事だ、と思っている中に日本髪が何時の間にか出来上っていた。素肌に純白

な絹地らしい襦袢、赤い細い腰巻、丁度、和式の結婚式を済ませた花嫁の様な出で立ちである。腹部の隆起だけが異常である。どうしてこの様な異様な扮装をしたか？ 恐らく昔の武士の妻の切腹を連想してその古式に則ったかと思われるが——今以ってその理由が、私には判らない。

女は更にトランクからビニール布の大きなものを床の側に広げた。そして遺書らしいものとハンドバッグを文机の上に置い

た。

「さあ、愈々天国へ行くわよ。貴方、私の後に廻って私の腰の処をしっかりと押えて頂戴」

素晴らしい終えたと女はビニール布の上へ端坐した。男は女の言葉に催眠術をかけられた様にフラフラと立ち上った。そして左腕で女の腰の辺りを後から抱き締めると、両膝で女の身体を固定した。

「そうそう、旨く行ったわ」

女はそう云い終ると、肌着の白襦袢を脱ぎ、その下から、こんもりと隆起して乳首に真黒な色素沈着を起した見事な妊娠乳房が盛り上っているのが見えた。一寸、乳房を押さえれば今にも乳汁が噴水の様に飛び出しそうに張り切っている。

女は側にあつた短刀を拾った。而して右手に把手に白い綱帯をまいた刃幅一寸、刃長五寸位の短刀を逆手に持った。左手で腰の細紐の結び目を解くと、下から妊娠の為の白木綿の腹帯が出る。その腹帯を二、三度、上方へ押しあげる。



臨月近い円形に突き出した白いふくよかな腹部は正にこれから行われんとする残酷な殺戮に対し、小さき生命が恰も反抗する様に二、三度、痙攣するかの様に見えた。張り切った腹部に黒びかりのする妊娠線が数条走っているのがよくみえる。女の乳房は私の真正面の位置である。女の顔は少々俯向き加減であるが流石に蒼白い。赤い口紅が妙に印象的

だが、両瞳は得体の知れない熱を含んでいる。

私は、こんな妖魔的美しさを持った女の顔を見たことがない。ああ何という美しさだろう。「民子、こんな残酷な遣り方、もう一度、考え直したら？」

男は、うなる様に云った。

「いや、いや、絶対にいやよ。神様の御告げもあるし、今度こそ本当に胸がワクワクするの」

私はこの情景を見て、余程、飛び出そうかと思ったが、ふと別の考えが脳裡をかすめた。私の現在の立場は、勿論、自殺幫助罪を形成しない。私は単なる傍観者であるに過ぎない。仮りに私が出て行って自殺を中止せしめても、之が果して彼等の為になることか否か。——その時、私のアルコールに上氣した頭脳はそう考えた。

「じゃ、いよいよお別れだわ。お先にね。私がお腹に突き刺したら、思いきり右へ廻してね！」

女は白い腹帯をもう一度上へ押しあげた。



而して下腹を二、三度、従容として撫でると両手に力を入れて俯向き加減の儘、左の下腹部にプツリと短刀をつき立てた。

一寸程這入ったらしいが、それ以上は這入らないらしい。

「貴方、もっと深く刺して。ね、少ししか這入らないわ」

男は、女の短刀の柄を握っていた両手を払いのけると、短刀の柄をしっかりと握りしめてグッと力を入れて刺した。更に一寸程深々と這入った。女は苦痛の為、身体が少々反身になる。

女の両眼は稍々上向きにカッと開かれ、口は大きくあいた。両唇はわなわな痙攣し、美しい白い歯列をむき出して泳えてはいるが、苦痛の為ガツガツ鳴った。

短刀の刺入口から血が滲み出し、左の太腿の内側を一条線を引いて流れた。

短刀はいくらか斜めの角度で若い女特有の下腹部の部厚い脂肪層や、筋肉の繊維や、腹腔内の臓器を切り裂いて、それ等を切断する度毎に無気味なブスツという低音をたてる。

「う、う、うーれーれしいわ。ずーずいぶんーいたーい、いた、いたーいけど……」

女は身体を弓の様に曲げ切っていた。短刀

は約二寸位の深さの儘ジリジリと右へ移動している。切り口が三寸位になり臍の下辺に來たと思われる頃、それ迄両乳房をしっかりと掌で握りしめ、男のなすが儘にしていた彼女は、左手を離して、下腹を力を籠めて斜めに切り裂いている男の腕を握りしめ、押しかえそうとする気配が見えた。多分、苦痛の極みからだろう。男も思わずハッと気がついて腕の力を弛めた。女の顔中から脂汗が吹き出している。男が腕の力を弛めると、女は呻く様に口を開いた。

「も、も、もーと、ひいて、かーかーかわないわ！ーとーとーとーとも痛いけど」

女は首を下に曲げると両手で下腹の切り口からドクドクと奔流する生温い血液に手を浸した。一瞬、苦痛の為、極度に唇は歪めてはいるが、しかし満足そうな瞳が私の眼に映じた。

男は再び腕に力を加えた。短刀はズブツと音がして右へ動き始めた。

下腹の切り口が次第に大きくなると、腹圧のため、ゴム風船の様にガスが充満した腸や、網目の様な黄色の脂肪塊の所々に附着した腸網膜や、腸間膜、それ等の附屬物がはみ出て來た。腸内容も血液と一緒に押し出さ

れ、半凝固血塊となつてゴロゴロ転げ落ちて來た。又、パツクリ口をあけ無気味に白く光っている脂肪層の下からは、小動脈を切ったが為に太い針位の太さの血線が噴水の様に数条吹き出した。

女は弓なりの身体を急に戦慄するかの様に左右に振った。

短刀が臍の下三寸の所を僅かに斜めに右に進行した時、激しい呼吸が四、五度、繰り返された。

「うーうーうー」

それと同時にザァーと大小の血塊と血液が物凄い奔流となつて飛び出し、下に敷いてあるビニール布の上に飛沫をあげて四散した。

羊水膜と妊娠で過度に膨脹せる子宮を切った瞬間だった。

「あーあ、あ、あーなた、あか、赤ん坊ーき、きつたーわーね、うーうーうーれーい」

下腹は殆んど真赤で網の目の様な血河が脉の搏動とともにドクンドクンと波打って流れ出している。而してビニール敷物の上に大小不定型の血の溜池をドンドンつくって行く。

女は両頬を硬直させ、下唇はワナワナ痙攣を繰り返している。歯は力まかせに強くくい縛り、眦は両方ともつり上っている。正に断末魔の形相である。短刀が右の大腸を切断したと思われる頃、女は二、三度、両手で両

乳房く押しあげた様だったが、既に爪甲は真白となり、薔薇色だった両頬も殆んど色褪せて蒼白だった。只、口紅の真紅色だけは褪色しないのが却って馬鹿に色っぽかった。

両眼は、うす眼に開いてはいるが、濁ったうつろな光を反射しているだけだった。

男は右の下腹迄深くひき廻した短刀を引き抜くと、矢庭に臍の所にズブリと刺したとみるや一氣に下方に向かって切り下げていった。正に十文字切腹である。

その切口から、再び血液がどっと吹き出した。女はもう半分以上、意識を失っていたが、十文字切腹が始るや

「いーいたい、いたい、いーいたい、いたい」

半ば無意識的に両手で切り口を押さえた。女は肩で極めて浅い速い呼吸を繰り返している。

男は女の腰をまいて腕をゆるめると、女の後頸部と膝の下に手を入れた。而して自分より遙かに大柄な女を抱き担ぐと、ビニール布の上に静かに仰向けに寝かせた。

女の顔に刻まれていた今迄の強度の疼痛による苦渋の面は次第に消えてゆき、顔こそ硬ばらせていたが法悦の表情が滲み出ていた。

男は、かねて側に用意して置いたらしい、白い粉を溶かした液体の這入ったコップをと

り上げ一息に飲み干した。而して間もなく二、三度、喘ぎ、胸の辺を掻きむしる様な恰好をして軽い痙攣発作を起すと、女の身体の上にドサリと折りかさなるように倒れて、その儘静かになってしまった。

x

x

此の惨劇を始終、至近距離から全然、気づかれずに実見していた私は、酒の酔なぞとくにくにすつとんでしまつて極度の刺激と興奮の為、しばらく茫然自失していた。

どれ位経つたろうか。暫くして冷静になると此の惨事は水音と深夜の為、私の部屋以外からは誰も気がついてはいないのではないかという事を思い浮べた。

私は、そつと廊下に出てみた。周囲は森閑としていて聞えるのは滝の音だけだ。誰も騒ぎ出した様子はない。

私は、ふと考えた。翌日は、どうせ旅館中、大騒ぎになるのは必至だし、警察の検屍があれば隣室の人間として、参考人にさせられたり、調書をとられたり、場合によっては引き留めを喰う事になるかも知れない。これは早く退散するに限ると思つた。腕時計をみるともう一時間もすれば夜が明ける。私は隣の部屋に向つてすでに天国に旅立つた二人の霊に心からなる合掌を終えりと荷物を纏めにかかった。旅行鞆からサントリーウィスキー

をとりだすとグイグイ喇叭飲みをして、早く夜が明けてくれればよいと思つた。

私は、朝早く、朝食もとらず、未だ眠っている女中を叩き起し、何喰わぬ顔で勘定をすませ、その儘徒歩で旅館を出発し、途中で始発のバスに乗った。旅館を出る時、流石に女中は不審そうな顔付だったが――。

x

x

私は旅行の日程を此の事件の為、数日延ばしてもよいと決め、T市まで来て旅館に泊つた。新聞記事を見て詳細を知りたかつたのである。惨劇の日の翌々日の朝刊まで私は新聞記事に眼を皿のようにして此の惨劇の報道を探した。果して翌日の朝刊の地方版に、何れの新聞紙にも大見出しの記事として大々的にセンセイショナルな報道をしていた。

二、三の新聞を総合すると男女は此のT市に居住して居り女はK教徒でT市小町といわれるほどの評判の美人であつたが、初婚に破れて以来、精神異常を来していたという話であつた。しかし若く美しい女、殊に妊婦の割腹自殺はさすがにセンセイショナルな事件だけにどの新聞も大きくとりあげていた。

男は某漁業組合の書記をしており、女より一つ下の年で、公金使い込みの容疑で数日中にその筋で取調べられることになつていたそうである。

(終)





## 連載小説

## 狩 獵 者

(第九回)

新 佐 川 工・画 槐

## 第六の獲物

司慎之輔は、野球そのものに興味はない。しかし、プロ野球の選手には、少なからぬ関心があった。それもその筈で、どの球団にも、獲物になりそうな、若くてイキのいい雄がそろっている。

関心があるといっても、はなはだ莫然としたもので、慎之輔は、選手の名前をほとんど知らなかった。

オープン戦の放送がはじまると、珍しくテレビを観るようになった慎之輔に、山科は、

(今度は野球選手か)とひそかに苦笑いを洩らした。

バッテリー・ボックスに立つ打者が、次々とブラウン管に受像されるが、魅つきはともかく、容貌までとなると、これはと思う選手は案外にいない。ユニホーム姿は誰もみな颯爽としているが、いざその中から獲物を選ぶとなると、簡単にはいかなかった。

(いない……)

半ば、慎之輔が失望しかけたとき、テレビ・カメラの望遠レンズが、鮮明に投手の上半身を捉えた。

野球帽の下で、鷹のような鋭い眼が光っている。

投手が大きくふりかぶると、レンズがズーミングされて全身を映し、豪快なホームを観せる。

「オイ、いま投げてるピッチャーはなんて選手だ?」

「小諸ですよ。シャークスのエースでさア」

三人のうちでは、一番野球通の杉田が答えた。もっとも、野球ファンでなくても小諸投手を知らぬ者はない。慎之輔も名前だけは聞いていた。

「あれが小諸か……」

慎之輔は、そう呟いただけだったが、その表情を読んだ山科は、

(大物を狙ったものだ)

と思い、ゾクリと武者顫いのようなものを感じた。

小諸投手に関する資料は豊富にある。慎之輔は、杉田から二、三の野球雑誌や選手名鑑を借りて、彼独得の見地から検討を進めたが、小諸に立てた白羽の矢は、いよいよ動かし難いものとなった。

スポーツ誌のグラビアには、温泉地のキャンプのナップに入浴の写真も載っている。小諸は、浴槽に浸かって胸から上をだしているだけだったが、筋肉質のみるからに逞しい体つきに加えて、黒々と深い胸毛は、充分に満足できるものだった。

なお細部の点検は、山科に委せればいい。彼なら必ずうまくやるだろう。

扉が高くノックされた。

そのまえから立ちあがっていた慎之輔は、「入れ」とはずんだ声をだした。

「うまうまきましたぜ。ちようど、風呂へ入っているとこを襲って、すべて点検済みで

す」

山科は、意味ありげにニヤリとした。

「裸のままか？」

「ええ、おあつらえむきに素ッ裸です。手数がいりませんや。すぐ檻へぶちこんどきました。手の縄をワザと緩めといたから、いまごろは自由になつてゐるだろうが、逃げる気ずけえはねえ。動物園の熊みてえに、グルグル歩きまわつてゐるかもしれません。熊つていやア、あいつ、それこそ熊みてえに毛深えんでおどろきましたネ。ちよつとそこいらには無え逸品だ」

山科の饒舌が氣に触つたのか、慎之輔は、ちよつと表情を硬くしたが、無言で、山科を押しつけるように廊下へでた。

「まア、独りでゆっくりと觀賞しててください。そのまに例のほうの準備をしときますから——」

山科の声をあとに歩きだす慎之輔の足は、次第に早くなる。

着衣のない小諸洪介は、遅しく、毛深い全身をむきだしにして、檻の中をいったりきたりしていた。

山科の云つたとおり、まるで動物園の熊だが、熊よりはるかに敏捷で、筋肉のひきし

まった肢体は、たとえるなら、むしろ黒豹だろう。

慎之輔の姿を認めた小諸は鉄格子を両手で握り、

「貴様が親分オヤジか？」

と、きつと睨んだが、自分と幾らも齡の違わぬらしい端正な青年を見て、意外な面もちだった。

「それとも、貴様も手下の一人か？ そうなら親分オヤジを早くだせ。俺になんの用があるかははおおよそ判っている。俺は氣が短いんだ。早いとこ決着をつけてもらいたいね」

慎之輔が黙っているの、小諸は、少し焦だっていた。

それに、舐めまわされるような相手の視線も不快だった。

「おい、なんとか云つたらどうだ。いったい貴様は、何者なんだ？」

「俺が、親分オヤジだよ」

「フウン、そうか。じゃ、まず、俺をここからだしてくれ。こうなつた以上、逃げも隠れもせん。一応、話だけは聞こうじゃないか」

「まア、そうあせるな。いずれは、だしてやるんだ」

「これじゃ、まるで動物の檻だ。それに、貴



様の乾分はヒドイ奴らだ。俺を、風呂場から裸のまま拉致しゃがった。見る。こんな恰好じゃ話もできん。俺をだすのが不安なら、着るものだけでもくれ、なんかあるだろう」

「その必要はない」

慎之輔の瞳は熱したままだったが、口許は冷たい陰をつくった。

「俺は君の牝に用があるんだ。君はユニホームがなかなかよく似合うが、裸体はもっと素晴らしいよ」

「冗談を聞いているひまはない。そっちで云わなきゃ、こっちで云ってやる。結論は一つだ。どんな条件をだそうが、俺は断じて妥協せんぞ。少くとも、俺を狙ったのは失敗だったな」

小諸の昂然とした口調に、慎之輔は、一瞬怪訝そうにしたが、不意に笑いだすと、

「君はなにか思い違いをしてるようだ。独りでのみこんで威張ってるみたいだが、俺がなんの目的で君を誘拐したと思ってるんだ？」

「まだしらばっくれるのか。俺は、シャークスの小諸だぞ。俺を不法に連れだした目的は一つしかない筈だ」

「と云うと？」

「からかうのもいいかげんにしろ。貴様ら

が、ギャンブルのために俺を買収しようとしていることぐらい、ちゃんと察しがついてるんだ！」

「なるほど、そうか。アッハハハ、そいつは俺も気がつかなかったよ」

「……！」

今度は、小諸のほうが呆れ顔をする。元来

がまわりくどいことの嫌いな小諸は、いいかげんどうをにやしてきた。

「ともかく、俺のことは諦めるんだな。狙うなら他の奴をと云いたいところだが、シャークスは駄目だぜ。あいにくと骨のある奴ばかりそろってる。だいたい、貴様らの考えは甘すぎるんだ」



「まあ、なんとも思っている。そのうち、おいおいと判ってくるさ」

いつまで見ていても、見飽きることのない体だったが、あとに楽しみをひかえている慎之輔は、適当にあしらって、部屋をでていくとした。

「待て！オイ、俺を、いつまで、こんなところへ入れておくつもりだ？」

小諸は、檜の幹のような逞しい右腕を鉄格子の間から突きだして呷鳴ったが、軽く身をかわした慎之輔は、ニヤツとしてそのまま扉の外へ消えた。

## 執 念

新宿界隈を縄張りとしている「大熊組」の乾分、葉室五郎は、兄哥分の木島鉄次が何者かによって惨殺されたあと、幹部の一人に加えられたが、彼は、内心、怏々として楽しまなかった。

葉室としては、「大熊組」の幹部として、いい顔になるよりも、いままで通り木島の舎弟分であるほうが、どれほど生甲斐があったかshれないのだ。

もし、木島という人物がこの世に存在しなかったら、そして偶然彼にめぐりあわなかったら、

たら、葉室は、やくざになっていたかどうか判らない。

木島も、葉室をかわいがってはいたが、ただ、葉室がいつまでも女を無視していることだけは、気に入らぬらしかった。

もちろん、木島は、親切のつもりで女をとりのつたのだが、葉室にしてみれば、このうえもない無理難題だった。

しかし、木島の機嫌を損ずることを恐れて葉室は、しぶしぶ女のアパートへいくにはいったが、結局は、

「五郎、それでもあんたは男なのかい！」と罵られて帰った。

木島の怒った顔が眼の前に見えるようだったが、葉室にとって、女はもとより、木島以外の男にでも必要以上に近づくことは、自分を欺くことだったのだ。だが、その木島には呷鳴られずにすんだ。その晩のうちに、木島は殺されていたのである。

木島の死が、葉室にあたえた衝撃は、他の誰もが想像できぬほど強いものだった。

復讐の鬼となった葉室は、草の根を分けても犯人を捜しだし、この恨みは必ずはらしてみせると、時代がかった誓いを、木島の霊前にたてた。

犯人捜査は、警察に委せておけばいい筈だが、葉室は、犯人がたとえ死刑になっても、それだけでは気持がおさまらなかつた。彼は自分の手で、木島同様鷹り殺しにしてやらなければ、復讐にはならぬと考えていた。

当局が木島の事件にてこずっているということは、ある意味で葉室に幸いだったが、それだけに、また、個人で犯人を捜し出す至難さが思いやられた。

だが、とうとう、葉室の執念は、犯人のいどころをつきとめるにいたつたのである。

その端緒となったのは、あるバーで偶々山科を発見したことだった。

もっとも、葉室は、山科の名を知らなかつたし、彼を、単に、どこかで見たような人物だと思っただけだった。

ハツと気づいたのは、一緒に飲んでいた仲間、荒巻が、

「どうだ、これからキャバレーへでもしけこもうじゃねえか？」と云ったときだ。

そうだ、キャバレー「夜光塗料」で逢ったことがある——。確信はなかつたが、葉室は妙にその男にひっかつた。

「駄目だ。俺はしなきゃならなえことがある。おまえ、独りでいってくれ」



「フウん、なんかわけがありそうだが、まあいいや、ヤボは云わねえよ。じゃ、いくぜ」  
荒巻がでていくと、葉室は、スタンドから暗いボックスへ位置をかえて、山科を監視しはじめた。

なにも感ずいていないらしい山科を尾行するのは楽だった。そうして、葉室は、「司」と門標のある家を見つけたのである。

だが、葉室は、いきなり踏みこむような軽挙にはでなかった。それから数日間、彼は、辛抱強く機会を待っていた。

その網にかかったのは南だった。

司慎之輔の狩猟には、気まぐれなところがあった、いつ、突然に命令がでる判らないから、山科ら三人は、二人が常時待機していることになっていて、自由外出は順番に一人ずつしている。

浅草へでもいってみようかと、フラリと門をでた南は、ものかげから不意に現れたやくざふうの男に、ピタリと躰をつけられてヒヤッとした。

相手は上衣のポケットに手をつっこんだままだったが、脇腹に当たっている固いものが拳銃であるのはまちがいない。

「兄さん。ちょっと顔を借してもれえてえん

だ」

押し殺した葉室の声に、南はふてくされたように歩きだした。

南がもどってみると、仕事がまっていた。

急きたてられて自動車に押しこまれた南は「オイ、顔色が悪いようだな」

と山科に云われ、胸をつかれたが、それ以上は追及されなかった。

杉田が乱暴な運転をするので、自動車の動揺はかなり激しい。それは、南の心境を象徴しているようだった。

後悔の念が嵐のように心を揺すり続ける。

だが、もうつつ走るよりしかたなかった。

小諸の素晴らしい男性美を目撃した瞬間、南の悔恨はいっぺんに吹きとび、ふたたび慎之輔への憎しみが燃えあがった。

南が慎之輔に対する不思議な愛情を、憎悪にかえていったプロセスについては、彼自身説明のつかぬことだったが、慎之輔を裏切った動機が、葉室に脅迫されたための自己防衛手段だったとばかり単純に云いきれないのは事実である。

## 吊り責め

どこまでも、慎之輔らを賭博団の一味だと思いつている小諸洪介は、逃げようとへたにジタバタするよりも、いかなる方法も無駄であることを、彼らに知らしめるのが上策だと考え、抵抗をやめて、監禁室から第一拷問室へ、云われるままに連れだされた。

金で駄目なら、躰で云うことをきかせようとするだろうとは、容易に想像がつく。

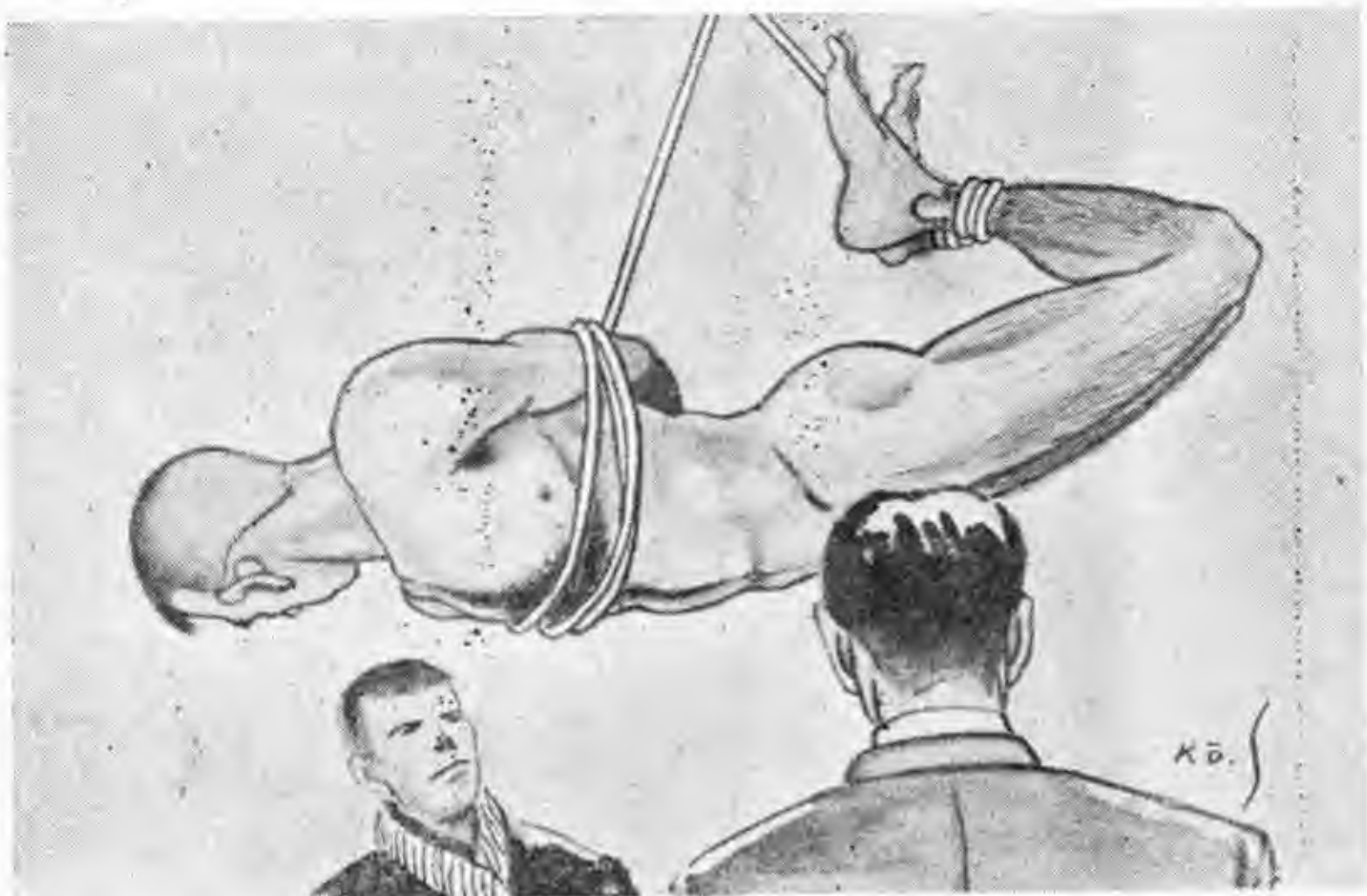
しかし、小諸は恐れなかった。いかに豪気な人間でも、拷問に堪えるには自ら限界のあるのを忘れていたわけではない。要するに、彼はたかをくくっていたのである。それも、慎之輔の恐ろしい正体を知らぬとあればしかたなかった。

意志力によって、恐怖を表情から隠すことはできる。しかし、生理機能がそれを証明するのを、意志でどうすることもできない。

慎之輔は、小調が恐怖の感情を、いささかもいだいていないを見ると、ますます加虐欲が横溢してくるのを覚えた。

第一拷問室の天井には、新設の三つを加えて、四つの滑車がとりつけられていた。

すでに覚悟を決めた小諸は、自若として、なすがままになっていたが、まったく不安を感じていないのではなかった。それは、手荒



い拷問で、肩や腕を痛めやしな  
いかという危惧だった。

小諸の思惑をよそに、太いロ  
ープが胸と腹に巻かれ、手首と  
足首も、やや細目の縄で括られ  
た。

胴のロープが、滑車からさが  
った鉤にかけられ、小諸の躰  
は、クレーンで船に積まれる馬  
のように、ジリジリと吊りあげ  
られはじめた。

ロープを巻いた部分にかなり  
の圧迫はあるが、体重は二カ所  
に等分されてかかるから、堪え  
られぬほどの苦痛はない。

床上二メートルで滑車が止ま  
ると、次に手と足のロープがひ  
かれ、小諸の長身は水平に近い  
恰好となった。

責めというより、それは、む  
しろ、観賞用の吊りといったほ  
うがいい。

宙吊りで俯伏せに手足を伸ば  
した小諸の躰は、常態において  
は見ることできぬ異観を呈

し、彼らの眼を楽しませる。

最初のうちこそなんでもないと  
思っていたものが、時間の経過につれ、少しずつ苦痛が  
増してくると、胸苦しさに小諸は吐気をもよ  
うしそうになった。

慎之輔はなにも云わないが、ねをあげれば  
負けだと思ふから、小諸は歯をくいしばって  
ジッと泳えている。

滑車が軋み、やっと小諸の躰は床におろさ  
れた。

胴も手も縄をはずされたが、ホッとするの  
は早く、足首を左右別々に括りなおされ、今  
度は、徐々に逆吊りになっていく。

腰が浮き、背中が離れ、そして頭も床を支  
えきれなくなると、腕がそれにかわる。

やがて、逆立ちの姿勢になったとき、滑車  
は回転をやめた。

足を吊られているだけ、逆立ちよりはよほ  
ど楽だが、たとえ全裸でないにしても、被虐  
者にあたえる屈辱感は大い。

やはり、これも、観賞用といえる吊りだっ  
た。

拷問というよりは、まるで闘りものにされ  
ているような小諸は、さすがにたまりかねて  
「オイ、俺は遊びの相手をするとは云ってい



ないぞ。子供欺しはやめにして、早いとこ白黒をつけたらどうだ」

と、充血で赤くなった顔に眼を怒らせた。

「フフ、九州男児だけあっていい度胸だ。催促とは恐れいるよ。じゃ、いよいよ本吊りにかかるとするか」

慎之輔の合図でロープが緩み、足が床につくと、小諸は、

「頼みが一つだけある。きいてくれるか？」と低い声で云った。

「なんだ？ 手かげんをしると云っても駄目だぜ。俺の拷問に容赦はないんだ」

慎之輔の眼が、惨忍に細められる。

「イヤ、そんなことじゃない。なにか着るものをほしいんだ。パンツかブリーフはないのか？ サポーターでもいい」

「そんなものの用意があるもンか。どうせサンザン裸を曝したんだ。いまさら恥ずかしがることもなからう」

「恥ずかしいんじゃない。ただ、具合が悪いんだ」

「ハハ、おなじことじゃアないか」

慎之輔は、笑ってとりあわない。云いだしたものの、小諸も、最初から駄目だとは思っていた。

浴室で襲われたときも、そのまま拉致されて監禁されてからも、ほとんど羞恥を感じなかった小諸だが、吊られてみると、妙に自意識に悩まされ、四人の視線に辟易した。

それは、彼の言葉どうり、なんとも云いようのない具合の悪さだった。

だが、アッサリと拒絶されると、小諸はきっぱりと諦めた。それ以上頼むのは哀願するようで嫌だったし、腹を据えれば、なんでもないことだ。

拷問にしる私刑<sup>リシチ</sup>にしる、裸で責められる場合、苦痛の少いときは、裸そのものを強く意識するが、苦痛が激しくなれば、もはや羞恥を感じる余裕はなくなる。もし、激烈な痛苦の中にあっても、なお羞恥を感じ、また感じようと努めるようならば、それはマゾヒストである。

はたして、小諸にも、裸であるための具合の悪さなど吹きとんでしまふときがきた。

足首の縄を可能な限りひいて、後手の縄と連結し、弓のようにそった軀を一コの滑車で吊りあげられたのだ。

手の縄が胸にまわしてはあったが、ちょうど逆手に振じあげられるように、腕のつけねがギリギリと音をたてんばかりに痛み、小諸

は一瞬眼が眩んだ。

無意識に、「ゲッ！」というような声をだしたらしいと感じたが、すぐに気をはると、(クソ！)と歯をくいしばる。

だが、どんなに泳えようとしても、ジワジワと涙が滲み、軀中の毛穴から脂汗が噴き出した。

いかなる激痛にも、悲鳴一つあげずに堪えぬくには違いない小諸ではあったが、肩から腕の激しい痛みは、彼にとって、苦痛というより恐怖だった。

「肩が……肩が……！」

小諸は、思わず、うわごとのように呟いたが、慎之輔たちにそれが聞えたかどうかは判らない。

「やめてくれえッ！」

ついに小諸は叫びだした。

本意ではないが、大切な肩のためには、男の意地をすてるのもやむをえない。

「ほかのことなら、どんな拷問にも堪えてみせる。だが、肩だけは赦してくれ。肩は俺の命だ！」

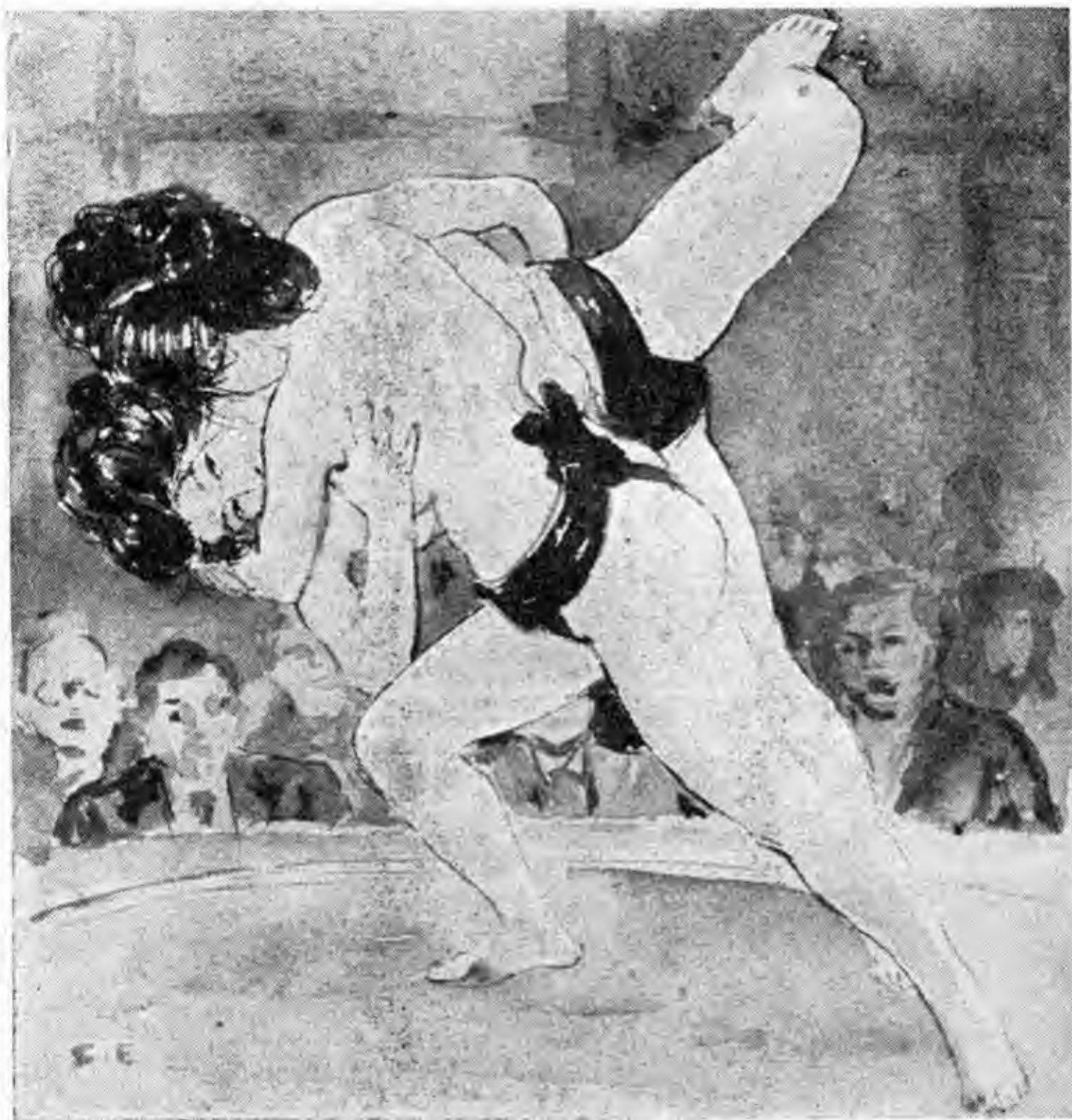
激しい痛みにも、小諸の声はとぎれとぎれだった。

「拷問に注文をつける奴があるか。そんなに

女斗美絵巻  
シリーズ NO3

『上手投』

提供  
雪崎京人



肩を大事にしてもはじめらんよ。今夜限り、おまえさんは投手じゃなくなるんだからナ」

「な、なんだと？」

「球は投げなくてもよくなるんだっていつてるんだよ」

「……………」

「もっとも、あの世とやらで、スカウトがおまえさんの行くのを待ちかまえてるかも知れないがネ」

「ど、どういう意味だ？」

「よく聞け。おまえの命は、あとしばらくでなくなるんだ」

「ば、馬鹿ナ！」

この男はなにを考えているのか。かりに、俺を、本当に殺すつもりだとして、そんなことをすれば、ギャンブルは成立たないではないか。小諸のいないシヤークスの優勝に賭ける者がいたとしたら、それは、よっぽど野球に暗い奴だ——。

苦痛のために、思考力の薄れた小諸の脳が考えたのは、そこまでだった。



## アクロバット残酷記の結末

水田真紀子

「ねえ、お姉さま、今度は、あたしにしばらくせて……」

いつもしばらくられてばかりいた私ですが、このS子さんの楚々とした姿をながめているうちに無性に目の前の柔らかな彼女の身体を自分の手でしばらくしてみたいという気が起つてきたのです。S子さんは、このとき「えッ？」といった表情で、私の顔を驚いたように見返えしましたが、やがて静かに「いいわ、ま子ちゃんになら、しばらくさせてあげるわ」

と云って下さったのです。

このようにしてS子さんのアパートで、今度

は、私がしばらくる役になって、お姉さまと二人きりの時間を過ごすことになったのです。ハイキングのさきで二人して、さんざんしばらくれて無残な目に合わされてきた同志が、今こ

でこうしてお互いにしばらくたり、しばらくたりし合っているなんて、ちょっと不思議ですよ。でも私は人をしばらくるなんて経験は、これが生れて初めてなんですわ。それも考えてもみなかったこと。初めてB子さんたちにしばらくられてから、今の今まで私はいつもしばらくれては恥ずかしい思いをさせられ、痛い目を見せられてばかりいたんですもの。それがふと今、S子さんの姿をみて、一度私もしばらく

方の身になってみたいと、急に考えついたのです。

「どうしたの？しばらくらないの？」

S子さんが私の顔をみつめているのです。

「あら、でも、いいかしら？」

こうなっても、私の心の一部には、まだそんなことをするのが何か悪いことでもするよな気がして、ちょっとためらってみたりしているのです。

「それじゃあ、ほんとにしばらくるわよ。よくって？」

今の今まで私がしばらくられていた縄をとりあげて、S子さんの背後に立ちました。

「早く、手を後にまわしてよ」

「まあ、あたしの手をうしろへねじってから  
しぼるのかと思った」

「だって……」

「世話がやけるのね。それなら、こうすれば  
いいの？」

S子さんはちょっとほえんで、ご自分で  
手首を背後で交叉させて下さいました。派手  
な着物のうしろにS子さんの白い手首がおと  
なしく交っているのをみて、私の心はズキン  
とこみ上げてくるものがありました。

「動かないで」

ひもが長い上に、初めてのことで要領も分  
らなくモタモタしましたが、どうやら、いつ  
も自分の手首がせなでしぼられるようにして  
S子さんの両手をしばってしまいました。縄  
はそれでもまだ一ぱい余っているのです。

「痛くない？お姉さま」

自由を奪われているS子さんの手首をみて  
ききました。S子さんはそれに返事をなさら  
ずに只ちよっと首をうなずくようしてうなだ  
れて、じっと正座されたままでいます。

好きなようにしているのよ。

そう言っているのかも分りません。その白  
い襟足をみているうちに、この身体をもっと

ギュッと縄でしめつけてみたい気がして、落  
ちているS子さんのしごきで、うしろから胸  
へまわして、それでも私なりに力一ぱい二の  
腕をしばりつけてみました。二巻きまわして  
ギュッと力をこめると、うなだれていたS子  
さんの顔が紅潮して、心なしか

「ウーッ」

小さなうめき声を出されたように感じ、

「苦しいの？」

のぞきこみました。S子さんは眼をつむ  
ったまま「ウウン」と云うように横に首をふ  
りましたので、そのまま力をゆるめずしめつ  
けて結んでしまったのです。S子さんの二の  
腕はいくらかうしろに廻ったままくびれて、  
しごきの下であえいでいました。

その姿を私は前にまわって眺めました。そ  
の時の感じは凡この都会の真ん中のアパート  
の部屋の中で想像が出来ないようなアンバラ  
ンスに思えました。だって、こんな部屋の中  
で、まるで映画の、それも時代劇に出てくる  
シーンのように女の人々が可哀そうにしばられ  
て坐っているんですもの。後手にしばられて  
S子さんはうなだれたまま、じっとしていま  
す。その姿が又、一段と可憐な雰囲気、こ  
の部屋の中にただよわせているのです。

両肩がしごきでしめつけられているので丸  
く持ち上って肩口から二の腕がうしろにかく  
れて、胸にまわっているしごきの色が、しば  
られているという感じを一層、引き立ててい  
るのでした。

S子さん、どんなに思ってたっしやるのか  
しらと、ふとその顔をのぞきこもうとすると  
それを察してS子さんは「いや」と云う風に  
顔を横に向けました。

「あら、どうして？」

私がおの方を追うと「いやよ」と云うよう  
に又、反対の方を向くのです。

「ねえ、お姉さま……」

こちらを向かせようとするのと、そうはさ  
せまいとするようなS子さんの動きが、ちょ  
っとしたいさかいになって、私が肩に手をか  
けた拍子に重心を失ってか、S子さんの身体  
はくずれるように横に倒れてしまいました。  
そうなってみると、くの字に身体を曲げてこ  
ろがっているS子さんのしばられた姿態が余  
計いとほしくなつて

「そうだわ」

私をしばって寝かせるためにのべて下さっ  
たおふとんの上に、今度はお姉さまをねかせ  
てあげればいいじゃない？と考えついて、あ



わてて抱き上げてそこへ運ぼうとしたのです。でも、私の力では一人でS子さんの身体を抱き上げることが出来なかったのです。ちよっともち上げただけで、その重さによるめき、手がすべって転がしてしまっただけです。

「あら、ごめんなさい」

驚いて再び抱き上げようとしたが、どうしてもそれが出来ないのです。お姉さまが私の肩に手を廻して重心をうまく按配して下されば出来たのかも知れませんが、そのお姉さまは棒のようにしばられているんですもの、それも無理ですわ。

やっこの思いで、おふとんの上につれて来ることができましたが、そんなことをしているうちに、お姉さまの着物の裾がみだれて片方のひざっ子の少し上の方まであらわになってしまいました。下半身が全くしばってないのですから無理ありません。それにS子さんは、その乱れをなおすことも出来ないのです。

「あら、かんにんしてね」

人間って両手の自由

を奪われると全く意気地がなくなるものです。まして女の身でこんなにされていたら、もうそれで終りだわ、

とふと思ったりしましたが、裾を揃えてあげようとして気がつく、その白いひざっ子の上部に赤くしみこんで縄のあとがみえました。いえ、縄のあとと考えたのはあとからで、瞬間、何かあざでもあるのかしらと思ったのです。すぐにそれが今日、狭山湖畔でB子さんやM子さんにしばられた縄のあとだということが分りました。

「まあ、ひどいわ」

気がついてみると、足首のところにも、それと分る跡がみえました。



「まあ、お姉さま、こんなになってるわ」

思わずその部分をなぜ込んでゆくと、S子さんの白いふくらはぎに明瞭に赤くなった縄のあとがはっきり描き出されているのです。

白い、そしてやわらかい肌だから余計はつきりとおとが残っているのでしょう。

「まあ、痛くないの？こんなに痛んでんのよ」

ふともものところが、一番ひどいように思いました。

「いや、ま子ちゃん、そんなことするの」

S子さんは、そんなはしたないことをする私をたしなめるように、そして、そんなにされてるのが如何にも恥ずかしいといった表情で、そう言いました。

「いやだわ、こんなにされて。身体中についてるんじゃないかしら」

私は、つかれたようにS子さんの襟もとを拡げようとしてました。

「いや！いや、やめてエ」

S子さんは身体をもがいてそうはさせまいとしますが、私はどうしても、このS子さんの身体についた昼間の縄の跡がみたくてたまらないのでした。

こうなったら、お姉さまを裸にしてしまわなくっちゃ。

もがいているお姉さまの姿をみて余計その気になってきました。S子さんをしばったしごきをはずしました。でも両手首を結んであ

る縄はほどきませんでした。そうされると、きつとS子さんは、私のしようとするのを止めるに違いないと思ったからです。そして逆にそのしごきで足首を合わせて動かさないようにしました。そうして置いて私はS子さんの帯をほどき始めたのです。

「ひどいことすんのネ」

S子さんは力のない声でつぶやくようにおっしゃいましたが、もがいていたのをピタリとやめて、それっきり何も言いませんでした。私はそれをいいことにして、ころがせたり横を向かせたりして着物を着つけていた帯類を全部はずしてしまいました。そして改めて仰向けに寝かせると、上から順に着物をはいでゆきました。最後のレナウンの肌着も紐をほどいて上にたくしあげますと、S子さんの可愛い乳房がふくら顔を出してきましたが、果してその上下に幾本かの赤くあざになった縄のあとが生々しくついていたのでした。

「まあ、こんなにひどいことされて」

思わずS子さんに問いかけるように顔を向けました。S子さんは横を向いたまま耳のつけ根まで紅潮させて、じっと眼をつむっているのです。

その美しい顔をみていると、どうしてこんなにまでされて黙っているのかとS子さんの心が哀れに思えて、せつなくてせつなくてたまらなくなってくるのです。

こんな可愛いS子さんをどうしてみんなしてあはしていきめるのかしらと思うのです。

S子さんの肌はスベスベして女の私でさえ思わずつねってみたい衝動にかられる気がして、とたんに私はドキンとしました。

「S子さんのこの身体は誰にもさわられたくない、私だけのお姉さまであってほしいわ」  
そんな気がしてくるのです。

それと一しよに、この可愛いS子さんをこんなにしていじめるのだったら、それはあたしがすることだわ。何もB子さんやM子さんそれにバレーの先生だけの玩具じゃないんだわ。あたしがもっとかわいがってあげるのがほんとなのかも知れない。そんな気も起ってくるのです。

私は今こうして裸にされてしばらく経てころがっているS子さん姿態にじかにふれてみて初めてこう思いました。今まで思いもつかなかったしばられた女性の可憐さでもないまいしょうか美しさでもないまいしょうか、そんなポーズを気にかけたこともなかった私が初



めて味わう妖しい感覚でした。

私はまるでものにつかれたようにS子さんをうつぶせにして着物を後手にされた手首までたぐりよせました。肌着は無理をして首までぬくと、これも手首にたぐって改めて今解いたS子さんの帯止めやら腰ひもでS子さんの二の腕を胸からまわしてしばりつけてしまいました。そうしておいて手首の紐をとくと着ていたものを全部とりあげて再び手首をしばりかえます。

S子さんの白い肌がくっきりとおふとんの上にあらわにされました。あたりを見廻して「そうだ」と思うと三面鏡の前の小さな腰かけを持ってきて、S子さんを仰向けにさせて丁度、腰の下部があたるようにその腰かけを入れました。S子さんは一本の棒のようになって、ゆるやかな曲線を描いて長々とその上に伸びています。いやでも自分の全身を見せびらかせるような姿態にさせたのです。

S子さんはそうされても、もはや私をたしなめたり、いやがったりはしませんでした。ただされるままに恰もこれまでB子さんたちにされるときのように、素直にまるで意志のない一箇の物体のように私の意のままになるうとしているようでした。

こうして全身を見廻しますと、S子さんの肌には無数の赤い縄のあとが、はっきり分ります。白い肌だけに余計ありありと眼にしみるのです。それをみていると又、一層私自身の手で思いきりいじめ廻してみたい衝動にとりつかれてくるのを覚えました。今しばった胸の紐が、こうして身体を伸ばされているせいか余計、二の腕に食いこんで如何にも柔らかい女性の肌をしめつけていることを知り、急に又、恐しくなったりして

「ね、お姉さま」

私は尋ねました。

「こんな縄のあとがついてちゃ、バレエのレッスンも、行けなくなっちゃうのじゃないかしら」

それが心配だったのです。どうやらお姉さまにきいてみるとタイツをつけてゆくからかくせるのだということでした。それじゃタイツをつけさせればいいじゃないかと思ってそのありかをたずねましたが、S子さんは云ってくれないので無理に云わせます。整理ダンスの引き出しから、やっと探しあてると、私は網目になったタイツをとり出しました。

「これ使っているのネ」

念を押すというのではなく私自身にいい聞

かせると、足首のしごきをほどこしてはかせようとして、これじゃいけないと思い、決心して、S子さんのパンティを脱がそうとしたのです。

「いや！」

S子さんが眼をつむって、はげしく叫びました。

「いや、こんな格好させて置いて」

それはそうでしょう、でもこのままだとタイツをはかしても意味ないもの。S子さんをしばってあるのをいいことにして、赤くなりながら、それでもS子さんに素早くタイツをピッタリとはかせてあげました。こうして置いて、私はこのS子さんの身体をさっきみせてもらった本の中にあつた写真のように股間しばりにしてみようと考えたのです。私自身、さっきみたあのポーズを、それは見た瞬間から、それがどんな恥ずかしいしほり方か、若し私がこんなにされて、しばられたら？と考えてみるだけで、もう気も遠くなるほどでした。

しばられたという結果にも増して、そのしばられる過程を想像すると、それだけでもうたまらなくなるのです。しかし私は敢えてそれをこのS子さんにさせようというのです。



私がそんなしほり方をすれば恥ずかしいのに  
どうしてそんな目にS子さんを逢わせるのか  
ときかれたとしても答につまったかも知りま  
せん。

実際にこんなしほり方ってあるのかしら。

それを試みる?といったことと、半分はS子  
さんを誰に遠慮のないことで、思いきりいじ  
めるといったら語弊があるかも知れませんが  
とにかく、しほることによってS子さんを愛  
してみたいという気がしたのでした。それに  
さっきの写真のようにS子さんは全裸ではあ  
りません。あみ目で肌はすけて見えますが、  
タイツをはかせてあります。それが私を大胆  
にさせたのかも知れません。

私はショルダー・バッグの中から殊更に硬  
そうな丈夫な綿の捻りロープをとり出しまし  
た。今日の昼間、狭山湖の林の中でS子さん  
の体を枝に吊るし上げたロープです。それで  
先ずS子さんの胸に廻した縄に乳房の中間の  
ところへ二重にとおしました。くびれるほど  
にしほってあったので、その間に縄をとおす  
のはちよっと痛々しかったのですが、やわら  
かい肌目に無理にそのロープをとおすときは  
S子さんの体温が生々しく感じられて思わず  
胸が高鳴りました。そうして置いてS子さん



の揃って真っ直ぐ伸びている両脚を思いきり押しひろげました。

「いやあ」

S子さんは、だだをこねるように身体をくねらせて

「何するの？こんな格好にさせるのいや」

それはそうでしょう。でも

「アクロバットみせてもらうの」

私は心はずませていました。そうして置かないと、思うように股間しほりをさせられないのですもの。その上で二重のロープをひっぱって真っすぐに身体にかけると、S子さんの身体がミシンの椅子の上に反っているの、でロープの端がうまくたれました。両脚をとじさせてから下からその端を持つと、S子さんの身体を俯伏せにころがしました。S子さんの身体は椅子から落ちて、はずむようにねじられた手首を上にしてころがりますと、そのロープの端をグッと後手にしぼった手首の方へしめあげていったのです。

「あッ、いや！ま子ちゃんたら」

S子お姉さまは、自分の身がどんなにされるのか初めて分ったのでしよう。

「いや、そんな、そんな——」

身をもがきました。それでも私は力をゆる

めずに背後から二の腕をしぼった縄にロープをかけて、S子さんの顔色を上からながめながらジリジリとしめあげていったのです。

「いや、よして」

「ひどいわ、そんな」

S子さんは横目で私を見上げてうらめしうにいう

「あッ、痛いワッ」

「うッ」

続けさまに悲鳴をあげてゆきます。それでもまだかなりしめあげて、そのまましばらくつけてしまいました。

S子さんは身体をくねらせて

「ひどいことすんのね」

くねらせると、よいけい身体に食い込むのですもの。とうとう足をちぢめるようにして、ぐったりなっていました。そして「ウーッ」と喉からこみ上げてくるような声を、それ以上、出すまいとして辛抱しているのが如何にも苦しそうでした。

「お姉さま、痛い、苦しい？でもあたし、こんなしほり方をしてみたかったの。だってさっき、お姉さまに、こんなポーズのご本をみせられたんですもの」

私は自分でしぼった縄目の中で、S子さん

がうめいているのが、たまらなく好きになってきました。

胸にまわした縄目が前と後で下へひっぱられて余計、二の腕のやわらかいくぼみが深くなつて、たてに通した縄目はS子さんの胴体を幾分、短くみせるほどくびれ込んでいました。

そのS子さんを再び仰向けにして元のミシンの小さな椅子の上に持ち上げました。そして両脚をグッと伸ばしますと、

「ああッ」

S子さんは苦しそうな悲鳴をあげました。そうだ、このままの姿勢でアクロバットをさせてやろう。

そう思いついてS子さんを抱き起すと、胸にまわされた縄を身体をくねらせて出来るだけ下にずらせようとするのをかまわず歩かせてミシンの横へつれて来ました。ひざをしゃがめてミシンの上へ仰向けにねかせて上半身だけが台の上になるような位置にミシンごと固定させてしまいました。腰から下が台からはずしてあるので、その下半身をうしろに曲げようと考えているのです。こうやってしほりつけただけで、S子さんの身体はかぎの手

に仰向けに曲って両足さきが床から二、三セ

ンチ浮いています。

「まこちゃんたら、縄が食いこんでたまらないわ。もう、かんにんして」

そういうS子さんの両足首に、別々の縄を結びつけて、それを反対側のミシンの足の方へひっぱりました。

「ああー」

S子さんの身体が少し腰の方へずり下がるようになって、足首がひっぱられるに従って両ひざが曲り、ついで腰がうしろに反って逆えびのようにアクロバットされてきます。

「痛いわ、たまんないのよ」

そんなというS子さんでしたが、思いきり両足首を左右にひっぱりあげると、S子さんの身体はミシンの上で宙になったまま奇妙なアクロバットのポーズでもだえました。

これで胸から上がうしろへ反ると完全なアクロバットのポーズが出来上るのですが、それは出来ません。そのまま動けないようにくくってしまうと、S子さんの苦しそうに吐く息が私の胸を高鳴らしてゆくのです。脚がひろがって、たてにしばったロープの太さはつきり身体に食いこんだ状態は、たまらなく可哀そうでもあり、又、痛々しいものでありました。

「まこちゃんたら、ずいぶんひどいことするのね。B子さんより、ひどいわ、あなた」

苦しそうにS子さんが言いました。

「でも、お姉さま。こんなにされると、うれしいんじゃない？」

私が尋ねると何故かパァッと赤くなりました。そんなS子お姉さまの身体は、ところかまわず思いきりつねってみたくなるように可愛いものがあります。そしてそんなS子さんをながめているうちに、私がこうして股間しぱりに、このS子さんの手でされてみたい気になって

「お姉さま、今度はあたしを、こうしてしぱってちょうだい。だって、あたしって悪いもの。お姉さまを、こんな目にあわせたんですもの。だから、もっとひどく、うんと責めてみて。あたし、がまんしてみろ」

涙がにじみ出るような感傷的な気持ちになっていたのです。

「ようし、うんといじめてやるわ」

縄をとかれてS子さんは、痛そうに肌をなせながら言いました。

「さあ、みんな脱ぐのよ。あんたにはタイツ貸さないわよ」

S子さんは、いたずらそうに笑いながら、

そんな意地悪を言いました。

### △あとかき▽

まだまだ、この後、いろんな変わった経験、S子さんとの友情、又B子さんに更にひどい目にあわされたこと、映画のかえりにB子さんが知らない人を公園につれてって、しばってみせたこと等、いろんなことがたくさんありましたが、私も事情でこの辺で終らなくてはなりません。

その後、父の勤務の関係で郷里へ引きあげ現在T市で電話の交換の仕事をしておりますので、深夜の勤務の時、思い出しながらつたない文章で今まで書つづつて参りましたが、現在身辺にB子さんのような方はいらっやしません。どなたかB子さんのような能動的な方に、思いきりしぱられてみたいと思っております。男性の方はいやです。こわいんですもの。でも、もうあきらめています。何故って私、今、縁談が持ち上っていますの。この秋には結婚致します。では奇クの皆様、これでお別れしましょうね。

さようなら。

香川県大川郡三本松町

水田真紀子



## 癖 性 な 妙 奇

△ 告 白 △

耳

垢

竹  
川  
弓  
子

私は自分のこの奇妙な性癖が、自分だけのものであるのか、或は他にも自分と同じような性癖を持っている人があるのかが知りたくて、いろいろの本や雑誌を漁ったものでしたが、今までのところ知ることができませんでした。そして、自分のこの変った告白を投稿してみようと思ったことも何度もありましたが、余りにも変っているもので、いくら何んでも編集部の方も相手にして下さらないだろうと思ったことと、それから、もう一つ、思春期になってからは、この私の性癖が自分のセックスに関連を持つようになってからは、文章にするということも、更に一層躊躇させられるのでした。

私は少いときから、人間の身体の中で一番“耳”に関心を持っておりました。しかし、はっきりと自分で意識して、そう感じ出したのは、やはり十五、六才の思春期の頃からだと思えます。勿論、それより以前にも、妹や兄達の耳垢をすすんで、よくほじってやったものです。異性愛に目覚めるようになってからは、やっぱり若い男性の耳に特別に興味を持つようになったのです。

現在では、道を歩いていても、電車の中で釣革にぶらさがっていても、若い健康そうな

男の方を見ると、つい、その方の耳の方へ視線がいつてしまうのです。見ないでおこう、見ないでおこう、と心にきめながら、つい見ないではいられなくなってしまうのです。そして、胸を熱くして頬をほてらせてしまうのです。誰か自分のこのような心を見すかしているのではないか、若い男の方の耳を見るなんて恥しい、という心と、耳を見たいという心が葛藤をおこすのは、こういう時です。

どうして、私にこのような性癖があるのでしょうか。或は他にも私と同じような方があっても、黙っているから、わからないのでしょうか。私は高校卒業以来、ずっと只今の会社で事務員として勤めております。一年してから短大の第二部（夜間部）へ入学し、今年の三月卒業、お勤めの方は、そのまま同じ会社におります。それで、会社の同僚や学校のお友達の同性に、それとなく当ってみるのですが、私のような性癖の持主は一人としていないのです。

それでは、私が何故そんなに“耳”にだけ強い興味を持つのか、といえますと、それはいくら自分で考えてみてもわからないのですが、只云えますことは、小学校の高学年や中学校位るとき、兄の耳の穴をほじってやると



あんなに私を虐める乱暴者の兄が、そのときだけ身動きもせずじっとして、あつちを

向け此方に向けといえ、おとなしくなっているのが不思議で面白く、又、その時の兄の

耳が赤くて、熱く充血して、とてもきれいだなあと、思ったことがありました。

高校生ぐらいになると、だんだん男の人の耳をさわってみたい、耳をほじりたいという欲望は次第にひどくなり、今ではもう、夜中などどうし

ても辛抱できなくなるくらいなんです。これは、一体どうしたっていうことでしょう。未婚の女性が、このようなはしたない欲望を持っているなんて、考えただけでも自分ながら情なく思うのですが、現実のこの強い禁断症状のような欲望は、日夜、私を責めさ

いなむのです。しかし、若い男の人の耳をさわらせてもらう、耳をほじらせてもらう、といっても、まさか、学校や公園の片隅でというわけにもゆきません。

やはり、その人に私の家まで来てもらうか、私とその人の家をお訪ねするかしなければ、落ちついてゆっくりとその楽しさを味わうわけにはまいりません。ということになるには大分、親しくなっていなければなりません。だから、ああこの人の耳をほじりたいなあ、と思っても、そう一朝一夕には簡単に出来ないので。だから、私のこの変わった欲望は中々満たされない、いらいらする時ばかりなのです。

で、私が大抵どのような型の人の耳に関心を持つか、ほじりたくなるか、と申しますと、先ず第一に、若くて元気そうな健康で体格の立派な人、これは絶対的な条件です。まあ、この条件さえあればいいのですが、欲を言いますと、ゼイタクのようですが、耳垢をとりたくてたまらなくなる型の耳と、それ程でもない耳の型とがあります。

その耳の型というのは、私の好みで、なるべく耳の大きな厚い福耳といわれるもので、それが、赤く熱くなっている感じは、なんともいえない快いもので、思っただけでも、胸のところが、きゅっとう締まってくるような気持ちです。反対に耳のやせて、ひからびたものや、貧相なのは、あんまり意欲をそそ



れません。

次に耳の穴です。これは狭い方が耳垢をとり出す時の困難さを伴うかわりに、出してしまった時の喜びは大きいのです。でも、大体若い男の人達の耳の穴の大きさなんて、そんなに大差はあるように思われません。子供は別ですけれど。

耳垢は多くたまっている程いいのですが、それも、なるべく私に初めてとって貰ったというのでなければ厭な感じがします。つまり男の方が（女もそうですが）結婚の相手に経験者はあんまり嬉しがらないのと同じような心理なのでしょうか。自分ではよくわかりませんが、私が若い男の耳により強く関心を持つということも、その辺に理由があるのかもしれません。でも、私にも今後好きな男性でも出来たとしたら、この気持は変わってくるかもしれません。

一回私に耳垢をとって貰った友達の中で、またとってほしいと自分から言い出す人がいますが、正直に言って二回目からは最初の時のような昂奮は感じられません。

取り出した耳垢は私にとっては大切なものですから、大事にしまっておきます。私の机の抽出には鍵がかかっており、その中には小

さなガラス罐（ビタミン剤のような薬ビン）が数個あります。その罐のフタに紙をはって書いてある名前は、いうまでもなく、その耳垢の持主の名前なのです。日付もついております。記念すべき大切な日ですから。

私の小さい頃、近所の床屋がよく散髪の後でお客様の耳をほじっているのを見て羨ましいなあと考えたのですが、今の私の理想とする願望は、静かな奥まったビルの一室を借りて（静かでないとい気分が乱れて困るので）小さな看板を出します。赤い字のモダンな書体で「御耳そうじ」と書きます。ドアを開けて室内へ入りますと、すぐ眠くなるようなピンクの壁にして……と次から次へと楽しい空想はつきません。

ああ、それから、もう一つ、その看板の横に「若い男の方特に歓迎」と、こんなことを書いたら、気味悪がって誰も来ないかもしれませんね。

最後に私が今まで実際に異性の耳垢をとってあげたときの経験を申し上げようと思います。これは私の学校友達で機械工場へ勤めている仲のいい人の下宿へ遊びにいったときのことです。私は故意に声を小さくして彼に話しかけました。彼は聞きとりにくいので、え

？ えっ？と何度もききかえして、果ては自分の耳の穴へ小指を突込んで、聞えにくいのは自分の耳のせいのように思って、ほじくっているのです。私は、つとめて自分の心を平静に装って彼に耳の掃除をしてやろうと提案しました。そして、さかんに恐縮する彼を、無理に畳の上へ寝ころがしてしまったのです。

ありあわせのヘヤーピンをとって、彼の耳の穴をのぞき込みました。しかし、暗くてよく見えないのです。私にとっては、耳朶をさわることもさることながら、耳垢をとりだすことにも、強い欲望を持っているのですから彼を窓ぎわへ連れてきて、私の膝を枕に頭をのせて「耳垢とり」の理想的な恰好をとらせたいのです。

耳の穴の中はほの暗くて、その中に白味を帯びた耳垢がこびりついているのが、何んだか秘密の洞窟の中の宝物のように、とても神秘的に見えます。永い間誰の手にふれることもなく何年ここにかくされていたことでしょう。そこへ私の手にしたピンが入ってゆくのです。まるで、珍しい処女地を探検するときのような喜びです。私は自分でも、胸がドキドキするのが恐しく思うくらいでした。私は

ブラウスの袖をまくりあげて真剣になりました。

「ああ、ええ気持や」

彼はさも快さそうに目をとじます。満足しきってすべてを私に任せきった彼の顔は、本当に今まで見た事がない、実に印象的な美しさでした。光線状態がわるく、見にくいので彼の耳朵をうんと引っぱるので、だんだん赤くなってきました。ルビーのように充血して輝いているのはとても美しいものです。私はその美しい耳朵に歯を当てて、思いきり噛みついてやりたいという自分の心を抑制するのに困るほどでした。

累々と重った耳垢が次々と出てきます。一度とりだしたら、どうしても一つ残らずとってしまわないと気がすまないのです。途中で止めてくれといっても、もうその時は私の気持は許せなくなっているのです、痛いといったら、いろいろなだめすかしたり、或は相手の全神経を耳に集中しないように、映画の話や音楽の話をして気分のそらすよう努めます。そして、私の全神経はすべてピンを持つ拇指と人差指とに集中させているのです。

耳の穴の中は暗くて神経が疲れます。指先は早くも汗と脂でピンがぬるぬるになって滑

り落ちそうなので力を入れねばなりません。やっとの思いで、すくいあげるように上へあげるよきの何ともいえない気持のよさ。この気持のよさは他の人には分ってもらえないでしょう。釣の醍醐味と一脉相通するものがあるかもしれません。そんなとき、もぞもぞと動かれると、どうにも仕方のない程いらいらしてきます。時には、大きな声で叱りつけたり、押えつけるように力をこめたりしますが身動き出来ないように、縄でも縛ってやりたいと思うくらいです。一人前の大の男を身動きできないように自由を束縛しておいて、思うままに耳掃除が出来たら、どんなに楽しいことだろうかと思ひます。

これは、私のサド的な一面をあらわしているのでしょうか。こんなとき、私は全身が、かっかっかと熱くなり、吐く息もあらくなります。「君の息が顔にかかって熱い」と云われてびっくりしたこともあります。きっと思わず知らず耳掃除に熱中して、のぞき込むようにしていたことでしょう。

とり出した耳垢は、飴を包んだセロファン紙や煙草の銀紙にのせて、彼に見せてやります。そして大切に持って帰ります。

私の耳に対する奇妙な趣味も、いろいろな

事情で、いつも満されなっています。だから若しそういった機会に恵まれたときは、相手の意志を無視してしまつて、何がなんでもと切迫つまった気持になつてしまふことがよくあります。その一方、初めは気持よくとも、終い頃には痛がつているのを、押さえつけるようにしたり、すかしたり、おどしたりして取り出す面白さも大分手伝っているというところは確かです。

つまり私は背も低いし、やせて小柄な弱い女なので、大きな男の人を思いのままに出来る、その気分を楽しみたいということもいえましよう。私の経験では、そんなとき、よっぽど痛いかなら、何があんでも止めてくれとすきを見て逃げだしそうですが、私が「さあ、もうあれへんよ」と

と言つて解放してやるまで、言いなりになっている人ばかりなのが妙です。

耳垢の他に私には、これに似たものでも一つ強い関心を持つものがあります。これは異性の性器に関係するものなので、私としても大変恥しく思いますが、いずれ筆を改めて書きたいと考えております。

(おわり)



## 連載小説

## 宇宙のどこかで

——或る無期懲役囚の告白から——

佐 治 麻 造

## 炭 鉱 に て (一)

奴隷達が苦役させられる箇所は、炭質が悪くて通常は閉鎖してある坑です。中小炭鉱会社でも、良質の坑道はかなり機械化されて居りますが、好景気に乗じて開かれた私達奴隷の坑道は全く原始的なもので、ツルハシとシャベルと手押しトロツコの式です。唯、炭層が厚く、地盤も良いのが取柄だけです。約六十名程の男奴隷は三つの組に分けられて三交替で二本の坑道で苦役させられます。又、三十名程の女奴隷も同じ様に三つに分けられて、選炭作業に汗を絞るのです。奴隷達は坑道の近くの倉庫を改造した一棟に繋がれて寝起きします。

「ここはな、地獄の一丁目どころか三丁目辺りだぞ。怠けるとどんな目に会うかわかつとるだろう」

デブプリ肥えた、見るからに乱暴そうな監督にニヤリと冷く睨みつけられて、震え上がりました。

「けどな、一生懸命働けば、そんなに痛めつけはしねえよ。何しろ、いくら掘っても足らねえって御時世だからな。分ったか！」

「ハイ、よく分りました」

「よし。お前はと、二十五号で、赤組だ。今夜十二時に追い込んでやるから、それ迄ゆっくり寝な。おい、姐ちゃん達、着物を着せてやってくれ」

奴隷監督事務所はガランとして男は皆、出払って居りました。如

何にも田舎育ちと言った感じの二人の娘が出て来て、手錠足錠を嵌め替えます。

「中々いい体つきしてるよ。使いでがありそうだね」

首に鋼鉄製の首環が嵌められ、腰には頑丈な革枷が締めつけられ、背、胸、両尻に二十五号の番号が刷られ、首環の前後には赤組を示す赤い鉄札をつけられました。手錠と鼻環とが結ばれ檻へ追立てられます。建物の中へ一步入りますと、汗と糞便の臭いがブンとしました。元来、倉庫の建物ですから窓も小さく、薄暗い廊下の右側に鉄格子が続いて居ます。鉄格子の内側は二米に四十米程の三方コンクリートの室で、一米おき位に五十センチ程の鎖が鉄格子の下端に取付けてありました。十名程の女奴隷と二十名程の男奴隷が一群宛、間を少し空けて、それぞれ鼻を鉄格子の鎖に繋がれて泥の様に眠って居ます。娘達が蹴飛ばしても踏みつけても少し体を動かす位で、その有様から見ても苦役の苛酷さが察しられました。私は男奴隷達の群の一番端に繋がれました。右手には三米程あけて女奴隷の群がマグロの様に寝て居ます。勿論、奴隷達は皆、鼻環、手錠、足錠のままです。固い木の板で張った床の上に仰向けになりますと、疲労と渴きと飢のため気が遠くなってしまうました。

黄、緑、赤の三組は労役時間も違いますし、従って食事時間も違います。

緑組は朝八時から午後四時迄で、食事は朝七時、正午、そして午後五時に与えられます。

黄組の労役は午後四時から夜の十二時迄、食事は午後三時、午後八時、そして午前一時です。

私の赤組は夜の十二時から朝の八時迄働き、食事は午後十一時、

午前四時、そして午前九時です。

鼻鎖をしたたか外から引張られ、目が醒めました。当番の奴隷が食事を配って居ます。二日振りのこととて全く食ほり吸りました。

手錠を鼻環に結ばれては居るものの、食器を持てますから、最後の一滴迄吸り込める有難さ。そして

「二十五号には、もう一杯やってよ。昨日から飲まず喰わずなんだから……」

ドロドロの奴隷食を更に食器に満たして貰い、食事係りの娘さんの姿を暗い電灯で伏拝みました。

他の奴隷達を見習って用便をします。気がついて見ますと、今迄丁度頭の下にして居りました床の部分に二十センチ角位の木の蓋がそれぞれあって、その蓋の下は溝になって居り、時々水が流れて洗いくる仕組です。小さな孔に指を入れて蓋を取りますと、何とも云えない悪臭が強く臭いました。私の隣りは五十過ぎのガッチリした体格の男です。

「新入りかい？それとも組変えかい？」

「今日、連れて来られたんです」

「フン。とてもじゃないが辛い仕事だぜ。初めのうちは小便に血が混るよ」

「そ、そんなに……」

「そりゃそうさ。大体の話が炭坑夫ってものは、八時間も働けるもんじゃないよ。大抵、五、六時間やれば一人前の働きさね。それが、こちとらと来た日にゃ八時間みっちり絞られてさ。まごまごしてると組変えだてんで、すぐに次の組へ入れられて穴へ逆戻りさせられるんだからな。堪ったもんじゃないよ。」



「……………」

「組交えてもさ、一つおいて次の組ならまだいいが、穴から出て来て直ぐ回れ右は本当に情けないよ。けどね、鬼達の氣に入れば、たまには逆に変えて貰えることもあるぜ。そしたら丸一昼夜、休めるとて訳さ」

ちよつと勘定が合わない様ですが、監督者達の意のままに出来る奴隷のこととて、その様な事もあるのでしよう。

「そら、前の壁際に電話のボックスみたいなのがあるだろ。今は誰も入れられてないけど、あれは箱と言つてな、俺もここに来てもう半年になるけど、三回ばかりブチ込まれたよ。ま、その中に叩き込まれるぜ」

「……………仕事はどんな風な……………」



「なあと、仕事そのものは簡単なものさ。ただ石炭を掬ってトロツコを押してりゃいいのよ。ハッパや坑木なんかは会社の方々がやって下さるさ」

両手を揃えて鼻の所へ挙げたままの妙な恰好でボソボソ話して居ますと、引出される時間が来ました。溜息をつき乍ら身を起した私達は鼻の鎖から解かれ、潜り戸を出るや否や、二人宛腰を鎖で繋ぎ合わされ、脂切った二人の監督に鞭で追われて、暗い夜道をガチャガチャと坑へ急がされました。五十米程離れて二つの坑道の入口があり、その中間の辺りに手回しのコンベア・ベルトを設けた選炭場があって、二つの坑道から伸びたトロツコのレールが集つて居ます。コンベア・ベルトの端は崖迄伸びて、崖の下には石炭用貨車が待つて居ます。淡い投光器の光に照らされた坑道口前の広場では、

黄組の女奴隷が十二名程、二名宛連鎖され、コンベアを回したり、又コンベアの傍に立つて不純物を選ったりして居ました。やがて坑内から男奴隷達が満載のトロツコを押して出て来て、コンベアの端の上方の大きな容れ物へあけます。どの奴隷も汗と炭粉と泥で真黒で、容れ物の位置まで重いトロツコを押上げるのに最後の死力を振り絞つて居りました。漸く一日の苦役を終えた彼等は小屋の前で、それぞれ自分で足錠を施し、手錠を嵌め、そして監督に手錠と鼻環を結ばれ検査を受けた後、檻へ帰って行きます。代つて私達は、外された手錠足錠を小屋の中に置き、二組に分

れてトロッコを押して坑内に追われました。坑の入口からすぐに緩やかな下り傾斜になって居て、三輛連結のトロッコは私達十名と、一人の監督を乗せ、鉄輪の音を暗い坑壁に響かせて採炭場に着きました。石炭と泥の粉を一杯に含んだ濁った空気、淡いカンテラの光に黒く光る炭層壁からチョロチョロと湧き流れる地下水。ここでこれから八時間、そして毎日々々それを繰返すのかと考えますと、全く胸が塞がる思いでした。

「おい、お前はシャベルの方がいいな」



りません。

「えらいかい？けど頑張ってくれないと、皆が迷惑するんだからな」

八回目あたりで、外に出た時食事を与えられ、寸暇を惜んで坑内へ引返します。

「こらッ。早くせんか！時間がないぞ」

十五回目を積むべく坑に入る時、監督の鞭を一つずつ背に受け、喘ぎ喘ぎシャベルを揮い、ガクガクする膝を踏張り踏張り、トロッコ

私と繋ぎ合わされて居るのは檻の中で話合った男で、彼に教わってシャベルを握りました。彼、八号奴隷はツルハシを振り、私が掬ってトロッコに入れると云う訳です。トロッコが一杯になりますと、皆で押して坑外に出て選炭物の容れ物に運び上げます。監督は一回目の時、トロッコに乗って外へ出てしまいました。

「監督が居なくなっちゃったってな、ノルマがあるんだ」

八号が教えてくれました。三台のトロッコに満載して十五回、これが私達に課せられたノルマで、入口に頑張った監督はトロッコの積み工合を調べたり、遅れ気味ですと唖鳴りつけたりします。ノルマ不足の時の懲罰はどんなものか知りませんが、皆必死になって働く所から見ても骨身にこたえるものに相違ありません。



を押します。選炭場の急な昇り板を押し上げる時の苦しさ。一人でも力を抜きますと、ズルズルと下ってしまいます。漸く苦役を終え、小屋の前に来た時は立って居れない程の疲労を感じました。明るい朝の光を浴びて目をつぶって立って居ますと

「おい、早く嵌めろよ」

八号に注意され、ハッと気がつきましたが、既におそく、革鞭を胸のあたりに受けて呻きました。

「監督様。この二十五号は初めてなんです。勘弁してやって下さいまし」

八号が代って詫びて呉れました。

疲れ果てた体に手錠足錠を、それも自分で嵌めさせられるとは。今迄何回となく味わさせられた屈辱乍ら、今更の様に、みじめな思いに涙が溢れました。檻の建物の近くの小川で、手足のいましめのまま、水を浴び、檻の鎖に鼻を繋がれますと、前後不覚に眠ってしまい、九時の食事の時に起き上るのもやつの事でした。

私達に課される懲罰は主として減食です。其の他に電気鞭とか、箱とか、いろいろありますが、身体をいたため、ひいては労働力に影響する様な懲罰はあまり用いられませんでした。

十日目あたりでしたか、女奴隷の方の罪で、組全体が減食されました。時間内に全部を選炭できず、その上に良質の石炭を泥と一緒に捨てたことを発見されたのです。苦役を終えて檻に帰っても食事を与えられず、夜の十一時迄、飢渴に苛まれて過しました。それでも、男奴隷の方は横になることを許されましたが、女奴隷達は全部、後手錠にされ、鼻につけた鎖を鉄格子の上の方へ移動させられて、立たされたまま次の苦役が始まる迄放っておかれました。

「アア、せめて坐れたらねえ。あんた達はいいわね、横になれて」  
「何云ってやがんでえ。お陰で朝飯、じゃねえ夕飯か、抜きじゃねえか。しっかりしておくれよ」

「フンだ。この前ね、あんた達のために私達まで電気鞭、貰ったこと忘れてるの？」

「ウッ……ヒーツ……ア、ア……」

立ったまま鉄格子に身をもたせて居眠りをした女奴隷が、鼻環の痛さに身をよじって喚きます。

「静かにしてくれよ。眠れないじゃないか」

「ああ、辛いわ。一体誰サ。あんな大きな塊りを捨てたのは？」

「誰だっていいじゃないの。静かにしないと爪先き立ちにされてしまうわよ」

「ヒーツ……ウ、ウ……又ねむっちゃったわ。けど奴隷って辛い境涯ねえ。このままで夜中迄放つとかれるのかしら？」

女奴隷達の呻吟の声を聞き乍ら、空腹を堪え忍んで、次の苦役に備えて眠りについた私は、監督の嗚り声に目を覚ましました。

「コラーツ。野郎共、起きて正座しろ！」

戒具と鉄鎖をジャラつかせて正座した私達の耳に嬌声が聞えました。いつもは夜でも半分位しか点灯されない電灯が全部、灯されます。

「マア、何だか臭いわね。大丈夫？」

デブプリ肥えた紳士風の男を先頭に、四人の芸妓風の婦人が嬌声をあげ乍ら続きました。

「働かせたら、こうして繋いでおくのね。これ、今朝迄働いてた組でしよう？」

「そうです。さつき黄組と緑組が交替するのをごらんになったでしょう。こいつ等は今夜十二時から追い立てます。」

「ねえ、社長さんてば。こんなにあだでこき使って掘った石炭、高く売ってりや儲かって仕様ないでしょ」

「ハハハハ、いや、成程、只は只だけど、買う時高い錢、払っているよ。うんと絞らにや元が取れないさ。ハハハ……」

「けどねえ。檻の中でも、こんなに括られて。さつき疲れた奴隷達がね、自分で自分の手足に鉄の錠を掛けてるの見てちょっと可哀想だったわ。マア、あっちの女達はどうしたの？。立ったままじやないの。どうして寝ないのかしら？」

「ホホホホ、鼻環を吊られてるよ。座ることも出来ない様よ。哀れなもんだこと」

「ウン、あれは君、どうしたんだね？」

「バツ、社長。ちよつと懲しめてやってますんで。何しろ五千カロリーの石炭を、どんどん捨ててしまつてやがるんですよ」

美しく着飾った芸妓達にジロジロ眺められた女奴隷達は、或る女はうなだれ、或る者は口惜しそうに上目使いに睨んだり、又、低く嚔り泣いたりして居ました。

「けど鼻環手錠って愛嬌がある恰好じやないこと……」

くそツと思つて、眼前に立った一番若い芸妓を鉄格子越しに睨み上げますと、ペツと顔に唾を吐きつけられました。

「ホホホホ、口惜しいの？」

色気タップリの身ごなしでしやがんで、ツと白い手を伸ばし、鼻の鎖に紙を当てて握つてグイグイと引きまします。どうすることも叶わず、引かれる度にゴツンゴツンと額を鉄格子に打当てねばならない

みじめさ。

「お染ちゃん、勘弁しておやりよ。泣いてるじやないのさ」

「フフフ、からかうの面白いのよ」

「あんた、少し残虐趣味があるわね」

「さあ、早く出ましようよ。臭いが着物にしみ付きそうだわ」

「ウン、早く出ようじやないか。大体こんな所、見たって仕方ないのにな。お前達の物好きには呆れたもんだ」

「あら、だって社長さん、今日はやまの隅から隅迄見せてやるって約束よ」

「そうよ。それから海岸のドライブと新四浦の水だきもよ」

「よしよし。じや行こう。これから行きや丁度いい」

笑い乍ら出て行く社長達を見送つて、胸が煮え返る様に感じました。

「しこたま儲けて、せい沢し放題なんだろうなあ……。ちきしょうめッ」

隣の八号は横になり乍ら、いまいましそうに呟きました。

「おいおい二十五号。詰らんこと考えてたつて、辛さが身に沁るだけさ。早く寝なよ。」

一番近くに立たされて居た女奴隷が溜息を大きくついて口を挟みました。

「本当よ。あんなの見せられると諦めては居るものの、情けなくて腹が立って……」

「ところでな、二十五号よ、お前がここへ来た経緯を聞こうじやないか。眠れないらしいからな」

その後、睡眠の合間を見ては毎日、少しずつ、お互いの身の上話



を交わしたことでしたが、彼の身の上については、後程申述べたいと存じます。

芸妓達に見物せられ辱ずかしめられた日から更に十日程経った或日、不意打ちに見回りに来た監督に、シヤベルの手を休めて居たのを見付けられてしまいました。直ちに鞭の痛撃を受け、それで済んだのかと思って居た所、檻へ帰ってから、食事抜きで「箱」にプチ込されてしまったのです。檻の向い側にある厚い木製の、電話ボックスを小さくした様な箱の中へ膝を曲げて押込められ、内部に付いて居る銅製の棒や突起が加減され、膝を曲げて上体を真直ぐにした姿勢を少しでも動かすと、その棒や突起に触れてしまう様にされて、扉を閉められました。途端に真くらになり、同時に銅棒に触れて居る箇所から足裏にかけて痛烈な電痛が走り、思わず喚いて電極から離れ様と身体を動かしますと、別の電極に触れてしまいます。くらやみの中で必死に体を動かし漸くすべての電極から肌を離しましたが、其の姿勢はとても無理な姿勢なのです。うすうすは想像していましたが、八号からも少しは聞いては居りましたが、その苦しさ。無理な姿勢を脂汗を流して堪えて堪えた末、精魂つきて、電痛の方がましだとさえ思っただけの力を抜いて見て、電撃の激痛に飛び上り、再び死力を振って、苦しい自分の筋肉だけの努力で苦しい苦しい姿勢を取るのです。

あとで聞きますと三時間程とのことでしたが、私にとっては丸一昼夜も経ったかと思われた頃、やっと赦され、通路へ転がり出しました。全身の筋肉が硬直した様で、骨はバラバラになる様に痛み、ブツ倒れたまま、いくら鞭を浴びても身動きすら出来ません。丸太棒の様に蹴られ、蹴られて檻の鼻鎖に繋がれた氣息えんえんたる私の

体を、八号が脚を伸ばして擦って呉れました。脂汗を最後の一滴迄絞られ、ボロ切れの様に眠って居た私は容赦なく叩き起されて再び苦役に追い立てられます。腰を連鎖され苦役場へ曳かれ乍ら、余りの辛さに泣きました。

「どうだ？少しはこたえたらうな」

監督が傍らに寄って来て、鞭で頭を小突きました。

### 炭 鉱 に て (二)

一日とて休日もなく来る日も来る日も鞭と懲罰で脅かされ、栄養剤で体力を補強されて、死物狂いで苦役致しました。坑道を掘り進むにつれて距離が増し、ノルマが苦しくなります。体力を失って、いくら絞め上げても駄目な奴隷達が一人、二人と出て来、新しく買入れられた奴隷が補充されます。

或る朝、檻へ帰る途中、一人の奴隷が倒れました。四、五日前から喘いで居た三十号です。

「フン。此奴はもうつぶしだな。おい三十四号、同じ鎖のよしみでかついで帰ってやれ。手錠外してやるから……」

事務所の前で地べたに放り出された三十号は、再び檻に戻りませんでした。

「こら、皆よくきけ！三十号はもう役に立たねえから、つぶすことにする」

鬼の様な赫ら顔の監督が私達に呶鳴ります。

「つぶすと云うのはな、殺すことじゃねえから安心しな。フ、フ、フ、フ、監獄へ逆戻りさせることよ！理由はなんとでもつけられらあ。いいか？大抵は見込なしの終身懲役にならあね。それが嫌

なら性根入れて働け。大体たるんだからへばってしまふんだ。使  
って頂いて有難いと思つてりや、だらしのないさまにはならねえ筈  
だ。分ったか？」

全く無茶苦茶ですが、鼻環をつけられた囚われの身、訴える所も  
ありません。

「奴隷管理のお役人など、どうにでもなるんだぞ。ここは地獄の三  
丁目だってこと忘れるな！ お前達の一匹や二匹、虫けら同然なん  
だ。不服な者は出て来い！ 逃亡してふん捕えました、こんな奴隷  
はもう要りません、て申出りや、お上で処分して下さいませ。死んだ  
方がいいって奴はいねえか？ え、ア、ハ、ハ、ハ、……」

本当に死んだ方が余程ましだと頭では考えるのですが、ノイロン  
の効果は残酷です。死ぬのは何としても怖ろしくて堪りません。死  
ぬことも出来ず、へたばれば終身懲役です。苛酷な苦役に堪えて働  
き抜くしか道はありません。

「ねえ、監督様。一生懸命働きますから、お願い！ せめて檻の中  
だけでも、此の手錠や足錠、外して下さりまし。そしたら疲れもよ  
くとれて一層、精出せますし……」

監督は哀願する女奴隷をニヤリと一べつすると、鼻環の鎖を鉄格  
子の鉄棒に沿って、ずっと上の方へ持ち上げてしまいました。

「ヒーツ、ア、ア、ウツお赦し、おゆる……」

哀れな女奴隷はするすると爪先立ちになって身もだえしました。  
それから二十日程経った或る夜、これから課される苦役を思つて  
心も打ちひしがれた私達が坑道の入口迄来た時、ただならぬ気配で  
血相変えた監督達が走り回って居ました。

「おーい、どうしたんだ？」

「お、どうもこうもねえ、二匹逃げやがった！」

「えッいつ？」

「つい先刻らしい。出て来た頭数を読むと二匹足りねえんだ。ちき  
しょう！」

私は、びっくり致しました。脱走する勇気がある奴隷が居ると  
は。私なんかとてもとても。いましめを全て解かれて放置されて  
も、そんな勇気はありません。

「するてえと……トロッコを押して出て来た時だな。おめえ入口に  
居なかったのか？」

「済まねえ。ちよつと女共をからかつて居たんだ。腰は繋いである  
が、手足は縛つてねえから、大分遠くへ行きやがったろうな」

「しかし、他の奴等は気がつかなかったのかい？」

「さあ、気がつかねえ筈はねえな。ま、此奴等もあとで絞ってやる  
わい。どこへ行きやがったか」

「ま、あわてなくてもいいよ。馬鹿な奴等だよ。あんな恰好で逃げ  
れる筈もねえのにな。夜が明けてからゆっくり探しゃいいじゃねえ  
か。なあにブルブル震え乍ら出て来るよ。まあ、何かの加減で逆上  
したんだな。お、そうだ、お前達がお待ち兼ねだったな」

私達はそのまま坑に追込まれてしまいました。脱走した二名は  
夜が明けるとすぐに苦もなく捕まった様でした。

朝、檻への帰途見ますと、事務所の前で二人の逃亡奴隷が捕縄で  
鞠の様に縛られて地べたに転がされて居りました。顔は殴られて紫  
色に腫れ上り、十九と四十七の番号もはっきりとは見えない程のむ  
ごたらしい鞭痕です。口から泡を吹き、死んだ様にグッタリして居  
ます。檻の中で私達は暫く彼等の運命について話し合いましたが、



疲れ切った我が身の方が大切で、食事を食ったら直ぐに眠ってしまいました。

彼等はお上の手に引渡されることなく、所有者の手によって私刑されることになった様でした。いくら奴隷だと云っても殺すことは勿論、生命に重大な危険を与える様な懲戒を加えることも禁ぜられては居りますものの、何分場所が場所ですから致方ありません。残

ツチリと取付けられた革バンドで逃亡奴隷の頭、首、胸、そして腰が縛られます。両膝と両足首も革バンドで縛り合わされ揃えて前に伸ばした両足の先には、台上の溝の中を水平に滑らかに動く金具を固定されます。膝も曲げられない様にされます。背後の棒の上端から頭越しに垂れて居る鉄棒の先に水平に付けられた鋼板の縁に鼻環手錠の両手の指をかけさせられた奴隷の両足が前に引かれますと、

酷な方法が考えられ、準備の間、彼等は一滴の水も与えられないで大きな木の首枷を嵌められて事務所の前に繋がれて居ました。中二日おいて、近くの広場で私刑が行われました。見せしめのため、私達も全員、見物させられました。広場においてある私刑の器具二つは何とも奇妙なものでしたが、哀れな逃亡奴隷達が装着されて行きますと、合点が参りました。台上に立った太い棒に沿って上下に滑らかに動く金具にガ



スルスルと両足は前方へ滑って伸び、それにつれて、腰から上は垂直状態のまま下に滑り落ち、両手の所だけで支えられて止まりました。二人共そういう状態にされますと、職員が、先の鋭く上がった長円錐形の鋼棒を持って哀れな彼等に残酷な説明を致しました。

「これは何だか分るか？此の上がった先をお前等の肛門に当てて台に取付けて立てる。分ったな。指をはなせば、体は真直ぐ下に落ちる。足も前へ滑って止まらないぞ。そうするとどうなる？ ハハハハ……」

恐怖に両眼を見開いたまま口をパクパクさせて居る受刑者の尻の下に、鋭い先端を持った鋼棒が立てられました。捕えられてからの責苦と飢渴とに体力を消耗し切って居る受刑者達は、死物狂いの努力で両の指先で体重を支えて喘ぎます。どうせのことですから一思いに指を離せばいいのと思うのは他人事だからで、当人に取っては一縷の望みもあろうかと必死の思いなのにちがいません。

「どんな気持ちだ？ え？ 指をはなして見ろよ。ジンワリと身体の中へ鉄の棒が突き刺さって来るぞ。ハハハハ。それでだ、お前等も助かりたいだろう？ で、これから十分間、そうしてろ。そして……」

受刑者の眼に希望の色が浮びます。

「十分たって未だ辛抱してたらな、爪の間に針を突き刺してやる」受刑者の顔が恐怖にひきつれ、紫色にはれ上った頬が失望にけいれんしました。

「十本の指全部突き刺してだ、未だブラ下ってたら尻の下の棒を除けて助けてやる。分ったな？」

見るに堪えない刑でした。婦人を混えた炭坑会社の方々の残忍な

冷笑を浴びて、二人の受刑者は呻き乍ら、それでも二人共、十分間を持ちこたえました。

「馬鹿だねえ、あいつら。同じことじゃないの。一思いに指をはなせばいいのにさ」

私達がどんなに死に対する恐怖心を与えられて居るか想像もつかないのでしよう、おかみさん風の婦人が嘲けり泣きました。

逃亡時の監督が二人、残忍な薄笑いを浮べ、柄の付いた太い針を片手に哀れな受刑者達の前に立ちました。生命を十本の指にかけて死物狂いで堪えている十九号と四十七号は、恐怖の余り最早や口も利けず、パクパク動く口からは、泡とよだれと、そして意味の分らない弱々しい呻めき声とが洩れて居ります。身の毛のよだつ様な悲鳴が相ついで聞えました。指の爪と肉の間へ針を突っ込まれたのです。哀れな受刑者の全身はひくひくけいれんし、私は思わず眼をそむけました。

「こらっ。わき見しねえで、よく見とれ！」

奴鳴られて震え上った途端、またも別の指に針を立てられた悲鳴が聞え、私は歯がガチガチ震えました。続いて三度目の悲痛な声が次第に弱まって流れ、十九号の上半身がずるっと下に落ちます。途端にこの世のものとは思えない呻き声と共に彼の全身が硬直するのがハッキリ見え、ジリジリと上半身は柱に沿って下って来ました。とがった鋼棒の先が、身体の中の辺まで突き上げているだろうと考えますと、額に脂汗が浮びました。彼の両手は鼻環の所で弱々しく、しかし必死の思いをこめて宙をまさぐり続けますが、遂に上半身と脚とは直角に近くなり、口から舌がダラリと垂れて出ると共に、赤い血が唇から糸を引き、白い眼を剝いて動かなくなってしまうまし



た。指が離れてからせいぜい一分間程のことでしたが、その恐怖と苦痛は如何ばかりでしたでしょうか。四十七号は六本目の爪に針を刺し込まれるまで、堪えていましたが、七本目の指に突込まれる前に力つき、恨めしそうな視線を投げ乍ら最後の一本の指を鉄板の縁から離し、苦しかった奴隷生活に別れを告げました。彼の体内に鉄棒の先端が突入った途端に、彼は意味の聞き取れない絶叫を發しましたが、恐らくそれは苛酷な刑罰、残忍な私刑、そして面白そうに見物している社会人に対する精一杯の怨みごとだったに違いありません。鋼棒が肛門を押し上げ乍ら突き上げて行きますので、台上には殆んど血は流れませんでした。それにしても見物の人々の残酷さ、殊に若い婦人連中が眼をギラギラさせて眺め入っていたのには驚いてしまいました。

### 炭 鉱 に て (三)

「当分の間、足錠は外してやらねえぞ。恨むのなら、くたばった二匹の野郎を恨め」

苦役の時も私達の足錠は外して貰えず、苦しさは倍加致しました。黄組の連中は、その上、手錠も嵌められたまま働かされます。私刑の日から一週間程のことでしたが、全くネを挙げてしまいました。それから一カ月程経った或る日、私はとうとう『組替え回れ右』をさせられました。苦役を終えて檻へ曳き帰される途中、何かの用でやって来た監督のおかみさんを妙な眼付きで見たと云う理由でした。

「此の野郎！ 何ちゅう眼付きで俺の女房を睨みやがるんだ！ 緑組へ組替え、回れ右！」

「あんた、勘弁しておやりよ。無理もないじゃないのさ」

おかみさんが取りなしてくれませんが、連鎖を解かれた私は、有無を云わせず回れ右させられ、今の今、やっと出ることを許された坑内へ逆戻りです。足錠の重さが一きわ身に泌みました。それから午後四時までの苦役の辛さ！ 漸く終えて、我が両手に嵌めねばならない手錠を持ち上げるのも、やっとのことという程でした。限度を超えた疲労と、体中に残る革鞭の痛さとに却ってねられず、呻いては軋々反側しておりますと、無実の罪を被せられていることが久し振りに思い出され、横領罪だけなら、とっくの昔に自由の身になっているものと、胸も張り裂けんばかりに口惜しく、声をあげて泣いてしまいました。鼻環手錠の両手で涙を押えて忍び泣き乍ら泥の様に眠ってしまった私は、苦役の時間が来て隣の五十号が揺り起しても眼が覚めず、脚の上方の内側に革鞭の痛撃を喰ってしまったのでした。

組替え回れ右を喰ってから、急に体力が衰えて来た様で、一週間程した時『箱』へ三時間程プチ込まれ、更に弱ってしまいました。

綿の様になって檻に横たわり、鼻の鎖をまさぐり乍ら、何とかして体力を恢復しなければと考えます。

「早く不景氣にならないかなあ。そしたら、あんな非能率な坑は直ぐ閉鎖されて、俺達も他へ売り飛ばされるんだが……」

赤組に居た時に聞いた八号の言葉が、しきりと思ひ出され、不景氣になるまでの辛抱だ、何とか頑張らなくてはと考えました。全くの話が、今になって終身懲役に逆戻りでは、今まで骨身を削って苦役し、堪え難い屈辱を忍んだのが水の泡です。しかし、とうとう私も倒れてしまいました。恰かも機械か道具を扱う様に栄養剤を増配さ

れは致しましたが、休養も与えず懲戒も容赦なしですから結局、悪循環は止りません。矛盾した扱いに抗議など出来る訳もなく血を吐く思いで頑張りましたが、或る朝、いくら鞭を受けても立ち上ることが出来ず、舌打ちした監督は私だけ残して奴隷達を曳いて追い立てました。もうろうとした意識の中で、再び繋がれる監獄のことを悲しく考え乍ら、もうどうにでもなれと氣を失ってしまったのでした。

足の裏に激痛を感じて氣を取り戻しました。

医師らしい男が私の身体を点検します。左右の足裏に焼いた鉄を当てられたのです。苦痛に呻く私を足で転がし乍ら調べ終った医師は、

「ま、使い物にはならんな。暫らく休ませてやれば恢復するだろうが、このままではな。しかし何故、休ませて使ってやらんのかなあ？ その方が得だのに……」

「へへへへ、そりゃもう、仰言るまでもありませんよ、先生。けど社長の方針でしてね。とことんまで絞り上げて、使いでがなくなりゃ、ポイと捨てろっていうんでさ」

「捨てるなら捨てるでいいから、他へ売ればいいじゃないか」

「それが社長の氣ツブのいい所でさね。また、そんなことしたら第一みせしめがつきませんよ」

「なる程、そう云えばそうだな。じゃ、此奴も監獄へ逆戻りかい。可哀想に。これからの一生を鎖に繋がれて送る訳か。折角、奴隷になつたというのにねえ……」

二人の会話を聞き乍ら悲しくて涙がこぼれました。それから二、三時間後

「もう立てるだろう？ おいで！」

事務所の娘さんが、鼻環にカチリと革紐をつけて邪けんに私を引き起します。鼻の痛さに悲鳴をあげ、身を起し乍ら両手で鼻繩を掴みますと

「おや、何するのさ！」

と蹴倒されてしまいました。再び叱りつけられ必死の思いで漸く立ち上った途端、さっき焼きこてを当てられた足裏の痛さに身をよじって呻く私に、娘は嘲笑を浴びせ、鼻繩を軽く左右に引張り乍らからかいました。

「可哀い想に！ 今までの辛苦も水の泡だね。まあ、こんな所へ来たのが運が悪いと諦めるしかないよ。フフフ……」

私は鼻繩を引かれるままに顔を左右に振りながら

「あの、終身懲役にされるって、本当でしょうか？」

「それはね、所有者の権利放棄の理由によるわ。けど、理由なんてどうにでもなるし、うちでつぶされた奴隷は殆んど終身刑だよ」

「本当にもう……。ほんの少し休ませて頂けたら、必ず働ける様になるんですけど……。あと二十年程勤めさせて頂ければ、自由の身になれるのに……」

「ホホホホ、泣いたって仕様ないねえ。私の知ったことじゃないよ。さ、おいで！」

足を踏み出す度に足裏に火がつく様な激痛です。爪先立ちになつて呻吟しますが容赦なく鼻繩を曳かれ、娘は自転車に跨りました。

「……あつ、自、自転車……ですか？」

「そうよ。どうしたの？ 走りがいいじゃないの」

本当に無慈悲なものです。両足を鉄鎖で足錠され、そのうえ足裏



を焼かれた私は必死になって爪先で走りました。向うから歩いて来た娘さんが私の方を見て

「あら、あんたア、此奴、鼻繩を握ってるじゃないの」

自転車が止まり、私はあわてて鼻繩から手を離します。

「鼻の近くに手があるから駄目なのよ。鍵持って来たげるから後手に嵌めとかなくちや」

私は本当に悲しくなりました。

「だって、嵌め替える時、暴れ出さないかしら？」

「大丈夫よ。此奴だって生命は惜しいのよ」

「けど、これでもう終身懲役でしょ。やけくそになったらこわいわ」

「そんなに心配なら、ホラ、こうすればいいのよ」

捕縄で両肘をギョツと絞って括り合わされてから、鍵で手錠を鼻環から解かれ、そして片方の手錠だけ外されました。

「さ、お手々を後へ回すのよ」

ガチャガチャと嵌められる手錠の音、そして肘を括った捕縄を解いて後手を首にグツと吊られます。

「お、お慈悲です。足の鎖を……足の鎖をもう少し長くして下さいまし」

地べたに打ち伏して身をもんで哀願しましたが、嘲笑と共に引張られる鼻繩の痛さに、どうすることも出来ず、ズルズルと立ち上ります。ガチャガチャガチャガチャ、と忙しく両足を爪先で踏んで、鼻繩の張り工合を必死になって睨みながら、緩い下り坂を自転車でついて走りました。本社までは歩いて三、四十分の道程です。途中、木蔭で一休みさせてくれました。

「お前、ここより監獄の方が仕事は楽なんじゃないの？え？」

道傍にぶっ倒れて大きく喘いでいる私に、娘が話し掛けました。

「そうおっしゃられれば、そうですけど……。もう、これで、自由の身になれないと思いますと、ほんとに悲しくて……」

「そんなに自由になりたいの？ そりゃそうだろうねえ」

「どんな苦しい苦役でもさせて頂きます。奴隷にしておいて下さりまし……」

「うるさいねえ。労務課で、もう一度お慈悲を願ってごらんよ。おそらく駄目だろうけどね。さあ、もう一走りおしよ。途中でぶっ倒れても知らないから。知ってるだろうけど、鼻の障子ってなかなか丈夫なものよ。減多に千切れる様なことはないわね。フッフ、鼻環って本当に便利ねえ。さ、立って！」

本社へ送られた私は労務課の窓の外に繋がれて、奴隷管理所の役人が受け取りに来るのを待ちます。

おひるになった様ですが、勿論水の一滴すら与えられません。降り出した雨に裸の身を打たれ、口を上向けて雨の滴を受けて渴きをいやしながら、本当に天を仰いで恨みました。夕方近く、奴隷管理所の若い所員がやって来ました。「御苦勞様です。おそかったですね」「いやね。駅をおりたら雨が降り出しやがって……。その辺りで雨のあがるのを待ってたのですよ。……此奴ですね。けど、お宅もずい分勿体ないことするもんですね。まだ十分使えると思いますかねえ。今月に入ってもう三四目でしよう？」

「ハハハハ、全くほんとですよ。私なら売り飛ばして一杯やりませうね。ま、いいじゃないですか。これはない、い、いですがね、うちの社長は他の炭坑で使われたら却って損だというんですよ。こちとらと

は目のつけ所がちがいます。じゃ手続きをよろしく頼みます。間違ひなく監獄へほうり込んで下さいよ」

「それはどうか御心配なく。いや御馳走様でした。さて……と。こら、立て！」

鼻環だけ残して戒具が全部外され、捕縄で縛られます。若い所員は縄捌きも鮮やかに両手首、肘、胸、そして首縄を掛け、腰から腿のつけ根へと、キリキリと捕縄を締めつけました。

「なかなか鮮やかなもんですな」

「いやあ、商売ですからね。こら、しっかり立たんか！ふん、足裏を焼かれたんだな」

両足首もゆるく捕縄で繋ぎ合わされました。

「捕縄は軽くて持ち運びに便利ですよ。鉄の戒具は重くて……。ポケットが痛みます。ハハハ、じゃ失礼」

「御苦労でした。こら廿五号！神妙にしろよ。」

ハハハハ、哀れなもんさね、ざまあ見ろ」

「……あり……がとう……ございました」

平伏して御礼を言われます。本当に情けなくて、はらわたが千切れる様な無念さでした。足裏の痛さは益々激しく、呻きながら駅へ曳かれしました。社会の人々の嘲けりの視線には、もう殆んど不感症になって平気ですが、これからの生涯を再びあの恐ろしい監獄で、みじめな懲役囚として過ごすのかと思いますと、一歩々々



が鉛の様に重く感じられ、縄尻で容赦なく打たれながら涙が止めどなく流れました。



行き会う社会の人々の自由なさまが、今までになく羨やましくてならず、漸く着いた駅の片隅に崩れ折れて大声をあげて慟哭してしまつたのでした。切符を買った所員に腰を蹴られ、引き立てられながら

「お赦し下さりまし、ああ、監獄はもう……終身懲役なんて……嫌だ嫌だ。ほんとにもう、どんな仕事でも致します。終身刑だけは、お慈悲です。憐れんでやって下さいまし……」

きびしい捕縄の身をもたえ、よじって大声で哀願し、喚き叫ぶ私に足蹴が飛び、捕縄の鞭の雨が加えられ、人々はおかしそうに嘲けり笑いました。

しかし天は哀れな私をお見捨てにはなりませんでした。その時、一人の婦人が駆け込んで来て、何か所員に耳打ちしました。炭坑会社の職員らしいその婦人の話を聞いた奴隷管理所員は苦笑いを洩らし

「オイ、皆さんにお礼を申し上げるよ。何と運のいい奴だろう。監獄行きはお預けだってよ。逆戻りだね。来い！ 何だ、涙なんか流して泣きやがって……」

再び本社の労務課へ引き戻されました。結局の所、社長が今度、新たに囲われたお妾さんから奴隷の要求があり、それに力チ合うことが出来た私が、辛うじて終身懲役から一応、救われた訳でした。

「ほんとに運のいい奴だ。今日はおそいから明日つれて行ってやる。けど何だぞ、今度へマしたり、くたばったりしやがると承知しないぞ。いいな」

さっき外されたばかりの戒具を再び全身に嵌められた私は、新しい境涯を言い渡され、喜びに溢れて、ガランとした労務課の室の一

隅に繋がれてその夜を過ごしました。

明朝、閑静な市の外れにある妾宅へ送られ、若いお妾さんの下でこき使われる身になった訳ですが、その前にやまで聞いた奴隷八号のことをお伝え致したいと存じます。

### 男奴隷第八号の話

男奴隷八号は嘗て名誉ある陸軍将校であった。士官学校を優秀な成績で卒業した彼は、トントン拍子に昇進し三十そこそこで少佐になった。かねて長男を兵役から除外する制度の不合理を慨嘆していた彼は、折にふれ完全な徴兵制を強硬に主張して、上官をへきえきさせる外は申し分ない士官であつて、部下の訓練は厳正そのものであつた。

彼のつまずきは、大尉の時に結婚した妻に始まる。彼の妻は同じ師団に職を奉ずる軍医大尉であつた。彼女は結婚後も職を離れなかつたが、非常に物質欲の強い虚栄に満ちた女性であつた。そして彼女の満足を得るため、遂に彼は軍の金品を私するに至つたのである。少佐になつて暫らくして軍の資材関係のポストについた彼は、軍の病院で同じ様に物品を司どつていた妻と組んで、物品の横流し、架空購入、代金のピンハネ等を行つたのである。巧妙を極めたカラクリも天網を潜ることは出来ず、一年も経たないうちに軍司法当局の探知するところとなつた。

そして或る夏の朝、次の休暇に予定している旅行のこと等を語らつて出勤前の一刻を過していた彼等夫妻を、男女四名の憲兵が襲つて逮捕してしまつたのである。逮捕状を突きつけられた彼は血の氣を失いながらもいさぎよく両手を差出して手錠を受けたが、彼女の

方は暴れるので背後から羽搔締め両手を握られて嵌められた。

「こんな、いやだわ。逃げたりしないから……外して。勘忍して、お願い！」

憲兵達は冷笑を浴びせながら腰縄で手錠を押え、二人を繋ぎ合わせ、徹底的に身体搜検を行った。

「公文書偽造並びに不正使用及び官品横領の容疑でお前達を未決勾留する。なお本日でお前達の官位は停止するから、そのつもりで」連行された法務部で若い法務中尉から言い渡された彼等は、それぞれ地下の独房へ入れられた。

地下の廊下で別れる時、思わず話し合い掛けた夫妻は憲兵下士官から物凄いビンタを喰ってしまい、彼は無念さに歯がみし、彼女は泣いた。翌日から苛烈な取調べが始まった。監房から出るや、不動の姿勢を取られ、そして両手を揃えて差し出して手錠を受けねばならない。たかが上等兵か伍長の憲兵に、不動の姿勢が悪いとてビンタされ、両手の揃え方がまずいからとて罵られる口惜しさ。そして取り調べが進むにつれ一言の申し開きも出来ない程の証拠を示され、後悔と絶望に打ち砕かれて独房の床に顔を押し当てて男泣きするのであった。二十日程して

「五号！ 出房。判決だ」

番号で呼ばれる浅間しさに胸を熱くし乍ら、軍法会議の場へ曳かれた。一段低い床の上にはすでに妻が手錠姿で立たされていた。数歩はなれて並んで立たされた彼等に冷酷な判決が下りる。

「未決勾留五号。その方を公文書偽造、不正使用、及び公金官品横領の罪により懲役十五年に処する。本日を以って官等級及び人格を剝奪する。なお刑執行完了後より三力年間、兵役に服せしむる」

ガクリとうなだれた彼に憲兵が近寄って、荒々しく襟章を折り取った。彼の妻は十二年の刑を言い渡された。着衣を全部脱がされ、裸の身に鋼鉄と革の戒具を装着される屈辱感、そして鼻環をつけられた時の人間失格の悲しさ！ 頭髪を切られ、鼻にステンレスの環をブラ下げ、嵌口具で顔の下半分を締めつけられ、鋼鉄製の首環に革の腰枷、そして後手錠、足錠を嵌められて膝を屈めて立ちすくむ哀れな妻の姿を見て、憐れみといとおしさと、そして彼女の虚栄に對する恨みとが混り合った複雑な感情を味わいつつ、自分の身にも喰い入っている戒具のきびしさと重さにと彼は鉄鎖を鳴らして身もだえした。

「じっとしとれ！」

初めて受ける革鞭の痛さに身をよじる彼の尻にノイロン、ニヒロンの注射がうたれた。女囚には更に生理中絶剤が射たれる。

「嵌口具は勘弁してやる」

外された嵌口具を腰枷に吊り下げ、連鎖された彼等は憲兵上等兵と婦人憲兵下士官とに監視されて直ちに監獄へ出発した。一步外に出ると嵌口具を外してくれたのは、情けからではなくて、辱すかしめを増やそうとしたものであることが痛切に感じ取られる。うなだれることも許されず、少しでも下を向くと革鞭が炸裂した。男らしく刑を受けようと覚悟した彼は涙を堪えて屈辱と戦ったが、女囚の方は絶えず嗚咽し、足の鎖につまづいて転び、駅までの二十分程の間に革鞭を二ダース程も全身に受けた。

上り列車の二等車に乗せられた彼等は、ボックスのシートの間へ一人宛、通路を向いて正座させられる。細い鎖と錠を取り出した憲兵達は、彼等の鼻環にカチリと取付け、座席の脚に繋ぎ、腰の連鎖



を解いた。彼のボックスには男の憲兵が、女囚のボックスには婦人憲兵が坐って、両足を彼等の正座した膝の上にドカリと置いた。憲兵の吸いつけた煙草の香りが、煙草好きの彼の無念さをそそった。発車間際に三人の着飾った婦人があわてて乗って来て、彼の眼前、通路の向い側のボックスに席を占めた。

「ああ、よかった。急いだわねえ。ふーっ」

艶やかに粧った彼女達を上目に見た彼は、思わず低く悲鳴をあげた。彼女達は師団司令部のある町の芸妓達で、商人達と色町へよく出入りした彼は三人ともよく見知っていたのだ。

「あらっ！ ちょっと、ごらんよ。あそこに女が居るじゃないの」

「まあ、罪人ね。可哀想に……」

彼女達の視線を全身の肌を感じた彼は深く深く頭を垂れ、窓の方を向いて坐らせてくれたらと痛切に思った。身を堅くして、気が付かないことを願ったが、意地の悪い憲兵は、鼻鎖を座席の脚から解いて

「おい、ちょっと立て！」

絶対服従の身とはいえ、ためらう彼の鼻鎖が引き上げられ、呻き声と共にジャラジャラと立ち上った彼は、全身を彼女達の好奇の目に晒す外なかった。憲兵は捕縄で足首と腰枷を短く結んで腰を浮かせることすら出来ない様に処理した。再び正座した彼に、恐れていた言葉が浴びせられた。

「あらッ、この人、サーさんじゃなくって？」

「まッ、ほんとだわ。へーえ、驚いたわねえ。どうしたんだろ？」

ジロジロ眺められている視線が針の様に感じられ、彼の全身は真赤になり、咽喉の奥で低く呻いた。

「あっちの女囚は奥さんじゃないの？」

「そうらしいわね。スパイでもやったのかしら？」

今まで、黙ってタバコをふかしながら眺めていた年増の芸妓が口を挟んだ。

「あんた達、知らないの？ 新聞にも出てたし、四井産業の人達も云ってたじゃないのさ。お上のお金をゴマ化してたんだって。方々の会社も飛ばっちりで泡喰ってるらしいわよ」

「アッ、そうか。そう云えば思い出したわ。あれが此奴達なのね。へーえ」

憲兵が口を挟んだ。

「今朝、軍法会議がありましてね。これから夫婦お揃いで監獄行きの所です」

あたりの乗客も声を合わせて笑った。

「それで、どの位いブチ込まれるの？」

「此奴は十五年、あの女は十二年でさ。偉い人の紐があったらしいんでね。案外、軽かったですよ。それに、晒しも助かりやがって……」

彼は憲兵の言から、自分達が晒しの辱ずかしめを免れているらしいのに漸く思い当った。誰が慈悲をかけてくれたのかと、ずい分つけ届けをした幹部の連中をいろいろ思い浮べた。

「ね、あの高慢ちきな女も、ああなっちゃ哀れなものね」

「そうよ。あの女、ほんとに威張りやがってたわね。そら、いつか此奴等二人で歩いてるのに会ったもんだから挨拶したのよ。そして、あの女のやつ、さも見下した様な素ぶりでさ、鼻にしわ寄せてパイと横向くのよ。まあ、こちとら芸妓だし、いつものお客さんの

奥さんだからと思って頭下げといたもんだけど……。どう、あのさまは。胸がスツとするわ」

婦人憲兵が、いきまゝ芸妓に声を掛けた。

「ねえ。ちょっとからかって見ませんか？」

「アラ、いいの？」

座席から立って、女囚の前に行った若い芸妓は

「どんな心持ちなの？ ホホホホ、いいさまね、何とかお云いよ。」

口は利ける様にして頂いてるんだろ」

「く、く、く……。く、く、く……」

女囚は唇をふるわせて嗚咽した。

「じゃね、ワンとお云い。ワンと」

「これっ、おっしゃる通りにするのよ。でないと……」

婦人憲兵に冷たく云われた女囚は涙と共に吠えた。

「ワン」

泣き声が高くなる。

「何よ、その声は。もっと大きくハッキリと」

「ワン」

「ホホホホ、口惜しいの？ ちょっと顔を上向けてごらん」

恨めしそうに見上げる女囚の顔に唾が吐きつけられた。

「さ、お礼を申し上げなくちゃ、いかんじゃないの」

「あ、あんまり……。あんまりです……。そんな……。もう……。こんな

にされて……。その上に……。お礼だなんて……。ああ……。一体、何の

うらみがあるの？少しは、私の身にもなって見てくれたら……」

婦人憲兵の足が巧みに動き、鼻鎖を使って、女囚の顔は床に押し

当てられた。鋭い鞭の音。

(未完)

## 新人 (ニューフェイス) 悦虐ムード図絵

大手札 (9×13センチ) 印画紙焼付

各組 三枚一組 二五〇円 (送共)

○花本京子 二〇才

身長一五四、体重四二

略号 (もと)

可憐なあどけない顔を苦痛に  
ゆがめて縄目にあえぐ京子

○桜井葉子 一九才

身長一六〇、体重六三

略号 (さく)

全裸の姿態を惜しげもなし晒  
して緊縛の祭壇に捧げる葉子

○熱海容子 二二才

身長一五五、体重四九

略号 (よう)

ポチャポチャした柔肌に素直  
に縄を受けてむせび泣く容子

○大井小夜子 二二才

身長一五四、体重四五

略号 (さよ)

妖しい魅力を発散して量感あ  
る全身をくねらせる小夜子

○山路ミヨ子 二〇才

身長一五四、体重四五

略号 (みよ)

一旦縄に括られると、これで  
も純情なBGかと驚くミヨ子

○加茂良子 二二才

身長一六二、体重五四

略号 (よし)

彫の深い特有のマスクにピチ  
ピチとした強靱な姿態の良子

○前本妙子 二三才

身長一五八、体重五一

略号 (たえ)

なだらかな腹胸の線が美しく  
カーブを描いて悶える妙子

○柳初子 二〇才

身長一五七、体重四六

略号 (はつ)

愁顔に涙を湛えて足の指をく  
の字に曲げて身をよじる初子

○若原明子 二〇才

身長一六一、体重四八

略号 (あさ)

後手に厳しく引き上げられる  
とお臍の所でくびれる明子

○四方清美 二二才

身長一五八、体重四八

略号 (きよ)

白い肌を狂ったように震わせ  
てもだえぬく美しい清美





## 女相撲

## 元女力士の懐旧談

雪 崎 京 人

富士の見えるY町に仕事で行った或る日のことだった。櫓太鼓の音に気がついて、見ると町の中程の空地に小屋がけして、女相撲がかかっているではないか。

開場までに時計を見ると一寸間がある。一つ、仕度部屋へ行って彼女等と話をしてみた。欲望にかられて、木戸番の爺さんに心付を握らせて案内を頼んだ。爺さんは「それならば若い連中よりも、ここの親方のおかみさんにお聞きなさい。おかみさんは子供の頃からこの道に入り、色々な苦勞をしてきたんだ。面白い話も聞けるかもしれないよ」と裏手の親方の居る所へ案内してくれた。

親方は六十近い、がっしりした体の男で、無あいそにむっとりしている。細君は五十を

越したかと思われる年配のやせ型で背のすわりとした、若い時は美しかったろうと思わせる様な整った顔立ちの女だった。

木戸番の爺さんから一通り話を聞いた細君は「私なんか何もお話しする様なことありませんよ」と取りつく島もない様な返事だったが、私も煙草をすすめ乍ら女相撲の大のファンであることを話し、話して貰ったお礼は、きつとしたいからと言うと「アラ、お礼なんかいりませんよ。あんたの様な人に聞いて貰ったら私も嬉しいんですよ」とポツリポツリと話をすすめるのだった。以下、私の質問に答え乍ら、話して聞かせてくれた彼女の言葉をまとめて見た。

○

今でこそ、こう年を取ってしまったては話にもなりません、私も女盛りの頃は十七、八貫はあり、上背も五尺三寸位で、その上、自分から言っちゃアおかしいのですが、当時の映画女優の誰彼に似て居るなどといわれたものでした。女の相撲取りなどといっては色消しの様でしようが、緑の黒髪を水もしたたるばかりの櫓落しの大銀杏に結い上げ、激しい稽古で鍛え上げたつややかに油ののった肌の均勢のよく取れた丸裸に紫紺の相撲褌を締め込んで、土俵の上にスックと立った姿など、女同士でも惚れ惚れする様な人も何人か居りました。

尤も当局の取締りが今よりもやかましかった頃のことですから、都会地では裸というわ



けにはいかず、肉襦袢にパンツをはき、その上に褌を締めたものですが、田舎の町などでは、しょっきりの時など裸相撲を取って見物を喜ばせたものでした。

それから私達の若い頃は、稽古の時は必ず裸でやらされたものです。稽古といえは、その頃の激しかったことは、今の若い連中などと比べものになったものじゃありません。私が女相撲に入ったのは数え年十六の時、小さい時から割合に大柄で力があったせいか男の子と相撲を取っても勝つ事が多く、相手を土俵に思い切り投げ倒す時の何とも言えないスツとする気持が好きで、巡業に來た女相撲を見てみると矢も楯もたまらず弟子にして貰ったのでした。

たのでした。

でも初めて裸にされて姉力士から稽古を締めて貰った時の気持は、今でも忘れられません。堅くまわしを締めつけられ、はずかしいのと痛いのとで身動きも出来ない位なのに、姉力士達は「一丁、揉んでやるから力一ぱい、ぶっつかって来な」と土俵の上で呼んでいる。何もかも忘れて力一ぱい飛びついたらアツという間にスッテンコロリと投げ出されている。こんな筈じゃなかったと又、武者ぶりつくと褌を掴まれて振り廻され、いやという程土俵に叩きつけられてしまうのです。特に大の負けず嫌いで女のくせに相撲をとろうという位の娘ですから、投げつけられても起き上り夢中になって十何回も姉力士にぶっつかって行ったものでした。体中、汗まみれになった所へ転んで泥まじりの砂がついて阿部川餅の様になり、ハアハア息を切らし乍ら組みついて行ったのです。

力や体だけじゃないんですね。私はその時、十七貫位はあったのですが、十四貫位の小柄な姉力士に、てんで齒がたたないのです。癪にさわってしょうがないんです。何とかして一ぺんでも勝って見たいと、それから毎日毎日、夢中で稽古をしましたよ。お蔭で

体中すりむき、傷だらけ。それに馴れない稽古を締めて、それを掴んで振り廻されるので皮膚の柔らかい部分が真赤になって痛いのと、体中の関節が痛んで、しゃがむのにこまる程でした。

稽古の間には風呂焚き、洗濯、炊事など新入りの私の外に二、三人でやらされました。風呂は朝から沸かして何時でも入れる様にして置くのです。大型の据風呂を二本、巡業の先へ持って歩くのです。それから稽古の洗濯です。十四、五人、居る女力士で自分で洗濯する人も居ましたが、普通のよれなら私達が洗われました。

今と違ってパーマの髪はなくみんな稽古の時は洗い髪をわらで束ねて火の出る様な猛稽古をやったものです。ふだんは私達、女ばかりで稽古しているのですが、一年に二、三度は男力士を頼んでみっちり稽古して貰うのです。その時の具合で田舎相撲の頭の禿げかかったおっさんなどが来ると、みんながっかりしちゃって稽古も不熱心になり勝ちですが、その反対に若くてにが味走ったいい男などが来ると、ふだん怠けている者までが一ぱい稽古に精を出したりしてからかわれたものです。何といっても男のしかも本職の相撲取り



は強いのです。国技館の大相撲の三段目位まで行った力士が来た時など、みんな一生懸命に稽古しメキメキと強くなつた人も何人か居ました。

若い男と女が禪一本で相撲を取るなどという、あなた方はヘンに思うでしょうが、相撲の技を磨くことに夢中ですから取組んでいゝる時は案外、何とも思いませんよ。それよりも私達の若い頃は飛入りを歓迎したものです。女といつても私達は玄人ですから素人の男達には大概の場合、負けません。勝負のこゝつを知っていますから、揉みに揉んで土俵一ぱい暴れ廻つて見物を喜ばせて置いて勝つて見せるのです。たいていの飛入りの男は見物が騒ぐので上つてしましますが、中には別の目的で飛入りをするようなのがいたりして、私達から見ても風紀上、面白くない様に思うことも随分ありましたよ。

女の飛入りというのは、めったにありませんでしたが、それでも山梨県のK市でしたか勇敢な女の人がありました。料理屋の女中さんだということでしたが、その頃のことですから銀杏返しとか何かの日本囀に結つて肌の白く美しい人でした。五尺五、六寸、十八、九貫はあると思われる立派な体格、二十四、五才

の女盛りです。余程の相撲好きで自信もあつたのでしよう。私達から禪を借りて締めて貰い、土俵に登つたのです。その女が、相撲の強いことは、その土地では有名だったのでしよう。見物たちは大騒ぎで声援を送っています。

初めに出た若駒は猛烈な突っ張りを食つて土俵の外へはねとばされてしまいました。次に出た綾瀬川は上手、下手と引つけられ鮮かな上手投に打取られて敗退。三度目には小結格の花筏があつという間に吊出されてしまいました。飛入りの女は息も切らした様子もなくニコニコ笑つて立っています。このままでは賞金も持つて行かれるかもしれないし、玄人の女相撲が素人女に絶なめにされたとおつては、この土地でも興業が出来ません。そこで次に関脇の私が出るようになりました。

私は綾錦という四股名でした。「よっちゃん、しっかりやってよ」と朋輩から背中を叩かれて土俵に登りました。向い合つて見ると相手は上背もあり、私よりも一廻りも大きい様です。胸を合わせて四つに組んだら相手は長身、忽ち吊られる恐れがあります。潜つてやろうと少し離れて仕切りました。それに、玄人と素人とは肌の鍛え方が違います。殊に

素肌に禪を締めて取組んだ時、馴れない時は禪が食い込んでとっても痛いものです。卑怯の様ですが、これで攻めてやろうと考えたのです。

低く仕切つて立上るや、両手で相手の前禪を取つて頭を胸に当てて喰下りました。相手は参つたらしく私の禪を取ろうとするのですが、腰を落しているので取れません。案外あつてなく私の注文通りになつて、このまま押して行けば簡単に私の勝です。そこに油断があつたのですね、相手は後へさがり乍ら私の首を起し、右を差してしまつたのです。揉み合ううちに上手下手の両禪を取られ、胸を合わされてしまいました。こうなつたら五分五分の体勢、吊りに行くより外ありません。腰を落して吊ろうとすると、相手も腰を左右に振つて吊らせません。相手が吊ろうとすればこちらも臂を振つて防ぎます。相撲が長引けば平素、稽古をつんで居る私の方が有利になつて来ます。相手は吐く息も荒く、先程からたて続けに四番取組んでいるので流石に大分弱つて来た様子。しかし体がしなやかで腰が強く相撲がうまいのに感心しました。だが感心ばかりして居ては、こちらが負けるので吊り気味に寄り乍ら土俵際こらえる所を右足で



外掛にからんで二人折重なって土俵下へ落ち  
て私が勝ったのですが、相手の女は何処か打  
ったと見えて起上れません。手を貸して漸く  
起上りましたが島田雷ががっくり崩れて禪は  
今にも解けて落ちんばかりの無惨な姿でした  
が、善戦健闘したこの美人に満場の見物は、  
われ返る様な歓声と拍手を送って居ました。  
あとで風呂場でその女と一緒にになりました  
「あんた、すごく強いんだね。何処で稽古し  
たの」と聞くと、体の砂を流し乍ら綺麗な糸  
切歯を見せてニコリ笑って「負けたわ。や  
っぱり玄人にはかなわないわね。あんたに禪  
を取られて吊られ時は痛かったわ。私は相撲  
が大好きで何となく覚えちゃったのよ」とい  
うのです。気持のさっぱりした、いい人でし

た。今でもあの時のこと、昨日の様によく覚  
えています。女の飛入りであんなに強い人は  
それからあまりありませんでした。

女が大部分を占めて生活しているの、色  
々とうるさいことも多かったのは事実です。  
女同志でとても仲がよくなる組もあるし、そ  
の反対に気が合わなかったりして喧嘩ばかり  
している人達も出来たり、さまざまです。

前にも一寸言いましたが、男装の麗人とい  
ってはおかしいですが櫓落しの大銀杏の髪に  
筋骨質といってもごつごつしないでつり合い  
のとれた姿に紺の禪をしっかり締め込んだ立  
姿、ふるいつき度い様な人も居ました。この  
人に熱を上げてまるで男の恋人の様に争って  
いる連中も居りました。

又、吾妻川と千代の森は犬と猿の仲という  
のでしょうか。どちらも私などにはいい人達  
なのですが、虫が好かないのが二人、顔を合  
わせると必ず口喧嘩でした。普通の人の間と  
違って何しろ取組み合うのが商売の私達です  
からたまりませんよ。派手な口喧嘩からどう  
かすると取っ組み合いになるのです。まわり  
の者も初めは止めに入ったりしましたが、そ  
の内にほっとくことが多くなりました。稽古  
の時など真剣な喧嘩相撲になってしまうので  
す。

吾妻川は非力でしたが相撲はうまく、千代  
の森は昂奮すると無茶苦茶に組ついて行くの

で足をすくわれたり、はたき込まれて蛙の様  
に土俵にたたきつけられたりすると、齒をキ  
リキリとかんで目を吊り上げて張り手で向っ  
て行きます。張り手というよりなぐりかかっ  
て行くのです。私達、見ていて、その真剣な  
全身の表情の異常な美しさに打たれて身体中  
ゾクゾクしたものです。

私も十年位前までは禪を締めて若い人に稽  
古をつけてやったものでしたが、もう年です  
よ。肩や腰が神経痛で痛む様になっちゃだめ  
です。

女相撲は表芸の相撲の外に歌も唄えば踊も  
踊るのです。その稽古が又なかなか大変なの  
です。それに色々な力芸、これを仕込まれる  
のが一通りでないのです。楽じゃありません  
よ。

○

櫓太鼓が盛んに鳴り響いて来る。親方の細  
君。綾錦よしえさんの思い出話は昼きない。  
仕度部屋の方を見ると、はち切れる様に元氣  
な娘達が禪を締め合っている。入りも上々ら  
しい。最初は若手のぶつつかり稽古から始ま  
る。私の横を若い娘達が香わしい体臭をまき  
散らし乍ら通りぬけ土俵へ登って行った。や  
がて弾みのある掛け声が聞えて来た。見物を  
前にして元氣のよい稽古を見せて居るらしい  
綾錦に又続きを聞くことを約束して若手の相  
撲ぶりを見に見物席へ私は行くのだった。





クリスタル・ノートから

# 浣腸に魅せられて

北 沢 操

「この拙文が誌面を汚す機会に恵まれましたら、また続けたいと思います」とペンを置きましたのが半年程前でした。二月から一寸した事故で、病院生活を送っていました為、本誌とも御無沙汰してしまいました。先日退院して、早速、新刊を開きますとすっかり忘れていた私のものが載っているのに、本当に驚かされました。何と云う恥しらずな事を書いたものでしょう。何か

自分の吐き出した汚物を見る様で、未だに読み返す勇気が御座居ません。にも拘らず再びペンを取った心理は、はっきりしませんが、体験を記す事で少し宛、気持が浄化される事と、もう一つ終りに記す事の二つが原因の様です。デュアメルでしたか、人間の最後の美德が羞恥心だと云っていますけれど、それすら捨てる事に依って受ける自虐的な感情もからんでいるかも知れません。ともあれ、また古いノートから二、三、抜き書きしたいと思えます。

年が改つてもう三年も前の事になってしまいました。必要と、いくらかの好奇心から一年程、社交ダンスを習った事が御座居ます。教師達とも親しくなつて、控え室に出入りする様になつていた寒い夜の事でした。クリスマスが近いので、はなやかに粧いをこらしてあるスタジオとは対照的に殺伐とした六畳程の控え室は、半分だけ敷かれた畳の上に、バ

ラバラになったトランプや、煙草の吸いさしから煙の立っている灰皿、ハンガーにもかけずに脱ぎ捨てられたセーターや上着で、足の踏みいれようもない位い乱雑をきわめていたものです。読みさしの週刊誌を開いていると女教師の佐藤さんと土井さんが連れ立って来て雑談を始めました。そのうち、

「土井さん、今日は元気ないわね。昨日は休んだし、デートで遊び過ぎたんじゃない？」  
 「ううん、だと良いんだけど、もっとツヤ消しなんだ。あたしね、ここんとこ、ずっと便秘してたの。おととい、下剤飲んだら効き過ぎちゃってネ、昨日はお腹が痛くて、寝てたのよ」

「あら、そうなの。それは御気の毒。そう云えば、あたしも暫らくないみたい。この頃朝寒いでしよう。十時半ギリギリ迄寝てるので食事してお化粧するのが一杯よ」

「ここ迄、どの位かかる？」

「距離的には近いんだけど、乗り換えが多いから結構かかるのよ」

いつの間にか私は全神経を耳に集中していました。ノーマルな人達には「便秘」等、風邪をひいたとか、頭が痛いと言う程の日常茶飯事かも知れません。こんな会話はこの人達

に限らず、今迄よく耳にした事です。

「便秘」と云う言葉から、あの独特なレクタム感覚や、浣腸を連想して妖しいざわめきを覚えるのは矢張り私が異常だからでしょう。ノーマルな人達には浣腸でさえビタミン注射を打つ位にしか感じないのかも知れませんが、土井さんは上手にかくしてはいますが、頬に黒くニキビの跡がういていますし、二人共、化粧を落とすと病的に血の気がない顔色をしています。便秘患者とすれば、肯けないことはありません。私は、つとめて冷静を装って会話に入りました。

「便秘って幾日位続くの？」とたずねますと、

「そうね、よく覚えてないけど、ない日の方が多いわ。塩水なんか飲むと、その時だけあるんだけど……」佐藤さんは、

「あたし、四、五日ってとこかな。気持良くなる程ないけど……」

「浣腸した事ないの？」矢張り頬に血が上るのを感じ乍ら、たずねました。

「いやーだ、赤ちゃんじゃないもの。赤ん坊は熱だしたとき浣腸するけど……」と土井さんが答えたとき男の教師が来たので話題を変えましたが、そのときにこの人達に浣腸した

くてたまらなくなったのです。都合の良い事には、こゝは夜、誰もいない為、時々教師が泊って行く事でした。木曜日が特に混むので土井さんは、よく泊って行くと云っていました。そこで私は、わざと教科書とノートを置いて帰りました。

「明日、早く来て誘導したら、うまく行くかも知れない」と考えると、胸がドキドキしてなりません。金曜日、九時半。もし土井さんがいれば、まだ白河夜船と云うところ：一寸悪いかないと思いつら電話をかけると、思った通りの寝呆けた声が聞えて来ました。昂奮と期待でワクワクし乍らイチジク浣腸をバッグにしのばせ家を出ました。夜ばかり見慣れたスタジオはもう十時近いのに不思議にしずかにさえ感じられます。土井さんは丁度遅い朝食を終ったところでした。

「北沢君、廊下で一時間、立って貰え。教科書忘れるなんて不心得者めが」

「御免なさい。でも、こゝにあって良かったわ」

「わらわは難儀じゃ。お蔭で早起きさせられちゃったワ……何としやる」と明るく笑いはすのです。

「ほんとに済みません、早くから。午後から



のゼミに必要だったの……」

「いゝのよ、いいのよ。早起きは三文の得って云うじゃない」それから、お化粧にトイレに立ちましたので、早速、後から続き、

「あなたまだ便秘直らない」とたずねますと「だめね、さっぱりよ。ヨーグルト飲み始めたんだけど、全然、効かないわ」と事もなげに答えます。

「あたし、いつもの時、きまって便秘するんだけど……」

「じゃ、あたしと反対だわ。わたしは却って調子がいいわ」

「あらそう。いつもイチジク浣腸、使うの。」

「アゝまだ一つ残ってたわ。昨日、丁度、終わったので……。これ上げるわ、使って御覧なさい」

「思ったよりスラスラと云えたのは、自然光をさえぎられたビルの中で、昼から螢光灯と云う環境の助けが多分にあった様です。」

「やだわ、浣腸なんてした事ないもの」

「じゃ、あたしして上げる」と用意した言葉が咽喉迄来ていて云えません。仕方なく、

「サッパリするわよ。今しちやいなさいよ。もう穴、開けちゃったわ」と箱から出して手渡しますと、

「後で良かったのに、困ったわね……」と云

い乍ら、土井さんは扉の中に消えました。私は扉の前で耳をすませながら、もう薬液は入り込んだかしら。この扉さえなかったら、よく見えるのに。と思うと、金属製の無愛想な扉が憎らしくてなりません。そこで「暫らく我慢しないと効かないわよ」と声をかけますと、

「イヤ、御願いだから外に出て」と、いつもパサパサに乾いた土井さんの声が、何とも云えず艶かしくひびいて来ます。二、三分しかたないうちに、しきりに苦しむ吐息が聞え間もなくいつもより派手に聞える水洗の音で目的を達した事が扉越しにわかりました。足音を忍ばせ急いで化粧室から出ましたが小さいときお友達にした事が連想されてなりません。小学校三年の冬休み、一日留守番を頼まれ退屈し切っていたとき、仲良しの香代子が遊びに来て、お医者さんごっこをする事になって、薬箱を持ち出しました。マーキュロ、メンタム、胃散と取り出すうち、あの怖いイチジク浣腸が出て来たのです。ドキッとして、セロファン紙に包まれた赤いセルロイドの容器を見つめていますと、平気でとり出した香代子は、

「あら、これ何？」と訊ねるのです。

「浣腸」と面喰って答えますと、

「浣腸って、これですのよ」と、ひどく珍しがって見るのでした。それ迄、浣腸は何度も二人で話合っていましたので不思議に思っ「貴女、浣腸された事ないの？」と、たずねますと

「家じゃゴム管とガラス使うの。もっと大きいわよ」と答えました。その頃、ガラスのシンダーは知りませんでしたし、子供の事でお互いに譲らず大論争となり、

「こんな浣腸されたって痛くないでしょう」と云う香代子の言葉から、とうとうムキになって実験する事になったのです。

「泣いても知らなくてよ」

「誰が泣くもんですか、平気よ」

彼女は面白がって横になり、私は怖しさと楽しさの入り交った複雑な気持ちでセロファン紙から取り出しました。こんな思い出に耽っているところへ、土井さんが一寸、顔を赤らめて出て来ました。そこで意地悪く「どう？効いたでしょ」と言葉をかけますと、眼を伏せて黙って肯いたものです。続いてトイレに入ると、真白な便器は綺麗に洗い流されて跡方もありませんでした。以来、こゝには顔を出しません、毎年クリスマス近くなると、

無理に押し付けたイチジク浣腸をもってトイレに姿をかくした土井さんが懐かしく思い出されます。友達の話では、その後こゝは閉鎖したとの事。それに移動の激しい世界では、もう会える機会もありませんけれども……。

もし私に勇気がありましたら、自分以外の成人に浣腸出来る一つのチャンスだったのにと思いますと残念でなりません。

私が初めて本誌を知ったのは三十年の夏、すでに休刊になった後でした。縁日の露店で目立って洒落た表紙に目を奪われたとき、運命をひきあてゝいたと云えるでしょう。それには羽村京子様の『狂い咲くカンナ』が掲載されておりましたが、これは私にとって一生忘れる事の出来ないものとなりました。宙をとんで家に帰り一気に読み通した時はグラグラと目眩して、口の中がカラカラになった事を今でもハッキリと覚えております。それ以前にもフロイドやエビングの著書で肛門性欲に関した記事を目にする度に妖しい胸騒ぎを感じました。種々の浣腸器具を、初めは恐る恐る、次第に大胆に使用して、苦痛がいつか快感になり、次々と強い刺激を求めるようになりまして。そして、いつもそのあとでは、たまらない自己嫌悪に陥ったものです。

ところが「私と同じ傾向の方がいらっしゃる」（全く同じでない事は後にわかりました）が」と思うと奇蹟の様に思えました。幼児時代にはしばしば浣腸された事。成人になった頃からの事など、総てが私の行為をそのまま描かれていました。たゞ浣腸を責めの方法として用いる事は、初めてこの作品から教えられたのです。

浣腸薬と買う事は大変恥ずかしく、やっとの思いで大人用を二個求め、期待に胸をはずませ乍ら床につき、思わず容器共、暫らくたのしんだ後、プツプツと両側に穴を開けました。初めて自分の手で行う浣腸、薬液のムズムズした感覚、それは異物感とは似ていて少し違ったものでした。無理にこの違いを表現しますと異物感を横の感覚とすれば浣腸は縦の感覚と云ったら近いでしょう。続いて起るレクタムのぜん動は想像より遙かに強く、殆んどたのしみ余裕はありませんでしたし、排泄後、一しきり襲う苦痛も決して快いものではなかったのに、それがいつのまにか魅力あるものになって来ましたのは、度々繰返すうち感覚がレクタム迄発展した為でしょうか。以来、古本屋などで羽村様の作品が掲載されておるのを見付ける度に購入しております

が、古いものは少く、早く本誌の存在に気付かなかった事が悔まれています。

羽村様のテキスト(?)に従って、ゴム製の浣腸器やエネマシリンジや洗滌器等を買入れて実験を始めたのも、この頃からでした。

一度、朝配達されたばかりの冷い牛乳を用いたところ、只の水と違ってわずかに二〇〇℃にも足りない量で作用は意外に激しく、三分と堪えられなかった事があります。こんな事を繰返すうち、羽村様は大腸の奥深く迄感覚が発展して行くのに、私は進まない事に気付きました。旧号の「浣腸遊戯」をまね、バケツと長いゴム管の使用で三立近くの水を入れたときも、大腸膨満感は苦痛以外の何物でもありませんでした。

恰で山手と京浜に東京駅から乗る様に途中からいつの間にか私は元に戻って居るのに気付きました。この点二月号に「埋れた日記」を書かれた井上正子様は、私に近い様に思われますけれども……。

私が特に興味をひかれたのは『妖花』でした。また、花村恵美子様の「二個のイチジク浣腸」は心憎い程、マニアの心理を抉った小品に思えるのです。

ある評論家が、近頃の雑誌はまるで人間が



# 新浣腸写真

紙面印刷  
大塚啓子

## イルリガートルの

### 嘴管による浣腸

四枚一組 三〇〇円

(略号「ちい」)

黒蛇のようにウネウネとねってゴムの管は恐怖の浣腸液を運んでくる。嘴管がマニヤの心をひきつけるように目の前で光っている。

## エネマシリンジの

### 嘴管による浣腸

四枚一組 三〇〇円

(略号「ちえ」)

ゴム球を握るたびに一端から浣腸液は絶え間なく送り続けられる。啓子嬢の手の中にあるエネマは妖しい曲線を見せてマニヤの心をゆさぶる。

## 硝子製三〇〇C

### シリンドラによる浣腸

四枚一組 三〇〇円

(略号「ちか」)

白い硝子冷たい感触は乙女の手の中でにぶい光を放って浣腸液を吸い上げ、シリンドラの先からはフツフツと白い液が玉になってところがり出る。

セックスの化物の様に描かれておる、と書いておりました。たしかに雑誌に限らず書店にはセックスに関する出版物が数多く飾られております。然し私の様な傾向のものが興味をひかれるものは、とても少ないのです。最近のものではわずかに、中東の性文献を集めた「蓮の中の宝石」や、本邦初訳と銘打った「ソドムの百二十日」の一部と云うところでしょうか。むしろ一般書よりも、医療関係のものに興味深いものが多いのです。

「三十二才、女、常習性便秘症の患者で、便通は早くて四、五日に一回、時には一週間に亘って排便をみない事がある……以下略」  
「二十九才、女、患者は妊娠四カ月の経産婦で前妊娠時以来便秘し勝ちで排便は早くて四日に一回、一週間以上便通を見ない事はしばしばで、浣腸の常習者であつた……略」(傍点)

便秘症、年令的には十六才から三十才迄がピークです。(習慣性以外の患者の年令層は別)これを分析したら、興味ある結論が出るかも知れません。またX線診断の例として、写真がありますけれど、症例に依って大腸全体にギッシリと詰っていたり(無力性便秘)キレギレにずっと続いていたり(ケイレン性)するのはいずれも興味はなく、矢張り大腸は正常でアヌスの真上あたりでレクタムが大きく拡大している(直腸性または習慣性)写真にひきつけられます。それに、一週間も十日も続く頑固なものは、この型に多いと書いてあります。下利と便秘では、共に苦痛を与えるのに便秘の方が遙かにエロチックに感じるのは、私だけでしょうか。私、このところ変調が起って、少し便秘勝ちですけど、却って自分に対する口実が出来て一日置き位にたのしんでしまします。それに何故か便秘すると浣腸を含めた欲求が強くなり、恥ずかしい妄想が次々と湧いて来るのです。以上の様な事が平気で記せましたのも、その為かも知れません。まだノートには記したい事が一杯ありますけれど、一先筆を置きたいと思ひます。(終)



八月号の巻頭に載せられた千草忠夫氏の「奇ク私見」を拝見して大いに感ずるところがあったので敢てここに一文を草し投稿することにした。勿論小生は数年前からの愛読者ではあるが、未だ只の一度も投稿したこと経験を持っていない。純然たる買って読む方の立場の者である。

その点、千草氏は嘗て本誌上にも三、四の作品を発表されたことのある（作品名は忘れたが名だけは記憶している）寄稿家のようにお見受けする。従って私のように純然たる読者の側に立った者とは自ら見方も変わってくるかもしれないと考えられる。

然し、そういった点を計算にいれても、大体に於て千草氏の意見には同調させられる。細かい点については揚足とりのようなことは

言いたくないが、一つ大きな誤謬を冒している件があるので言及してみよう。

それは、——プレイで昂揚した感情のままに、抱擁に、愛撫に進む事は、むしろ正常でさえある。女を責めるだけで満足して、セックスの結合は全然ダメという高症患者は果して読者の何パーセントになるだろうか。——と言ったあとで、

だからといって私は愛撫の描写を長々とやれというのではない。ただ、当然起る筈の結果を強いて隠蔽しようとする所に、不自然さを生ずると言いたいのだ。

## 『奇ク私見』に寄す

岩崎一生

——と言っているが、この所をよくよく千草氏に考えてもらいたいのだ。

例を挙げれば、人間誰しも日に何回となく排泄行為を行っているが、小説にしても映画にしてもテレビにしても、こんな場面を一々描写しているだろうか。千草氏によれば、これも不自然というのだろうか。

発表すべきものとすべからざるものの取捨選択があつてこそ、良識というものが存在するのであって、味噌も糞も一緒にするようでは、折角の高説も味が悪くなるというものだ。

それから、もう一つ、——愛する男女の間であれば、それは不純でも猥褻でもない筈だ。——と広言しているが、これは果してどうだろうか。如何に愛し合っている恋人同志だろうが、相思相愛の夫婦の間であっても、セックスの場面が公開（公然性）されたり、その描写が印刷されて頒布されたりすれば、公然猥褻罪にとわれるの

は常識である筈だ。又、その反面仮りに社長と二号との間であつたり、若い燕と人妻といった関係であつても、それがホテルの一室のような密閉された個所で行われる限りに於ては、何ら公然猥褻罪にとわれることはない筈だ。

以上の点については、私は奇ク編集部の方々に全面的に賛意を表したい。エロがないとか、省略しすぎるとかといった批評に対しては敢て右顧左弁する必要はないと私は思う。堂々と既定の方針に従って進まれるのが、私達多くの読者に奉仕する所以でもある。

一部のエロとどきつきさを好む偏狭者の言のために道を誤ってならないと忠言を惜しまない。セックスの描写を読みたい御仁には、又然るべき秘密出版物が出廻っていることであるから、その方へ転向願つて、私達純粹にして小心な愛好者は、この文獻的な香気の高い奇クをいついつ迄も、健やかに育ててゆこうではないか。

最初に言つた如く、私は千草氏の意見に全面的に反対するわけではないが、自説を強調するの余りいささか、牽強附会の感なきにもあらずと愚考した為、一文を以て参考に供した次第である。





△誌上通信△

梨花悠紀子さまへ

八月号の写真を見て

花田 一郎



八月号は何故か印象に残る号でしたので読者係りお求めの「モデル嬢に対する呼び掛け」に筆をとります。近藤一さんの「川端多奈子を想う」や「『私を責めて下さい』に応えて」の美文をもう少し進めてみたいと思うのです。頭だけの愛情はお互いに疲れるばかりだと思ふからです。

短刀直入に行きます。梨花悠紀子さんを私は川端多奈子さんに勝るとも劣らぬマゾヒスティンと思っています。「座敷牢の麗嬢」や「雨装束とチュートリップ」の傑作が後年にまで残る作品であることを私

は疑いません。海の泡から生まれたヴィナスのように、縄のうねりと責具の目から生れた梨花悠紀子さんの裸身は美しい――。

私がここに筆をとる目的は、梨花さんに川端さんの「この歯がゆい気持はわかって頂けると思いますが。そして、それでいて、そんな要求を口に出して、よう言わない私の気持もわかって頂けるでしょう」とか「しかし、自分から、そんなことをよう言い出せませんでしたが」とか「私の心の動揺は誰にもわかって頂けないのじゃないかと思ひます」「そんな私の想像

では、いつもその省略された（絵の）部分は、むごたらしい責め方をされるようになってしまふのです」といった孤独感に梨花さんを追いやり、梨花さんが精神的に破綻するであろうことを予防することにあります。

後になって、「現実の厳しさなのだ」とか「読者の中の特定の人の桎梏に、求めたとのことで、その時以来、川端多奈子さんが奇譚クラブの特写カメラの前に立つことはなくなりましたという」などというところが、再び起らぬように念願するからです。

さて「座敷牢の麗嬢」をもう一度よく眺めてみましょう。むごたらしく縛られた悠紀子さんが、何と生き生きと美しいことか！それは何かを待っているからです。ただ女であるから「ようことわれない」のです。求愛に應えて衣をぬいだ女の身体が求められなければならぬように、このようにむごたらしく縛られた女体は拷問を受けなければならぬのです。

皮の鞭で二十ぐらいでよいでしょう。被縛写真をとった後で梨花さんを、本当に鞭うってあげるのです。相当きびしく打つのがよい

でしょう。その苦悶のポーズやみみずばれの写真は、編集部員の有志や梨花さんの何ものにもかえがたい記念になるでしょうし、恐らく悠紀子さんの見合写真になることを、悠紀子さんが踏み入ってしまった道から推定して断言出来ると思います。そういった写真を奇クに掲載出来るかどうかは次の問題になり、少くとも現段階においては何人も犯すことの出来ないプライバシーなのです。

この一文を読んで、恐らく悠紀子さんは思わず目をつぶるでしょう。

けれ共、これは毎月書店の店頭というさらし合へさらされる悠紀子さんという二十世紀のいけにえに対する現代人という野蠻人の命令であってみれば、悠紀子さん自身は勿論、祭壇をつかさどる編集部も拒否出来ない性質のものかも知れません。

けれ共、悠紀子さんの心のどこかで「それで浮かばれる」とつぶやくものがあれば、一緒に「雨装束とチュリップ」を眺めてみましょう。数枚の写真の中で抱き起されたポーズが一番印象的です。それはこの写真の後で鞭を受けなければならぬからです。これに

は悠紀子さんも恐らくうなずかれることでしょう。

編集部の方々の積極性によって悠紀子さんが真実の愛情に結ばれるまでの一日一日を、生き生きと女のしあわせを享受されれば私の目的は達せられたのです。

附言するならば、受ける拷問は鞭に限りません。あらゆるお仕置が用意されてよいのです。野外なんかもよいでしょう。編集部員の中に柔道の心得があつて、活を間違ひなく入れられる人があれば、

## 連作「少女」

牧村興次・画

「黒い目かくし」

か細い足首にからまった麻縄は次第次第に引きあげられて真白な胫や太股が、あられもなく空間にむき出しになった。それらの肌に痛い程の男の視線を感じたが、黒い目かくしをされているため、彼女は一層強い羞恥心に身もたえるのであった。



悠紀子さんは絞首刑や操り責めに悶絶してもいい筈です。身体にはつきりした傷跡が残らない限り、土色の顔が悶えるまで責められても、許しを乞うことは無駄な筈です。プロレスラーが連日の苦悶を楽しくたえていることが、悠紀子さんの心の支えとなるでしょう。それによって悠紀子さんが最高の家畜に、いいかえるとヴィーナスにもまさる最高の女性へと訓練されてゆくことを切望します。

更に辻村氏へ。「雨装束とチュリップ」はふみにじられた花なのです。くつ下の男性よりも長ぐつでの男性の共演の方が良かったでしょう。それも数人の男の、足や背中をうつして重圧感を出して欲しかったと思います。一般に縛られた女を責める男が一人だというのはおかしいと思います。積極性が奇クのマナーリズムを救う源だと思えます。

この便りに対して悠紀子さんならば真実の答えをされると信じます。

一読者より



## ある画家



## △サロン通信▽

## 『かまきりの斧』評

近 藤

三月の上旬に、東京の同時代社という出版社から「かまきりの斧」と題した本が、刊行されました。私もふとした縁でそれを手にしてみたのですが、その際にKKの読者にも紹介したいと思いついたところ

四月八日付毎日新聞の夕刊にこのことが載りました。同封の切抜がその記事です。記事では早川になっていますが著者の早坂敬次郎ことG君には私も逢いました。立派な体格でありながら内向的で陰性な人らしく働

くこと、生きることを知らされ得なかった悲劇が窺われます。

本の内容は、それ自体KKの読者の関心を集めそうな描写の連続ですが、私の注意を惹いたのは、G君が強い批判を寄せている施設が、実は一年以上も前に私がKKに寄せた「蠢く蒼い群」において触れた施設らしいことでした。この種の保護団体においては今なおリンチは公然の秘密であり、それに耐えられないで逃亡を試みる者も跡を断たず、中には自殺の途を選ぶ者もあります。私は女子の収容施設の実態を知りたいと思うのですが、真相はなかなか窺うことすらできません。

少年院等の公的施設でなく民間の保護団体では指導員も不足でしょうし、強制力を持たないために古参者の横暴は事実上の秩序でもある訳でしょうか。

「かまきりの斧」にもそういったリンチの実態が或る程度、描写されています。

現在のG君は両親や兄弟と離れて浮浪の生活を送っているように思われました。

「蠢く蒼い群」で思い出すのは、あの直後、東京にあった幼女誘拐

事件です。

最後の註にも触れましたが、高橋ミチ子という少女の犯行で、この少女は嘘つきの天才らしく警察も全く欺かれていたとのことでした。

少女の話では、父親と二人で木賃宿の暮しをしており、自分は花売りさせられていた。一定の売上がないと父親に折檻されるし、淋しさの余り、つい可愛い子を見て連れ出してしまったのだといって係官をシンミリさせたのだそうです。

それが翌日、母親から捜査願が出され、実は浅草に住む舞踊師匠か何かの娘で、家庭は中程度の生活であり、何不自由なく育った子とのことでした。

私にはこの少女が素晴らしく頭の良い演技力豊かな女の子に思われて好感が湧くのです。勿論、誘拐は悪事でしょうがそれとは別にこの少女に好感を覚えます。雅樹ちゃん事件より、ずっと心優しい要素があります。

「蠢く蒼い群」について、もう一つ思うことがあります。それは筑波会のことです。勿論KKに寄せたものは私がペンで創り出したものなのですが、筑波会というグル

昭和三十六年四月八日附「毎日新聞」夕刊「赤でんわ」

○「かまきりの斧」と題する単行本が、ある出版社から出版された。著者「早川敬次郎」は武蔵野市に住むG君(二〇)。大学教授を父に持ちながら恐かつ、暴行、サキなどたくさんの非行歴をその身にきざむ若者である。

○「かまきりの斧」と題する単行本が、ある出版社から出版された。著者「早川敬次郎」は武蔵野市に住むG君(二〇)。大学教授を父に持ちながら恐かつ、暴行、サキなどたくさんの非行歴をその身にきざむ若者である。

……と語っていた。

ープが実在したことは、偶然の符合でしようか。

警視總監が代って原新総監の仕事始めは暴力撲滅でした。就任の翌早朝、暴力団の寝込みを襲う一斉検挙があり、やがて筑波会という少年少女達の比較的大きなグループが摘発されたことが新聞に載りました。新聞記事の範囲では、このグループは割合、新しいもので、少年達の年令も中学・高校を中心にしてゐるらしく、従つてもしかしたらKKの存在が何か作用したのでないかとも思えるのです。

関東地方では筑波山という山が割合に高名なので筑波会という名称はありがちなものですが、偶然の一致といえるでしょうが、興味

「奇クサロン」の

原稿を募る

読者サロン向きの原稿を募ります。御遠慮なくドシドシお寄せ下さい。掲載の分には薄謝を進呈いたします。

深いものです。そして最近に摘発された筑波会の前にも、或る暴力団の下部機構として年少者で作られた筑波会という集りがあったように記憶しています。

こういう団体における少女達の生感、そして必然的に発生するリソチの模様など詳細に綴ってみました。

(近藤記)



落したスカート

遠藤春一・画

「ううう、ううう」  
猿ぐつわの下から意味のわからない呻めき声が洩れてくる。それもその筈、スカートのホックがはずされたので、膝を曲げての彼女の必死の努力も空しく足元へずり落ちてしまったのである。下半身スリッパのままとなった彼女は、歩くこともならず、只、顔を真赤にするばかりだった。





## マゾヒズム漫歩

馬場好男

○ 婦人雑誌とかモード雑誌のどれでもいい、パラパラとめくると必ずといっていい程ファッショントの素晴らしいものを見つける。アラモードの服を着こなした美しいモデルのポーズだ。

私はこんなフォトにも強く惹かれる。これが立体的なものなら、私は四つ這いになって、その足許にうずくまるだろう。大体、女性には足を踏みひらいて立つのが好きなのではないかと思える程、よくこのポーズを見るが、私にはそれが、征服者のポーズに思えて仕方がない。

○ 最近、電車内の広告によく見るが、某化粧品会社で売り出している足のクリームの宣伝ポスター。「男性は貴女の脚をみています」のキャッチフレーズで、モデルの女性が短いネグリジエ姿で、そのクリームのチューブに跨り立っている図柄は、なかなか気に入ったポスターである。

○ 足のクリームの宣伝だけあってモデルの脚線は全く美しい。あの脚が、自分をギューッと踏みつけてくれたら、と、淡いマゾの空想に浸れる脚線美である。

○ フェミニニストの私は、時折り街で嫌なもので見る。警察署の前では特に多いが、うら若い女性が、何をしたのか手錠をかけられているのを見ると、私は心が痛む思いだ。以前に一度、婦人警官が十七八才の少年を連行して行くのを見たことがあったが、こんな光景だと別だから不思議である。

○ プリンス自動車のニュースカイライン・デラックスのコマーシャルの時だったと記憶している。若い女優を相手に、この宣伝会話が始まったが、女優さんの、問われ

るままに答えた言葉は、ザッとこんな調子であった。

「シートが広くて、とても乗り心地がいいでしょう。だから大好きなの。私はいつもこれに乗って行くんですよ」

「乗り廻すって、とても快適よ」

「乗ってみてもいい？」

「乗るわよ」

相手が自動車では仕方なし。

○ 貝谷八百子バレエ団のドラマチック・バレエ「くもの饗宴」をテレビで見たことがあったが、この中で女性に扮する蜘蛛が、矢張り女性の扮する蝶々になった踊り子を巣にからめて残酷な仕打をするシーンがあった。

踊りながらであったが、仰向けに横たわった蝶々を跨いだり踏みつけたりする所作に、私は心惹かれて見入ってしまった。

男性の私がその蝶々に扮して美しい女性の毒蜘蛛にさんざん痛めつけられ苦しめられ、結局と殺されてしまうという空想に楽しい一ときを過したことがあった。

一生に一度でよいから、そう場面に遭遇したいものだと思えない希望をいだくのもマゾヒストの夢なのかもしれない。

## 美少年責めについての希望

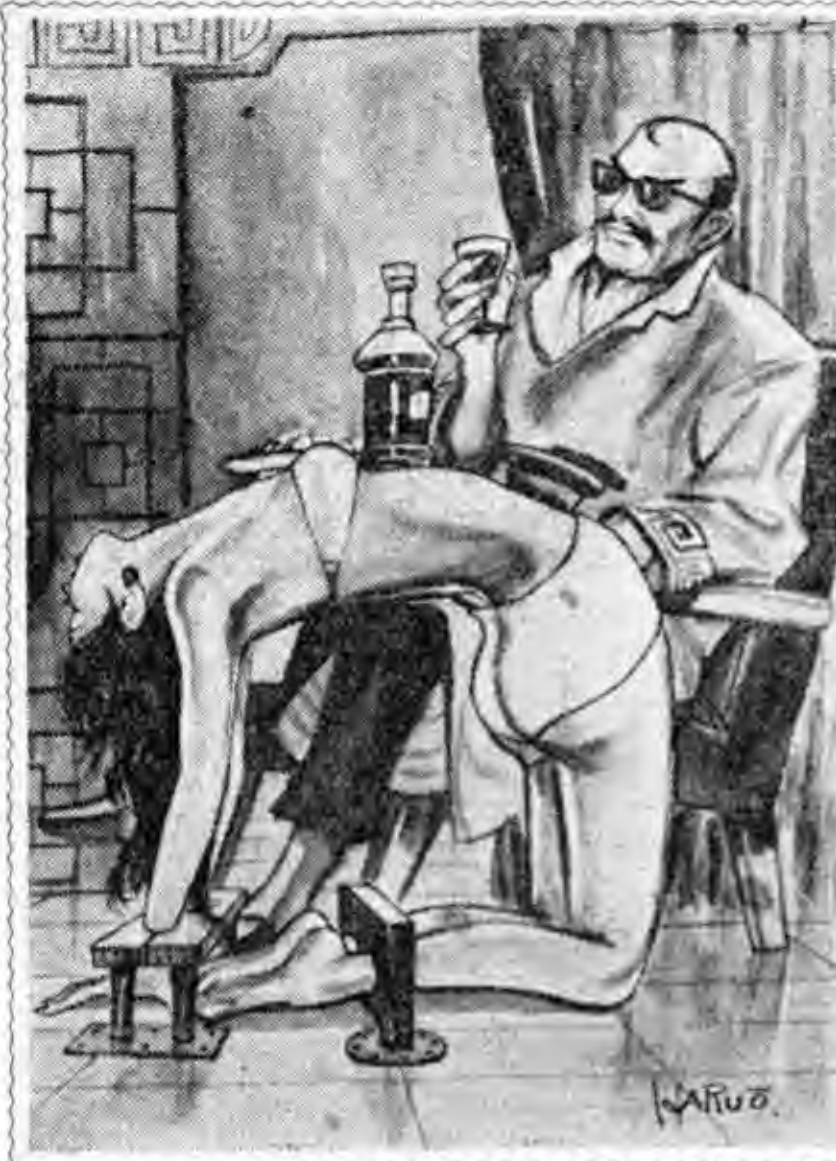
大阪 佐渡 健児

先だって「マゾの特集号」を刊行されましたが、男性責めのポーズが殆んどであったのに、大半が三十五才から五十才位の青壮年の男性で、私達の考えているよう

人間家具「美しいテーブル」

越野 春夫・画

「フッフ、こんど取寄せたテーブルは素晴らしいあるね、おっと、一寸でも動くと大切な品物落ちるあるよ。品物落ちたら、どんなヒドイ仕置にあるか。わかるあるね。フッフ」



坊ちゃん風の男の子を加虐するポーズの挿絵やカット、写真が直ちに、いわゆる世に謂う処の変質者の犯人を製造する温床たり得る危険がある、とは云い切れない。何故なら男性と女性とでは根本的な機能的異質のもので、暴行の二字についても、男の子と女の子とでは感じ方が根本的に異なることはご承知の通り。成人した女子を本人の同意の下に緊縛することが法的に可能であり、南村俊平氏のタッチでは実にあどけない姿態の少女が真に迫った表情で、拷問され悶えている口絵が掲載されているのは、矢張り人間本来の性を意識しての編集者諸氏のご意向に外ならぬと思います。

今ここに二つの写真。一つは小学生位いの女の子がズロース一枚に剥がれ、校庭の砂場の上に縄とびのナワで後手に縛られて転がされ、周りには同級生たちの怖しさの満ちた視線とムチを手にした男性教師の好色な顔付。今一つは、同一のポーズで、男の子がパンツも脱がされてうっ伏せに転がされているところ。吾々のようなマニアが見たところで、前者の方が矢張り何となく後暗いものを感じるのではありますまいか？

南村俊平氏のあの独得のタッチで次のようなポーズのものを描いて頂けたらと思います。吾々の幼少の頃の思い出（戦争ごっこ、ドロボウごっこ、狐つきごっこ、等々）括りつけられ、いじめられる少年少女を描いて下さい。これなら極めて自然にポーズすることが出来、世人の批判はないと思います。すべての人に共通のイメージであり、恐らく警察当局の取締り官でも、描かれた絵の一コマコマに共感を得ることでしょう。勿論括られる方は少年であり、原則として丸裸であること。小便をひっかけたり竹べらで拷問するのはオカッパ連であることが必要で、辻の電柱や勉強室の椅子、学校の鉄棒や土俵の四本柱、柿の木の下や夕涼みの縁台の上、押入や物干の上など、家庭的な場所で、又、例えば交番の横手にある電柱に縛りつけられたドロボー役の少年が警察官気取りの少女や少年たちにくすぐり責めにされる処を窓硝子越しに非番の巡査が眺めているといった風に、点景として第三者を配置することによって、それがさり気ないものであればある程、この種の構図がその責めの部分が生きてくるのではないでしょう。





## 玉稿落穂名句抄

編集部選

## 送別会の夜

保田 徹

「ねえ君、本当に苛めないから、まねだけさせてくれないか、だけど君は本当に苛められている様に芝居してくれないかなあ」

そう頼むと美しい目で私を見つめていたが、

「ええ、いいわ。どんな気持なのか私もなってみるわ。だけど本当にやらないでね、お風呂に入ったとき、姉さん達に見られてはいやだから……」

「大丈夫だよ、では悪いけど始め

るよ」

私は君香の腰紐に手をかけてほどこき着物をぬがせにかかった。

「ああ、かんにんして、ホーさんかんにん……」

最初から中々真に迫った好演技なので、私もついつられて

「さあ、いうことをきくん」

と逆らう様子をやる腰巻一枚の君香を腰紐で後手に縛り上げ枕元の乱れかこの中より、帯上げ腰紐

などを出してきて乳房の上下にかけて縛り上げると桜色の可愛い

乳首が上を向いている。

私は君香の髪よりヘヤーピンを抜いて

「さあ、よその男と浮気出来ない様に、お前のその白い肌に蛇の刺青をしてやるんだ」

「ああ、いやです。そればかりは許して……」

「さあ、じたばたするんじゃない君香、かんねんするんだ」

ヘヤーピンで刺青をするように脇腹や胸、太腿などをつつきまわ

しました。

「あああ、刺青なんか、そんなところへして、いっ、いたい、許して、誰か、助けて……」

真に迫った演技で声を殺して叫ぶのでした。私は火箸をとりあげ

て次の芝居にうつります。

「さあ、これでお前は俺の女だ」

「悪魔、あんたは悪魔よ、これで私もあの人と逢えないじゃないの私の清い恋をこわして」

「その相手の住所を白状しなければ、この焼火箸が、お前のその肌にふれるのだ。どうだ白状するか君香」

「誰がお前なんか可愛い男の所なんか言うもんか」

「よし、それでは、お前のその白い肌をじりじりと焼いてやる」

君香の肌にその冷たい火箸を当てると、本当に焼かれたように身をくねらせて

「ああ、うむ、あつ、熱つ」と真に迫って泣き叫ぶのです。

## 竹取姫

左 愛 染

「今晚は、昔の御礼に、縛られた姿を見せてあげましょか？」

榮造は、呼吸を忘れた。美しく桜色に染った顔に、うっすらと、はじらいを浮かべて、つやっぼく

美根子は、はにかんでいた。

「どなたのですか」

榮造は然し、用心をして、故意にとぼけた。

「わたしのよ」

「御冗談でしょう」

「本心よ。わたし、支度をしてくるわ、食事を終えたら、御休みになって待っててね」

美根子が立って、入れ違ふようにして姑がきて飯を給仕した。先の会話を聞かれたのではないかと疑い心配したが、そのような気振

りも無さそうだった。

膳が下がると、榮造は、無人の部屋で、わくわくと胸を躍らせ

た。隣り合せの部屋を開けると、すでに寝床が取ってある。横にな

ったが、待っても、待っても、美根子は戻って来なかった。

言葉のはずみで気紛れをいったのかも知れぬ。温和いとはいえず兎に角、同じ屋根の下に姑がいる

というのに、嫁の立場にある人が滅多な真似も出来ない筈だと、気が付いた。矢張りかつがれたので

あろう。それにしても、大胆な嘘を吐く人だ。と、美根子の不信を

憤慨したが、その中、酔が廻っていつか、うとうと、深い眠りに

落入了。

どれ程の時が、経ったであろうか、次の間の障子が、「すう」と

引かれた気配に、はつと目が醒めた。衣ずれの音に混って、ざらざ

らと、畳をひきずる金属性の音が



# 《鼻責めノート》 M生

美しい女性に鼻輪をとられて身動きの出来ない哀れな人間牛に対して、これから数々の惨酷な責めが加えられるようとしている。胸の上に置かれた五寸釘とプライヤーはそのむごたらしさを暗示している。枕元に脱ぎすてられたオシメカバーは何に使われるものだろうか。恍惚たる男の表情はいかにも満足気だ。

する。ひそひそと囁やいている声がした。人は一人では無いらしい。暗い光が、鴨居を越えて動くのは何か提灯のようである。

「電灯を点けてはいや」

といったのは、正しく美根子の声だった。暫らく、がさこそとしていたが、ややあって、合の襖がさらりと引かれた。敷居の外から「遅くなりました」

と忍びやかに、低い声がする。

狸寝入りもして居れぬので、上体もをたげて見ると、実に異様な光景が、栄造の眼前に展開されていた。

一人の女が、敷居の際に行儀正しく、左手をつき、右の手に、高

く手燭を捧げて、頭を下げて控えている。姑だった。

次の間と、控えの間との境の障子が、左右に広く引き開けられて二つの部屋は、一体となり、真ん中の柱に繋がれて、足を横ざまに坐っているのは、美根子だった。

二人がかりの合作であったのかと、しばしの程は、栄造は、口も利けずに驚いた。それは豪華なシヨリだった。

正面の犠牲の像は、卵がかった白無地の、一重の着物に、深紅の帯を細巾に締め、右脇下に残りを垂して結んでいた。膝は、少しく割れかけて、薄水色の蹴出しが、わずかに覗いている。

乳房を避けた菱形縛り。肩を越えて、背中に廻った首の縄。二の腕を、二つに巻いた腕縄は、脇をしぼって、胴体は、しっかりと引き締められている。直線に腹部を走った腰縄は、胸の菱縄を縦に張り詰め、あわれ、美根子の上半身は、更に一分の隙もなく、ひしひしと握められていた。

「本格式の、女縛りの型で御座います」

説明するのは、姑だった。

「御母様は、御爺様の御好みで、実験台に立たされて、さんざ研究されて居られて、御詳しいのよ」

言い訳のように、美根子が、姑の過去を披露した。

栄造は、またも呆れて、このうら若い二人の親子を、物珍らしく半々にして見較べた。この旧家には、古くから、このような遊びがあったのか。

美根子の細い両足首は揃えられ一条の鎖が黒く連結し、輪にしてくびられた両先端の付け根には、錠前が鈍く光っている。

「この足で、母家から歩かせられて来ましたの。ひまどりまして御免遊ばせ」

美根子は詫びたが、姑の差しかざすぼんぼりの光に、暗い廊下の足許を、照らされながら、縄尻を引かれて覚つかなげに、そろりそろりと進み行く、歩行に悩む美女の姿を想像すれば、これは一巻の絵であろう。

彼は思わず咽喉を鳴らして、生唾を呑みこんだ。

背後に廻れば、痛ましや、手首は合せてくぐられて、ゆるがぬ程に吊られていた。高手に連なる横縄と、首縄から小手に下がった堅縄が十文字に交叉して延びている。その交叉点に縄尻が起り、短かく固く、柱に結びついている。髪を肩から滑らかし、白無垢の汚れを厭って、それを奉書で包んであるのは念入りの支度である。



## 女性切腹の新聞記事から

結婚前の娘さんが

切腹自殺

(36・2・23産経)

(広島) 二十二日午前五時ごろ広島県高田郡向原町の農業小早川定雄さんの三女定子さん(二二)が自宅納屋で刺身包丁で右腹を切り苦しんでいるのを家人が見つけた。手当をしたが出血多量で死んだ。高田署の調べでは定子さんは三月五日結婚することになっていたが治療してもワキガが治らないのを悩んでおりこれを苦に自殺したらしい。

病気の娘さん切腹

(36・5・22朝日)

(尾道) 二十一日午後五時ごろ広島県田島市土生町江ノ内区工員川野信義さん長女信子さん(二二)が自宅でさしみ包丁で腹を切った。苦しんでいるのを家人が見つけた。立造船因島病院で手当を受けて二十二日朝六時ごろ死んだ。信子さんは精神分裂症だった。

△中康弘通氏から▽

△禪通信▽

ふんどし道楽

六尺一本生

友人に見せられた貴誌の禪記事がきっかけで禪を締めたところ最高の気分だったので以来欠かすところなく愛用している六尺禪男です。本当に六尺禪こそは、男のたましいで男一匹を誇示する最高のものです。締める心地よさは愛用者でなければわからないし、禪姿を眺めたり眺められたりする気分の良さもマニヤでなければわかりません。

僕は駐留軍関係の運転手ですが、昨年の夏、一緒に海へ行った時、兵隊から六尺禪姿をほめられ男として最高のセクシーだと言われました。どうして締めるか教えてくれと聞かれたので大いばりで教えてやりましたが、外人の六尺姿はどうもイカシません。やはり禪は日本男子のものです。仲間でも僕の六尺愛用は珍らしがられますが露出症なのか、じろじろ眺められ



ツーピース

アコードオンブリーツ

和服

## 娘椅子縛り三態

遠藤春一・画

二十才か二十一才か、とにかく結婚適令期のイギのよい娘さん三人。それぞれ三様に自信のある服装を着こなしていますが、果たして皆さんどの娘さんを選びますか？

たりするのが好きになりました。銭湯でも大いばりでみせびらかしたり夏など家に帰ると禪一本のまま銭湯に行くので近所でも有名？

になりました。友人に写して貰った禪一本の写真も百枚以上ありますが、時々眺めては楽しんでおります。



&lt;告白&gt;

## 女装と緊縛

尾崎 俊子

南時夫さまの「女装緊縛」青柳みどりさまの「女装への郷愁」を読み本当にうれしく思いました。いつも縛られた女性のフォトを奇クで見るときに私は女になりたい女に生れたかったと思うのです。けれども現実はそのうちではありません。こうして私の願いは女装への転じてゆくのです。お化粧して真紅の腰巻、長じゅばん、色とりどりの美しい着物、やわらかなナ

イロンパンティ、ブリーフ、コルセット、スリッパなど女性だけに許された特権といえる。どんな楽しいことだろう。私もこの楽しみを味わい、それをまとうて「女になる」わずかな喜びにむせている。けれどもそれだけでは物足りない。皮膚に喰いこむくらい縛っていいじめ、責めてほしい。まるめたハンカチを口に入れ手拭で猿ぐつわをはめられ、声にならぬ歡喜のうめき声を挙げさせられることを願うのです。そして拷問を受けお仕置きされる。こんな姿を空想しながら女装被虐というか、女装悦虐を実現できる願いを高めました。

こんなとき、ふと知り合った女装同好者と一夜語りあい、次の機会にはプレーをするのを約束しました。こうして私の願いはようやく実現の一步を踏みだしたわけ

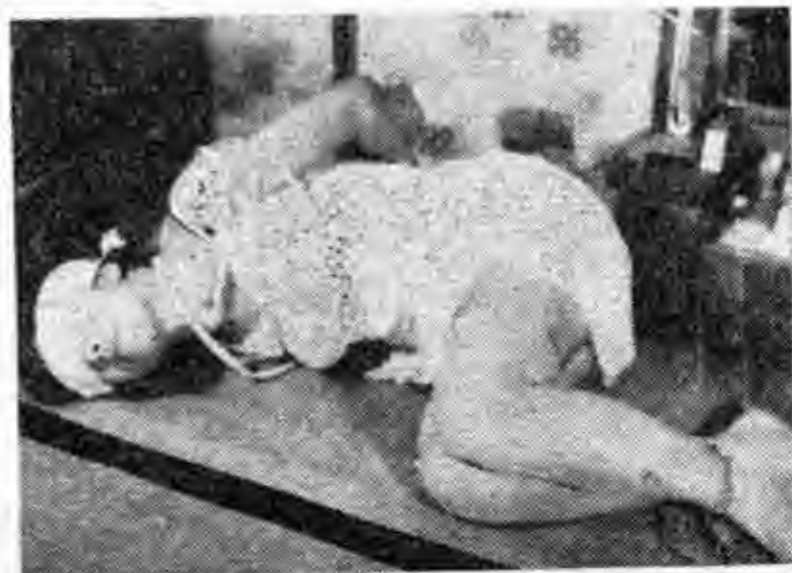
「さあ、お化粧しましょね」  
やさしい声に誘われて鏡台の前で背広をパンツをすっかり脱ぎす

て、やわらかなナイロンパンティをはきパットを入れたブラーザーをつけて。ウェストニッパード胴をしめつけ、さらにコルセットをしてスリッパを着た。それだけで私の表情は女らしい柔和さがあらわれ、お化粧にとりかかる。鏡にうつる私の顔は次第に白く塗りつぶされ、口紅をひき洋髪かつらをかぶると、自分でも見違えるような女らしい姿だ。

ワンピースを着たりブラウスとスカート・ドレスを着たりする。やっと女装できたうれしさに私に有頂天になった。

「お姉さま、お願いだから私を縛って——」

細紐を手にしたお姉さまは私の両手を後で縛りあげる。きゅっという布ずれの音につれて堅くしまり、乳房の上に二巻きしてしまうと腕に紐が喰い込む。足首も縛られエビ責めにされると胸がどきどきしてくる。そのまま五分ぐらい捨てておかれた。手がしびれて感覚のなくなっていくのが、はつきりわかり、額から汗がにじみ出て目に入ると痛いようにしみる。吐く息もだんだん荒くなり苦悶が加わってきますが、その反面、女装悦虐にひたることの出来た喜びに



むせびました。

この外、手足を後で一本の紐に縛られてから仰向けにされて凌辱されるプレーやスリッパ一枚での後手縛り、ブラジャーとパンティだけの恥しいエビ責めのまま仰向けにされた苦しさも味わいました。本当に女装で責めをうける喜びは格別でした。

なお、女装で緊縛された私の写真をお目にかけます。ちょっと焼付けがオーバーなのでみにくいかもしれませんが。今後女装の責めフオトや記事告白などぜひ掲載して下さるようお願いいたします。





# 差恥責め

## の構想

北 透

小生本誌の愛読者ですが、オシメを着用させるなど恥かしがらせる責めを愛好しています。(もともと残念ながら実行したことはなく空想のみですけど)それでオシメを用いたシーンをいくつか思いついたままに書いてみます。

「差恥責め」絵のアイデア

(一) パンティもなるべく剃きとつてしまう。(特に浴場、浣腸、ベッドへのはりつけの時、パンティがあると興をそがれること甚だし(い)もしはかせるのなら、パタフライ、サポーター様の薄いものか

あつさりとおシメカバーの様にこつちいものにしては如何?もつとも模様があつたり肌にピッタリ合つた可愛いものは従来通りで結構です。

(二) 猿ぐつわはなるべくはめる。時には目のすぐ下から拖う大きなものを。

(三) 縛りは荒々しく縛りあげたものばかりでなく、時には小さな手錠、足錠でもがくのを比較的自由にしておいていじめるシーン。

(四) 拘束衣は変つたものを工夫してほしい。乳房のみを露出させた拘束衣やら、パンティの代りに両足がいっしょになった長いズボンなど考えられると思います。

(五) 外から圧力を調節出来る様に仕掛けした風船を口に押し込めて猿ぐつわ代用としたもの。意のままに口中の風船を大きくしたり小さくしたりして拷問することができるといったもの。

(六) いましめを解こうとするとパンティやブラジャーがとれてしまふといった仕掛けのある拘束機。アメリカのこの種の絵の中には奇抜な道具立のものが多くが日本化された機械を見たいものである。(七) うすいすき透つたネグリジェで縛られているシーン。(むろん



# 逞ましき空想

森 太一・投稿

私の好きな丁稚姿、前垂れ、昆布、褌、学生姿、そんなものをミックスした理想を描いてみました。こんなコンプレックは私だけのものではなか。

ブラジャー、パンティはなし)

(一) 強制的に全身美容を受けさせられてる美女。全身美容はいろいろの題材があると思いますが、出来るだけ美容を受けている美女に羞しさを与えるといった設定が面白く、これについては、相当突っ込んだアイデアもありますので

別に書きたいと思っています。

(二) トイレ(出来るだけ汚く)にしゃがまされ排尿を強制させられる女。(首輪か或いは後手からの鎖の端を男が握っているといった構図が面白い)恥しいといった女の雰囲気をも十分に出来る図柄であればよいと思います。

## 半 股 引 考

茨城 森 田 生

半股引(半タコ——サルマタと私の故郷の一漁師町では呼んでいます)の愛用者は私だけかと思っていた所、キク三月号の読者通信で鎌倉S・A生様を、また七月号では鎌倉O・T生様を発見し言葉でいい表わせない喜びです。キク五月号読者通信で述べましたが、私は昼間はここの「半股引」を愛用

しています。丈の短い小さめの私の「半股引」は私の腰と太股をしめつけるように出来ているのでその快感は何ともいえません。

鎌倉、O・T生様

あなたが「半股引」の常用者である事をキク七月号で知り嬉しさのあまり筆をとりました。明治大正の頃ならいざ知らず、昭和の時

代に「半股引」常用者は私一人位かと今まで思っていましたのに、あなたも私と同様サラリーマンであって「半股引」の常用者であってはもうたまりません。胸のトキメキを覚えます。あなたの近くの若い巡査も「半股引」をはいているとか、心強い限りです。大工さんなどの職人や魚屋さんなどには稀にはいっている人もありますが動人などではいっている者は皆無だうと思っていた際あなたを見出し

## 連作「少女」

牧村興次・画

## 「ズベ公」

「学校一の秀才が、あたいをこんなことにするなんてネ。フン、それでも男だって言うんかヨ」  
「まあ、そうさわがなくたっていいだろ。よく俺の言うことを聞けヨ、秀の野郎のことだが……」  
「あたいは、何にも知らないヨ、うるさいネ」

本当に嬉しさと感激で一パイです私は今ピッチリとした「半股引」をはきサラシの腹巻をしシャツ一枚だけの姿でこの便りを書いています。時々自分の今着用している半股引に目を注ぎ前袋のあたりをながめやります。同時にあなたの半股引をはいた姿を想像し一度あなたが半股引をピッチリとはきサラシの腹巻をした姿を拝見出来たらと思います。そのような他人の姿を見る事の出来ない私にとってのせめてものなぐさめは、映画、テレビに時折うつる「半股引」をはいたやくざスタイルです。丈の短い半股引に愛着がありますので同じやくざスタイルでも長股引をはいた姿には全然といってよい程興味がありません。映画「潮来笠」で小林勝彦が半股引をピッチリとはきサラシの腹巻をしただけで、チャンバラをやっている場面をみた時は全く我を忘れてしまいました。あなたは映画、テレビ或は映画雑誌などにみられる半股引のやくざスタイルをどう御感じになりますか、又一般に他人が半股引をはいている姿を御覧になってどう御感じになりますか、是非承りたいと思います。







△誌上通信▽……………

## マゾ女性の願い

酒井 ハルミ

初めてお便り致します。私は自分がマゾヒスト女性である事は初めて貴誌を拝見して知らされたのでございます。草深い山村で農業に年中いそがしくしております私は、雑誌はおろか新聞も読むことはございません。

ところが、先月、しんるいの不幸で町へ出かけましたが列車の発車に一時間も間がございましたので駅前の本屋さんで何気なく手にしたのが奇巧の五月号でございました。そしてページをめくって見た私は大変おどろきました。四馬

孝様の口絵や緊縛写真が目止まった時、私の胸はとどろき全身の血が凍りついた様になり、我をわすれあやしい気持ちで見つづけたのでございます。

私は物心ついた頃より、自分が異常な心のもち主である事を知っておりまして。それは我身をせめられるとあやしくこうふんをし、それがはげしければ、はげしいほど強くこうふんするのでございます。私がまだ小学校に通っていた頃、町に見世物小屋がかかって見にいったことがあります。女

の人が首をはさまれて手を縛られて首を斬りおとされるという場面を見たとき、子供ながら、妖しい気持ちになったことを今もって忘れることが出来ません。

娘時代の私はほとんど毎日のように「もうそう」にふけていました。その「もうそう」の中で、私はいつも逞ましい男の人にいましめられ、むちうたれぎゃくたいされていたのです。

ちょうどその頃でした。私の村にいのししが出て農作物をあらして大変皆が困っていました。そこで部落でいのししのたいさくになを仕掛けることになりました。

その日の夕方、仕事を終えた私はこうき心から、いのししのわなを見にゆきました。手頃の立木の枝を切りはらい、それを弓なりにまげて針金で引っ張り、いのししの足が少しでもあたると、すぐはづれる様な仕掛になっていて其の弓にまげられた木の先たんにワイヤがわさにしていのししの首が入るようになっています。

私はそれを見るといつものくせが出てあるもうそうがはたらきました。するともうたまらなくなつて、私は両足をそろえろとワイヤのわさの中に入れ、弓にまげてあ

る針金を手で引きました。すると弓なりになっていた立木がピンとのびて私の両足をしめつけ、腰から上がつり上がり胸が地べたについて私が足をめこうともがくと、立木は上下にゆきゆきとゆれるばかりです。足首にワイヤの針金がつきたち、その苦しみは思い以上でした。それでいて私の心はやるせないほどの無上のたのしみを味わいつつ胸をときめかしたのでしたが、その後が大変でした。それは最初私が考えもしなかった事がおこりました。ただわさにしてあっただけのワイヤはすぐはずれるものと思っていたのですが、身体

の重味と立木ののびようとする弾力とでワイヤは足をしめつづけ両手で地上をつっぱり身体をささえると其れほど立木はのび、どんなにしてもワイヤはゆるまないではありませんか、その中次第に日が暮れあせるほどワイヤは足をかたくしめつけるばかりです。その中私はとうとうあきらめました。

初秋の夜気が冷たく身にしみ、ただ一人山中におかれたこどくかに泣きたいばかり、其の上淋しさとかわさに身のすくむ思いでしたが、一方私の心はなんとも言えない複雑なたのしみにいっそ、こ

のまま死にたいと考えていたほどです。一睡も出来なかった夜が明けお日様が半分登った頃、私は部落の人にたすけられました。其の時のはずかしかった事というたら一生わすれられないでしょう。其れから十七年、私は今三十五才でございます。一度結婚をしましたが、三年ほどして別れ十二才の女の子と二人で満たされない毎



## 女体切腹についての

### 私の幻想

吉田ルミ子

わが殿、お城は十重二十重に包囲されました。今晩からの寄手に私ども留守居の者は、もはや刀折

日を暮していますが、初めて奇クを拝見して私の喜びは大変なものでございます。その嬉しさのあまりふだん字の書いた事のない私がお便りをする気になりました。世の中に私の様な人が多くいるという事をしりどんなに嬉しく心強い思いがしたかたとえられないほどでございます。しかし、私が若くないという事と子供があると

いう事が淋しいのでございます。のら仕事はしてありますが私は色は白く年より若く見られます。このような中年女ですが、私をいじめて下さる人がいられるようでしたらどこへでもとんで行き一生の想い出に良き奴隷としてほしいと思います。どうか、私を責めて下さい。そして同じ思いをもっている人のお便りをおまちし

ています。

かしこ

酒井ハルミ

(広島県豊田郡本郷南方村)

追伸

もし此の手紙を本誌にのせて下さるのでしたら、えんりよなく本名と所を明記して下さいませ。

れ矢尽きたと申し上げるほかはございませぬ。殿ばらの大半は相果てました。蟻の這い出る隙間もない重囲、なお生残る老幼も私の介添えです。あの世へ旅立ちました。留守居の城主の妻として大任を果たしたい所存でございます。火薬庫へ火を放って私はこれからいさぎよく自刃いたします。

大和撫子の本懐、この上の喜びはございませぬ。武士(ものゝふ)の妻らしく、ものの見事に腹たち割って殿の御側へ参ります。さらば、わが殿。

○

バーのつとめを終えて帰宅すれば、時刻はすでに十二時を過ぎております。ほんのりとビールの酔のまわった気分、私はたった一

人で自分の幻想の実演をします。下帯をひきしめ、刃物を腹に当てたときの陶酔。あゝ切腹、何故女の切腹というものが、このように私を夢の世界にさそい込むのでしょうか。

### キングサイズ礼讃

金 藤 一

昔は柳腰が美人の要件とされ、現在でも八等身とかで一握りぐらゐのウエストを誇っているが、僕にはどうしても上げせない。やはり若い女性にはピンと皮膚のはりきった肉体的美の持主が第一番。盛り上がるような豊胸。白のようなポリウムのあるお尻。大根足は益々結構。不健康なだぶだぶの肥り方は困るが、健康的な肥満体であった

臍の穴が窪んで見えるくらい皮下脂肪ののった腹部、巨大なヒップ、二の腕だって、うんと太いに越したことはない。僕はいつも、こんな健康美あふれる女体を思いきり括りたいと夢見ている。

ら双手を挙げて賛成だ。

本誌のモデル嬢でも大塚啓子氏や桜井葉子氏なんか大好きだ。殊に大塚嬢の柔軟そうういてピンピンと縄をもはねかえすような弾力性のある肌は最も魅力的だ。

僕は元来、痩せた女性は大嫌いだ。美しい脚線美だなんかいつだって、細い胫には一向に魅力を感じない。絹川文代氏のフエイスは好きだが、胸や腹部、それに胫なんかにもっと肉があったらなあ、いつも思わされる。





## マゾ夢譚

## サジスチン・

## ベストテン

## ある奴隷志願男

文化が爛熟してくるに従ってフェミニストの男性が、ひいてはマゾヒストの野郎共が多くなると云われているが、我が国にも最近とくにこの傾向の男性が多くなったのは、そんな意味からは喜ぶべき次第かもしれません。

しかし、ここで残念なことにはそれ等あわれな野郎共の五体の上に、凛々しく立ちあがって手綱をとってくれる肝心の女王様が非常に乏しく、買手のない多種多様の人間犬人間馬が淋しくさまよっている次第。まったく遅ましい女性が多い外国がうらやましい限りですが、いきおい、そんな私達奴隷志願の夢は芸能女性の中に理想

の女王様を求めて、ひそやかな楽しみを持ちます。

そこで私はつれづれなるままに日本サジスチン、ベストテンを考えてみました。さて諸兄の御意見とマツチするか否か、ちよつと興味を持てますが……。

まず女王ベストランに日本美人の花、お富士さんの登場を願いました。この人は個人の趣味の如何に拘らずマゾ男性なら誰しも一度は、あの肉づきのよい御み足で……と願う重量感溢れる女性だと確信を持っています。

二位は男性何にするものぞ、その凄じきポリウムには、もうただただ無言で奴隷の誓いをしたくなる

良重嬢、三位には日劇から重山のり子嬢を招待しました。日本一かと思われるほどのあの美しい脚線大きい足、私達奴隷共には忘れることのできない女性でしょう。

さて、ベストスリーが出揃ったところで456位には、いずれ甲乙つけがたい若い新鮮な女王様を三人選びました。まず四位には堂々とスクリーンで世にサド女性の勇姿を見せつけて下さった大映の「痴人の愛」前作の京マチ子様。この方は現在もう若いという年令ではありませんが、映画が封切られた頃の昔を偲んであえてこのグループに入れました。

次が五位の大家真弓嬢、この人サジスチックで知性的な瞳と健康的なリズム感、私達にとってはもうたまらない魅力です。六位はその肉体的爆発的な魅力と知性とを全然感じさせないナオミ的女性の春川ますみさんを選んでみました。谷崎大先輩の推薦のこの方のポリウムは、おそらく私共には一度虐められれば、二、三日は床に臥すほどの圧迫感を持っていてそうです。

さて最後のグループとして七位にストリップ界の女王、小浜奈々子舞姫。八位にあふれるばかりの

色気とその風格で、私などもうおみ足の裏にさえも、くちづけする事はゆるされないと思うほどの月丘夢路マダム。九位に、あの様の方のペットになって朝に夕に全ての御用をおつとめしたいと願う大年増木暮美千代夫人。さぞこの方のブランドイは濃厚で大量なすばらしい年代物洋酒だろうと楽しい想像をしたりしています。

さて十位には案外こんな人が本当に、こんな性格を秘めているのではないかと考えたりする鰐淵晴子嬢を選んでみました。外国的な生活をしている彼女の事とて汚物趣味者には、こたえられない分泌物を想像したりしてはいけません。こんな十人の美女に一度でいいから。本当に。実際に。やっぱりはかない夢の様ですね。

サジスチン・ベストテン

- |    |         |
|----|---------|
| 一位 | 山本富士子女王 |
| 二位 | 水谷 良重女王 |
| 三位 | 重山のり子女王 |
| 四位 | 京 マチ子女王 |
| 五位 | 大空 真弓女王 |
| 六位 | 春川ますみ女王 |
| 七位 | 小浜奈々子女王 |
| 八位 | 月丘 夢路女王 |
| 九位 | 木暮美千代女王 |
| 十位 | 鰐淵 晴子女王 |

フエチシストの哀歓

告

白

## ズロースへの追想

並 原 新 一

私のズロース遍歴は、いつから始まったの  
 だろう。この六畳の私だけの秘かな部屋。  
 その押入れの天井の裏に、こっそり私の貴重  
 なコレクションがかくされている。誰も知ら  
 ない。家の皆が寝静まった夜更、私はカーテン  
 やドアを閉めきって、それらの品々を取出  
 す。一つ一つを畳の上にひろげて敷きつめ、  
 あるものは壁に、あるものは椅子に飾る。花  
 が咲いたような白、黒、黄、ピンク、ブルー  
 などの目も醒めるばかりの下着類。しかもそ  
 れらは、すべて女性のために作られた禁男の  
 布。私はその感触を弄び、裾口のゴムの弾力  
 を楽しむ。ああズロース！

今夜もこうして私は芳わしい宝物に取まか  
 れて蕩然としている。壁のヒモに恰好よくか  
 けられた黒ズロースと、ぶかぶかの女学生用  
 ブルマース。畳一面の綿やメリヤス、ナイロ  
 ンの白いズロースの裾口は一斉に私にあの魅  
 力的な口をむけている。かなり穿き古されて  
 汚点のついたものもある。点々と混って目立  
 つ黄色、青色のパンティ、私の手製のピンク  
 のズロースが咲き乱れている私の花園。私の  
 パラダイス。このフエチシストのひそかな喜  
 びを皆様には是非とおわかちしたいという衝  
 動にかりたてられるのは何の力だろう。花園

の主人は自分の花の美しさを誇り、その苦心  
 と努力を人に語りたくなるもの——私は恥ず  
 かしさをおしつぶしながら、遠い過去の世界  
 にひきもどされてゆく……

ある金物卸問屋の一人息子として生れた私  
 は、小さい時から体が弱く、よく病氣ばかり  
 していたように思う。蒼白く痩せた小さい時  
 の写真も残っているが、そんな肉体的な条件  
 も手伝ってか、気の弱い神経質な子供であっ  
 た。幼児期、近所の子供たちとの交遊も出来  
 ず、祖母や女中を相手に、家の中で遊んでい  
 た。幼稚園にも勿論なじめずに、すぐに止め  
 てしまった。その頃だったか、私と同じ年位  
 の女の子がよく遊びに来ていた。肥っていて  
 色の白いおとなしいその女の子は、とよ子ち  
 ゃんと云った。裏のはなれの薄暗い倉庫の、  
 そこに山と積まれている金釘の俵や、金鋼類  
 の間で、いろんなままごとをした。私は何と  
 なく「お母さんごっこ」という遊びが好きで  
 いつも、とよ子ちゃんの赤ちゃんになった。  
 俵のかげのむしろの上に、じっと目を閉じて  
 寝たふりをしていると、とよ子ちゃんが私を  
 抱いてくれた。わざとすねて泣きまねをする  
 のをあやしながらお乳を吸わせたり、おしめ



だといってチリ紙をあてがわれたりした。又「泥棒ごっこ」というのも好きな遊びで、何か悪いことをした私は、あちこち逃げ廻って最後に、とよ子ちゃんに捕る。ナワ切れでぐるぐるまきに縛られ、金網の間のせまいすき間に監禁される。私はこの時、子供心ながら何ともいえない快い気分にはたった。

○

小学校に上っても、しばらくは祖母か女中が学校までついて来た。私は級友たちの元気にとび廻っているのを、片隅でぼんやり眺めているだけだった。当時の思い出ははっきりしないが、今でも、まざまざと記憶しているあるシーンがある。私は夕涼みの納涼園で芝居を見ていた。誰と一しょだったかは憶えていないが、舞台の真前で、真白く化粧した私より三つ四つ年上の女の子だけを見上げていた。筋のはこびはわからないが、何か父親と母親に怒られたその女の子が家の前に立たされていた。女の子は、閉め出された門口の前で急に大声をあげた。――足をバタバタ地団駄ふみながら、「ああっ――。パンツがおちる！おちるわよー」お客は、どーっと笑った。そして女の子はわざと赤いスカートをあけてズロースを下げる恰好をした。「大変だ

！」と内から父親たちがとび出して来るシーンだった。私はその時、電気でもかけられた

ようなシヨックをうけた。その頃まだズロースという名前は知らなかった。私はそれから



せ「パンツがおちる、おちる」と云いながら一人で真似をしたものだった。

ある日のこと、買物から帰った母は、私を呼んで白いメリヤスのズロースを穿かせた。その日から、そのゴムでパチンとしまる下穿きが、腹まきと共に私の必需品になった。私は、はじめそれを喜んで「足でパチン」としまる「パンツ」という呼び名でそれと呼び何となく快い感じだった。しかし、学校に穿いてゆくのは、いささか嫌な気がした。体操の時間中、男の中で自分一人が違っていると意識が、私の内気さと劣等感をひどくさせた。二年生になって、すでに男女の差に興味をもちはじめてきた早熟な連中は、私のズロースを見逃すはずはない。「女のパンツ」というニックネームで、体操の時間の度に皆からからかわれた。しかし、反抗する腕力も気力もなく、私はいつも教室や鉄棒のかげに泣べそかいてひっこんでいた。どうして裾口にゴムがはいついていけないのだろう、とうらめしく思うことがあっても、家に帰るや否や、その裾口のゴムが私の遊び相手になった。それは、かつての女の子のおしめ遊びを、一人で再現して楽しむことだった。倉庫の奥や二階の片隅でチリ紙を幾重にも重ねて

はさむと、ズロースはたちまち、おしめカバーの感じになった。

何時の頃からか、私は人並みに白いキャラコの両わきに黒い線の一本はあった学校のきまりの運動パンツを用いるようになっていた。私のニックネームも消え、同時に、家でのひそかな享楽の道具も奪われてしまった。私は級友と運動したり、勉強したり、毎日毎日の激しいうつりかわりと、学校生活の間に「足でパチンとしまるパンツ」のことは忘れていった。となりの級の少女に勝手に恋をしたり、空想したり、そして次第に健康さもありもどしていった。病的な嗜好も共に失われて一人の健全な少年が生まれて来た。

## ○

私と縁のなくなったように見えたズロースが箆笥の底から出て来て驚かされたのは五年生の時だった。何かの機会に思いがけなく、かつてのなつかしい下穿きを発見した時、私の体は、わなわなと震えた。私はたちまち、そのとりこになり、母や女中にみつからないように、こっそりとり出しては穿いた。それらは、かなり洗濯のために、のびて大きくなっていて、生長した私の腰に、ちようどあつらえむきの大きさであった。私は独り誰もい

ない二階の自分の部屋で、人から手を後にまきあげられて柱に縛られている恰好を装い、苦しんで身もだえする真似をして、小説に出てくる悪漢の巢窟につれこまれていじめられている少女の錯覚におちいった。

「いやいや、放して！」あばれる私の太腿には、ピツたりと白いズロースのゴムがくいこんでいて、それは少女の脚の印象をうけた。例のオシメ嗜好も再活動してくる。私は、かなり満足して、毎日、同じ演技を繰返した。

その頃、少しずつ色気についてきた連中間では、他の級の女生徒のスカートをまくる悪戯が流行した。ことに可愛い少女は尻を追いまわされた。そーっと後にしのび寄ってパツとスカートをまくる。「わあーっ」と大声をあげてあわてて逃げてゆく姿に、私はひそかに心魅かれた。勿論、気の弱い私に、そんな真似は出来るはずもなく、友人達のをみているだけだった。いろんな下穿きがのぞかれた。中でも白くて柔らかなネルのズロースが気に入った。それは何と恰好のいい下穿きなのだろう。腰をやさしく丸く包んで裾でぴちちりとしてしまっている緑の陰影。わずかにたるんだ裾が裾口のゴムやレースの上にかぶさっている。私は夢中になって一瞬間ずつの光景



を眺めていた。しかし、やがて先生の目にふれてきびしく禁止されてしまった。私の空想はつづいた。あの中の一人をナワでうしろ手に縛り、体操倉庫に入れておく。それを四、五人の悪童がいろいろな方法でいじめる。しくしく泣いている姿の可憐さと魅力、そしてお便所にもゆるしてもらえない捕虜はズロースをぐしよぐしよにして床に坐らされている。ああ、そのズロースを手に入れることが出来たら！

私は、よく絵を描いた。空想は次々に鉛筆画にうつされて机の奥にたまっていた。とらえられ縛られた少女の絵ばかりだった。その頃の小学雑誌の挿絵に、少女が人から突き倒された絵があった。スカートの陰から、ほんの僅か毛糸のズロースがのぞいているところがあった。私はその切り抜きを大事にした。

○

小学六年生の修学旅行。人生における美しい思い出として誰もの心に深く記念されるべきその旅行は、私にとっては、又、素晴らしい記念となった。

旅先の旅館での蜂の巣をついたような騒々しさ。風呂に入る時は全く戦争のような、さわぎだった。私はつい皆からおくれて風呂

から上った。その頃、みなわれがちに部屋にもどって夕食にとびついていてた。私も急いで廊下に出た時、となりの女風呂の戸が開いていた。こっそりのぞいてみると混雑のあとらしく衣類かごが、ちらばっていた。私は頭をつつこんで見まわして、ぎくりとした。何か白いものが残っている。ズロースだ。女子組の誰かが、あわてて忘れていったものらしい。生まれてはじめて手にした女のその湿っぽいズロース。メリヤスのやわらかい手ざわり。

これこそ真正銘の女物だという感動は私を茫然とさせた。誰のだろうという好奇心。二つ三つ、顔が浮んだ。きれいな女生徒のものなら！私は憑かれた様に夢中でそれに足をとおしていた。人のけはいがした。私は、あわててそれをまるめてカゴの中になげこんだ瞬間、ガラス戸を開けて、となりの組の女の子がとびこんで来た。私の腰を宙にうかした不恰好な姿勢。相手も驚いて赫くなった。私はつばをのみこむ。目の前がぼーっとかすんで心臓は早鐘をうち、今にも卒倒しそうだった。こそこそとそのズロースをまるめて逃げていった女生徒の後姿をぼんやり見送りながら、私は助かったと思った。あの下穿きの手触りは子供心に深くやきつけられ、その後、

幾度となくその女生徒の幻影に悩まれたものである。勿論、私の女風呂での変なそぶりは誰の耳にもはいらずにすんだ。

○

私も生長した。商業学校と工業学校を迷ったあげく、父のすすめで工業を受験した。思春期に入り、丈も高く、声変わりして、にきびの出かかった私にとって、学校は勉強の場というよりも性教育をうける場所であった。早熟な連中は、たのもしないのいろいろな性的な知識を授けてくれた。その頃聞いた一語々々は全神経のしびれるような体のうずきを生み、激しい欲求のやりばをもてあました。それにも増してズロースへの憧憬は炎のように激しくもえ上り、気も狂うような焦慮にかりたてられた。勉強部屋の机で、辞書という辞書のズロースの項は調べられ、いつしか手垢でその頁はしみがついた。衣料品、雑貨店のズロースの山。大きな看板。そして私の激しい衝動の均衡が破れて、あと一歩前進する時が来た。それは、ある秋祭りの時だった。母から小遣いをもらったのを手にして町に出た私の足は、いつしか、いつも通学の途中にみながっている市場の露天商の方に向っていた。せまい戸板の上に清潔な純白のズロースを大

小、山とつみあげてあるその店は、周囲の混雑にまぎれて、あまり人目につかない恰好の場所であった。私は、はやる心をしずめ、息をのんでその店に立った。声が出ない。ただふるえる汗びっしりの手で、だまってその一枚を指さすだけが関の山だった。もしその老婆が何か不審を示したら、飛んで逃げたかもしれない。幸いに、だまって一枚つつん

でくれた。中学生の私とズロースという奇妙なコントラストに気付いて立止ってみている者もいたかもしれない。私には、もう何も見えず何も聞えなかった。ただ夢中で、宙にういたような足どりで歩いている自分に気がついたのは、それから数分たってからである。ああ、私のものになったズロース。早速、家の便所の中で穿いた時、久方ぶりに太腿をき

ゆっとしめつけるゴムの感覚の快さに恍惚となった。一晩中、寝床の中で、その裾口をなげきすって眠れなかったものである。

それは大切に本箱の奥にいつも納めて置かれた。学校から帰ってそれを相手に私のひそかな遊びがつづき、やがてポロポロになるまで穿き古された。私は鏡の前で何枚も自分の姿をスケッチしたり、手拭をその中であてが

って尿をもらして楽しんだりした。その感覚は堪らない喜びであり、そのあとそのズロースを壁にかけて眺める楽しさも又、格別だった。女性が自分の下穿きを生理的な欲求を我慢しきれずに遂に濡らすという空想は、私の神でもあった。壁にそのぐしょぐしょにぬれた神をまつて、信徒は涙を流してその前にひれふすのだった。

この時期の私の生活は、全くこの一枚のズロースに縛られ、執着し、その煩惱に明け暮れしていたといっても過言ではない。初めて自分の所有物にした宝物の印象は、おそらく一生、私の脳裡から消えないだろうし、私のフェチリストとしての、その後の方向が決定された意味は重大であった。今も時





々自分に問いかけることがある。「お前は何故、そんなものに魅惑され、そんなに心を動かされるのか？」と。その答はわからない。私が女の姉妹を一人も持たず、女性的なものが一切珍らしく、好奇心をそえられるからだと考えたこともあった。又あるいは前にも述べたように、私の幼児期の強い性的な印象が原因であるのかも考ええる。異常性欲はあるいは遺伝なのかもしれない。父はいつもネルの腰巻きをしていたということに、すでに私の血の中にそんな傾向が生まれる前から決定づけられていたのかもしれないと思うが、よくわからない。最近ある本を読んでいたら次の記事に出会った。

「フェチシストの二つに分裂した心の中には女の去勢が問題になっている。即ち、フェチシストの成立するには、去勢を認めようとする心と、それを認めたくない心が、同時に含まれているのである。現に女のズロースを崇物とするある男は、それを男のパンツのようにして穿いている。このズロースやパンツは本来の男女の違いを包みかくしているものである。精神分析をしてみると、この男にとつては、このズロースをパンツの代りに用いることは、女が去勢されているということだけ

でなく、女が去勢されていないということも意味していたのである。そしてその上、男の去勢ということも仮定していたのである。何となれば、総て、これらのことはズロースの陰にすっかりかくされてしまうからである」

これは有名なフロイドという学者の精神分析の話であるといわれるが、私は全くのところ、ズロースという言葉にひかれて読んだだけで、それ以上の意味は、皆目解らない。私が自分の身にたずねて私なりにこれを解釈してみるなら、フェチシストというものは、去勢ということをも認めたくない人々のことで、女性が去勢されているということをも認めたくないために、ズロースでかくしているという意味なのか。現に私は、今のところ女性に対してその性的な興味は余りなくて、むしろ男性に対して親しきをおぼえる性質である。女性が恐いといっても過言でない。私はきつと自分でズロースを穿いて自分の中に女性を見出して、その女性に心を動かす男性の役を演じるという一人二役をやっているような気がして心をひかれないのだろう。時々自分のズロース姿を写真にうつして自分で現像することもあるが、その時、私の腹から下は全く女性そのものにみえて満足する。もう一

つ、私の考えがある。それは何かしら排尿に対する私の興味である。前にもかいたように小さい頃から赤ちゃんごっこが好きで、いつのまにかそれがズロースと結びついてあらわれるようになっていた。ズロースを穿いて充分にその姿を楽しんだあけくは、必ずそれを排尿で汚してしまわないとおちつかないのである。これは、きつとズロースがおしめカバーに似ているので、そんな連想が出てくるのだろうと考える。まだある。私は人々から（特に女性から）いじめられたという願いをもっている。この場合、肉体的な暴行とかいうものよりも精神的ないじめをうけてみたい。その道具として、いつもズロースが用いられる。私は自分のズロース姿を人の前にさらして、皆からかわれたり軽蔑されたりしてみたい。そんな心理から、よく風呂屋やあんまに、ズロースを穿いてゆく。その際の人々の視線の中に快感を感じとる。もし誰かが「あゝあいつは男のくせに、女のズロースを穿いている！」と叫びでもしたら、あるいは私は気絶するようなショックと同時に、しびれるような満足をおぼえるかもしれない。それなら、どうして私のズロースの興味はぶかぶかのブルマー型が強くて、パンティや

ブリーフでは少いのかりきつとこの心の底には、なるべく女性的な下穿きを着きたいという私の願望がひそんでいるのだろう。最近ではデパートに並んでいる下穿きで男物と女物の区別のつきにくいものもある。パンティ、ブリーフの裾口にゴムが入っていても女性用とは限らない。この不満が私を赤色やピンク、レース付きという絶対に男性用ではみられぬ型の下穿きにおいたてていったのだろうか。又、ぶかぶかのブルマー型なら、絶対に女性用であることは、まちがいない。それともあるいは、私の初めて穿かされたり、興味をもったズロースがその型であつたからなのだろうか？自分の心理位、よくわかっていそうで又わからないものはない。このズロースの問題について私は殆どわかっていない。

## ○

二年生の時、製図の実習中、重い鉄板をとりおとして右足を負傷し、一カ月間、市立病院に入院したことがある。幸に傷は骨にひびが入った程度のものでギブスで固着されているうちに治った。その回復期の退屈さと、病院というはじめての場所の魅力は楽しい思い出をのこしている。ホータイ干場のとなりに患者用の物干場があり、私は毎日、二階のベ

ランダから、そこを眺めては、白、黒、時にはピンクの下穿きを楽しむことが出来た。若い女の人がそれらを干しにくる時の表情を観察したり、又、それらの乾いたものが穿かれる時の妄想をたくましくした。歩けるようになって散歩している時、黒くて小さい布が干してあり、中からアメ色のうすいゴムがはみ出していた。これがメンスパントだとわかった時の驚き。ある退院の近い日の夕方、命がけでこっそり一枚を失礼して来た。穿くとバリ音をたてておしめカバーを連想させるそのバンドは、私に又、強い刺激を与えた。

私のコレクション。町中をうろいて小遣いのゆるす限り、さまざまのズロースを買漁つて来た私の貧欲な欲求は、すぐに新しい刺激を求め、ズロースあつめの冒険とスリルをたのしんだ。しかし気の弱い私にとって、それはかなり困難なことで、まして他所のものをだまって盗んでくるということは出来ず、又、そんな機会もあるものでもなく、すべて自分の金で苦心して買求めることだった。色模様のものが無性に欲しくなった時は、遂に布地をもって小さな仕立屋に注文にいったこともある。

又、飽いてしまったものは縫目をひき裂か

れ路上にこっそり捨てられた。誰の目にもふれる町角に私のズロースが風にころころがったり、塀の前にまるめてすてられているということは、何となく楽しいことだった。

トリコット、ナイロン類の下穿きの感触の魅力もすてがたい。

不良少女か誰かが私を襲って、私のズボンめがしてくれたら！その下から美しいピンクのナイロンのパンティがあらわれた時の相手の驚き。そして私は、女物を侵犯した罰に縛られて折檻をうけるなら！

私の夢はつきなかった。女学校の寄宿舎でどう問をうけている私。幾重にもおしめを穿かされ、ゴム引きのカバーを不恰好にあてがわれてみなの前をひきづりまわされる私！濡れたオシメのまま幾時間も苛められる私！そして満たされぬ夢に一人で二役を演じながら、空しくズロースの数を数えるだけ。

現在二十五才のY製鉄工場につとめている私の喜びと悲しみはつきない。もう夜が白みはじめた。私の花園の夜咲く花は再び閉じなければならぬ。

「奇ク」の皆さん、さようなら。最後にフェチシストの哀歓を理解される方は、もっとどしどし発表されることを願ってやみません。